

ECONO FORUM 21

No.22
March 2016

特集

大阪都構想



ECONO FORUM 21

2005年、エコノフォーラムは『エコノフォーラム21』という名前に変わりました。

エコノフォーラムは、もともとゼミを中心とする経済学部の活性化の「広場」でした。しかし、10年を経て、わたしたちは21世紀の世界経済と日本社会をもっと確実な「目」で捉え、経済学部から新鮮な発想で社会に向けて提言できれば、と考えるようになりました。『エコノフォーラム21』は新たな世紀にふさわしく、学生と教員、さらには一般市民をも巻き込んで様々な声が響き合う広場を目指します。

No.22 March 2016 CONTENTS:

- 2 巻頭言／田中敦
- 3 特集 **大阪都構想**
「大阪都構想に賛成か反対か」では大阪問題は解決しない／林宜嗣
二重行政の問題と大阪都構想／吉田悦教
「大阪の成長戦略」を考える／入江啓彰
- 10 **エコノフォーラム座談会**
「大阪都構想とこれからの関西」
- 24 **シリーズチャペル<経済と人間>**
豊原法彦・高林喜久生・猪野弘明・山鹿久木・井口泰・新海哲哉・
林宜嗣・本郷亮・平山健二郎・栗田匡相・野村宗訓・藤原憲二
- 36 **シリーズチャペル<人間を考える>**
舟木讓・Timothy Dale Boyle・藤田友尚・田禾・古澄英男・神崎高明・
白井洸志・原田哲史・森田由利子
- 45 **シリーズチャペル<経済と倫理>**
井口泰・藤井和夫・西村智・山鹿久木
- 49 **チャペル講話 卒業生を覚えて**
充実した人生を！／田中敦
- 50 **退任教授最終チャペル講話**
思想の自由を守りましょう／Timothy Dale Boyle
- 52 **基礎演習：論文一覧**
- 66 **研究演習Ⅱ：ゼミの総括と卒業論文一覧**
- 81 **経済学部懸賞論文**
- 82 編集後記
- 83 経済学部棟の紹介

圧迫面接より厳しい教育

経済学部長 田中 敦

就活が一段落して、4年のゼミ生と飲み会を開いたときの事です。就活の様子を、彼らに聞いてみました。

「就活で、圧迫面接ってあった？」

「もちろん、いっぱいありました。」

「大丈夫だった？」

「ゼミでの先生のツッコミに比べれば、大したことなかったです。」

「あら～（汗）」

ゼミ生の説明はこうでした。圧迫面接は意図的にやっているもので、語調は怖くても内容に無理があり、「これくらいなら論破できるな」と内心思うことが多かったそうです。一方、ゼミ発表についての私のコメントは研究内容の本質を突くものが多く、その場での語調は優しくても、後からじわっと効いてきて怖いそうです。

私がいつも本質を突くコメントを言っているかどうかは別として、この話を聞いて「すばらしい!」と思いました。というのは、彼らは人の話を冷静に聞いて論理的に考える力を身につけて、就活などの実践で活用できていくことになるからです。

経済学部生には、もちろん経済と経済学を学んで欲しいと思いますが、それと同時に物事を冷静にみて論理的に考える力も是非修得して欲しいと思っています。論理がどういうものかは、大学生であれば誰でも知っていると思います。でも、知っていることと使えることとは全く別です。とくに2、3行の短い話ではなく、数ページ以上にわたる論文・レポートや数十分の発表となると、全体の流れで筋が通っていないことがあります。

たとえば、学生が今の銀行の問題点から今後の経営戦略を論じる研究をしていたとしましょう。その学生はまず問題点について一生懸命調べ、つぎに経営戦略について一生懸命調べます。ところが、それぞれを調べているときに、この研究の全体の筋を考えていない。すると、本来は問題点を解決するような経営戦略を考えなくてはいけないのに、指摘した問題点と考えた経営戦略との間にあまり関連性がないということになってしまいがちです。その学生も私が指摘すれば分かって

もらえるのですが、指摘されないと気づかないことが多々あります。

このように論理的にちゃんとした議論を展開することに加えて、経済学部生であれば経済学の理屈を使って論理的に考える

ことも重要です。たとえば、経済理論では直感的なものと違う結論が導き出されることがあります。有名なのは、「国民皆が貯蓄を増やそうとしても増やすことができない」という合成の誤謬でしょう。他にも、破綻した企業を救うと事態が悪化することがあるとか、人々が合理的に行動するとバブルのように間違った結果が出るということがあります。

理論だけでなく、データに基づいた議論も大切です。たとえば、日本は貿易立国であると言われているのに貿易依存度と呼ばれる数値は高くありません。異次元緩和で経済におカネがジャブジャブ出回っていると言われますが、実際に出回っているおカネは年3%ぐらいしか増えていません（マネーストックM3、2013年4月～15年12月）。日本にとって貿易や異次元緩和が重要ではないと言いたいのではなく、これらのことを議論するためにはもっと深く知らなければいけないということです。さらに、数値の大小を比較するときは統計的な検討が必要ですし、数値は平均だけでなく分散も大切な場合が多くあります。

経済学部では、このように論理的に考えることや経済学を使って考えることを、日々の優しくも厳しい教育を通して学んでいただいています。『エコノフォーラム21』はそういった学びの記録であり、そういった学生皆さんに読んでもらいたい記事も学生や教職員が書いています。発行にご尽力いただいた方々に感謝するとともに、多くの皆さんに楽しんで読んでいただけることを願っております。



特集

大阪都構想

2015年5月17日、いわゆる「大阪都構想」の是非を問う住民投票が大阪市で行われましたが、それから2週間ほど経った5月末に、私はたまたま滋賀県彦根に行く機会がありました。JR彦根駅から北東方向を眺めると、1キロほど先に「佐和山」を眺めることができます。その山の頂にはかつて、関ヶ原の戦いにおける西軍の総大将・石田三成の居城（佐和山城）がありました。その本丸跡に立ち、私は「三成さん、都構想の住民投票は否決されましたが、あなたはどう思いますか？大阪はこれからどうなっていくでしょうか？」と（思わず！）心の中でつぶやいたのです…。

というのも、住民投票が行われた2015年は、大阪夏の陣（1615年）の400周年、すなわち大坂城落城400周年にあたる年ですから、当初私はてっきり、反骨精神に富む大阪人を奮

い立たせるために、すなわち大阪人にとっての辛い歴史を改革のテコにするために、あえて「2015年」が選ばれたに違いない、と睨んでいたからです。しかしそういう狙いはなかったようです。日本史が大好きな私の単なる妄想でした！

さて、本誌『エコノフォーラム21』が今回特集するのは、この大阪都構想です。周知のように住民投票では「反対」が「賛成」を僅かに上回りましたが、本誌は賛成・反対のいずれにも肩入れするつもりはありません。むしろ国民の一人として特定の政治的見解を持つことは重要であり、民主政治における「国民の義務」であると言ええるでしょう。しかし本誌は、可能な限り、政治的中立を守り、学問的議論に徹しなければならぬ。これが、この問題に対する本誌の基本的スタンスです。

大阪都構想には多くの論点が含まれるため、単純に賛成・反対と割り切ってしまうような問題ではないと思われまます。個々の論点を細かく丁寧に、冷静に考察する必要があります。すなわち、そもそも大阪にはどんな諸問題が存在するのでしょうか？またその解決にはそれぞれどんな方法が最善なのでしょうか？これらのことを調べて整理せずに、都構想の賛否を語るのには、あまり生産的ではありませんよね。

（編集担当…本郷亮）

「大阪都構想に賛成か反対か」 では大阪問題は解決しない

林宜嗣 教授（財政学）

1. 制度改革は目的ではない

制度改革は、何のための改革なのか不明確のままに進めても良い答えは出ない。目指すべきビジョンは何か？そのビジョンに沿った具体的な目標はどのようなものか？目標に照らして現状のどこが問題なのか？その問題を解決するためにどのような戦略が必要で、その戦略としてどのような政策が求められるのか？その政策は現行の法制度では実行不可能なのか？不可能だとすれば何をどう変えれば良いのか？制度改革とはこのようなものだ。

しかし、最近の傾向として、制度改革自体が目的化し、何のための改革なのかとづけられることが多い。大阪都構想やそれをめぐる議論も例外ではない。地域を取り巻く環境は大きく変化し、現行の大都市制度が時代に合わなくなっていることは事実だ。しかし、具体的な目標や目的を持たないままに制度改革論を展開することは、時間や資源の浪費であり、市民の幸福には結びつかない。大阪都構想をめぐる議論

の何が問題であったのかについてはチャペル（経済と人間）で話をし、その要約が本号に掲載されているので、そちらを読んでもらうこととして、この論考では、大阪が抱える課題をとりあげ、大都市制度はいかにあるべきかを考えることにしよう。

2. 大阪都構想と特別自治市構想

「大阪都構想」は大都市制度改革の一つの選択肢である。この選択肢の対案として、政令指定都市の市長会が提案してきた「特別自治市構想」がある。制度上、政令市と呼ばれる大都市は、例えば神奈川県には横浜市、川崎市、相模原市の3市、大阪府には大阪市、堺市の2市、愛知県には名古屋市の1市というように、現在では全国に20存在する。

これらの政令市は他の市に比べて行財政上の権限は大きくなってはいるものの、「市」であることには変わりはない。しかし、政令市は人口、経済、財政規模が大きく、行政能力が備わっていることから、府県との関係は必ずしも良好で

はない。とくに大阪は歴史的にも府市の対立が目立っていた。都構想も特別自治市構想も、道府県と政令市の二層構造になっている自治体構造を、おおざっぱに言えば一層構造にしようとするものである。しかし、両者が求めている方向は真逆である。

大阪都構想は、大阪市や堺市といった政令市を廃止し、大阪府（都）に吸収しようとするものだ。つまり、現在の「大阪府大阪市○○区」を、「大阪府（都）△△区」という具合に、東京都と同じ構造にしようとする。「○○区」は行政区と呼ばれ、あくまでも大阪市の区割りであるのに対して、「△△区」は自前の税源を持つたり、区長が選挙で選ばれたりと、一つの地方公共団体の性格を持たせることを考えている。これに対して特別自治市は、大都市は府県と同様の行政能力を持っているのだから府県から独立させようとするものだ。

しかし、両構想はいずれも、二重行政の排除、行政経費の節減、受益と負担の一致といった現在の行政の守備範囲を前提とした改革案であ

る。マスコミも、住民サービスは良くなるのか？行政効率への効果はどうか？といった行財政の視点で大都市制度改革をとらえている。東京一極集中が進む中、大阪、関西をどのように再生させるかという視点からの改革は見えず、大阪経済の活性化は企業誘致、観光振興、カジノといった個別の戦略に頼っている。しかしこれらの戦略効果を最大限に発揮させるためには、どのようなガバナンスやマネジメントが必要であるかを大都市制度改革の焦点に据えるべきである。

3. 中心都市と周辺都市は運命共同体

大阪市には毎日、100万人以上の人が通勤目的で流入している。堺市の9万6、063人を最大に、5万人以上の通勤者を大阪市に送り込んでいる自治体は吹田市、豊中市、東大阪市という大阪府下の市だけでなく、西宮市(兵庫県)のように県境を越えて存在し、大阪府以外からの通勤者は全体の44%に達している(05年国勢調査)。大阪市は周辺地域に雇用や消費の場を提供することで都市圏の中核性を発揮しており、大阪市の経済機能が衰退すれば、その影響は大阪市に通勤者を送っている周辺都市の人口減少にも直結する。

生活に必要な要素は「働く場」だけではない。大阪市に限らず大都市は職場の提供の他にも、消費、娯楽、教育、医療など、さまざまな側面で地域における中核的な役割を果たしている。大阪市の中心部に超高層マンションが相次いで建設され、その結果、大阪市の人口は増加している。しかし、これは大阪市の中枢業務機能の低下によるオフィス需要の減少と地価下落のな

せる技といえよう。たしかに、居住地で課税される住民税が大きな税収源になっている現行地方税制度では、居住者の増加は大都市自治体にとってもありがたい。しかし、東京一極集中の中で人口が減少している大阪都市圏においては、中心都市と周辺都市とが人口の取り合いをしている場合ではなく、大阪市が業務中核性を維持・発展させ、圏域全体として競争力を強めることが不可欠である。大阪市が大都市圏域における中核性を維持することは、周辺都市を含めた大阪都市圏域全体の盛衰にかかわる課題なのである。

しかし、100万人に達する通勤流入は周辺都市が担う生活機能があるからこそ可能になっている。大阪市の強みは周辺部に快適な居住環境を備えた都市が存在していることである。郊外部の住宅地は住民に対して多様な住宅の選択肢を提供している。居住環境は住宅にとどまらない。教育、福祉、文化をはじめとした行政サービス、自然環境あるいは郊外にある洒落たレストランなども居住環境を形成する重要な要素である。このように、大阪市と周辺都市とは運命共同体なのである。

4. 真の地域連携を実現することが大都市制度改革の最大のテーマ

このように考えると、大阪が活性化するかどうかは大阪市とその周辺都市との連携の成否にかかっているといっても過言ではない。現在でも自治体連携のための制度は存在する。しかし、一部事務組合をはじめとする広域行政制度の主な目的は行政の効率化や経費の節減だ。これからの自治体連携は、政策効果の最大化を目的と

して戦略的政策を作成し、各自治体が役割を分担する方式に転換するものでなければならぬ。

イギリスにおいて自治体連携を積極的に進めてきたのが、マンチェスター市をよびその周辺部を含むグレーター・マンチェスター(以下、GMとする)だ。GMの主要な仕事の一つは都市交通(トラム)の運営である。トラムの路線は全構成自治体に広がっているわけではない。にもかかわらず全自治体が共同で運営しているのは、企業や高い技術を持つ労働者にとってマンチェスターをより魅力ある都市にすることは、新たな雇用機会や新規投資を生み出すことを通して隣接地域にも利益をもたらすと考えられたからである。その他にも、構成自治体が所有するマンチェスター空港の拡張を進めるなどの実績も上げている。GMは依然として深刻な貧困の存在といった課題を抱えているものの、地域の人口減少に歯止めがかかり、イングラドの他の主要都市よりも高い所得水準を実現している。マンチェスターのこうした経済的な奮闘の背後に強い地域連携が存在していることは十分に考えられる。

マンチェスターが地域連携によって活性化を図っているのと同様、大阪も新たな地域連携を実現する道を真剣に模索しなければならない。それは、政策にともなうリスクや責任を分配することによって圏域全体の利益獲得を達成することであり、そのためには各自自治体は圏域全体の発展ビジョンと資源を共有し、自らの活動を修正しながらパートナーの能力の向上を図らなければならない。大阪市の将来像をめぐる議論は「大阪都構想に賛成か反対か」ではないはずだ。

二重行政の問題と大阪都構想

吉田 悦教 教授（法学部）

1 はじめに

平成27年5月17日に行われた所謂「大阪都構想」の是非を問う住民投票では、僅かに0.8ポイントだけ反対が上回り、当面、大阪府と大阪市の行政体制は現状維持となった。

今回の大阪都構想は、「大都市地域における特別区の設置に関する法律（大都市地域特別区設置法）」に基づき、政令指定都市である大阪市を特別地方公共団体である5つの特別区に、大阪府を大阪都に再編し、これらの特別区と大阪府の税財政制度や事務事業の分担を、現在の東京都制（東京都及び23特別区）にならって見直すものであった。（なお、大阪府を「大阪都」と名称変更するには別途法改正が必要である。）この構想の目的の1つは、大阪市と大阪府の「二重行政の問題」の解消であるが、今回は、この「二重行政の問題」とは何かを考えてみよう。

2 二層制と二重行政の問題

現在の日本の地方自治制度は、政令指定都市、東京23区を含め、どの市区町村の住民であつても、必ず47都道府県のいずれかに帰属する「二層制」の体制をとっている。このため、広域行

政等を行う自治体である都道府県と、住民に身近な基礎的行政サービスを行う自治体である市区町村は、各々の自治体の性格に応じ、法令等に基づく様々な事務事業を実施している。なお、都市化が進んだ市では、都道府県の事務事業の権限の一部が移譲され、中核市や政令指定都市になっている場合があるが、二層制の原則には変更はない。

こうして役割分担された都道府県と市区町村の事務事業であるが、例えば、自治体の警察事務のように、法令により都道府県の事務事業とされ、市区町村が実施できない事務事業では、二重行政が生じない。しかし、例えば、学校（高校・大学）、体育館、図書館、水道事業、公営住宅等の施設設置等の分野の事務事業は、都道府県と市区町村が、各々に役割分担された事務事業の範囲内でその実施が可能であり、その意味での二重行政は必ず生じる。

ここでは、こうした二重行政のうち、「市区町村と都道府県の各々が、同様の事務事業を別々に実施することで、結果として、行政全体の非効率が生じる場合」を「二重行政の問題」と呼び、次に、その発生過程、発生条件等を整理してみよう。

3 四人のジレンマと二重行政の問題

最初に二重行政の問題が生じる簡単なケースを想定してみよう。まず、ここにA県知事と、A県の人口の3割を占める政令指定都市の県庁所在地のB市長がいる。2人はそれぞれ、同規模のA県立図書館とB市図書館を、B市内に、任期の4年間の間に完成することを公約に掲げ当選した。A県知事は、二重行政の問題の回避のため、A県とB市の図書館の共同設置を提案し、B市長との協議を開始した。しかし、A県知事は、もし、この協議があつたら1月以内に調わなければ、工期等の関係で任期内の図書館完成は難しくなることが気にかかっている。また、仮にあつたら1月以内にB市長と協議が調つたとしても、その後、B市長が単独設置を強く望む支持者からの要請により、協議成立後にこれを破棄する可能性があることも心配している。悩んだ末、A県知事は協議の中止をB市長に申し入、図書館の単独設置を決断した。しかし、B市長もA県知事と同様のことを考え同様の行動をとろうとしていた。このケースは、2人の4人が、別々に取り調べを受け黙秘か自白を選ぶ「四人のジレンマ」という有名な命題に似ている。四

人のジレンマでは、例えば、双方が黙秘すれば禁錮1年、片方の囚人が先に自白すればその囚人は無罪でもう一方の囚人は禁錮5年、双方が自白すれば禁錮3年という条件下では、双方が自白を選択するとされる。また、仮に2人の囚人が事前に双方の黙秘を合意しても、取り調べが始まると、この口約束は破棄され2人とも自白し、本来、双方が黙秘をする状態が最も得であるにもかかわらず、結局、両方とも自白を行ってしまうことも知られている。今回の図書館のケースでは、黙秘が「共同設置」、自白が「単独設置」に相当し、双方が共同設置ではなく単独設置を選ぶことになる。なお、囚人のジレンマでは、囚人が自白をすればマフィアに家族が殺されるといったような罰則があれば2人の囚人は黙秘を選択するとされるが、今回のケースでは、同様の罰則は考えにくい。なお、A県知事とB市長の間に、過去からの個人的な信頼関係や政治的な同志である等の関係がある場合などは、これらの特殊な関係が、罰則と同様の働きをして、最終的に双方が図書館の共同設置を選択する可能性はある。したがって、二重行政の問題は、市町村と都道府県の双方に、こうした特殊な関係がある場合を除き、両者の協議や相談では、その解消が難しいことが予想される。では、次に、どのような場合に二重行政の問題が生じやすいかを考えてみよう。

4 予算規模と二重行政の問題

都道府県や市町村の事務事業の多くは財政支出を伴うため、市町村の予算規模が一定以上の

規模であり、例えば、都道府県と同規模・同レベルの事務事業の実施や公共施設の設置が可能でなければ、二重行政の問題は生じにくい。逆に、予算規模の大きい大都市の設置する施設は、都道府県の同様の施設と同規模・同水準の施設とすることが財政的に可能であり、二重行政の問題が生じやすい。したがって、今回の大阪都構想では、大阪市を再編して設けられる5つの特別区の個々の予算規模は、当然、現在の大阪市全体の予算規模より小さくなるため、各特別区と大阪の間では、現在の大阪府と大阪府間のような二重行政の問題は新たに発生しにくい。(ただし、既存の施設などで既に生じている二重行政の問題をどう解消するかといった問題は残る。)

なお、二重行政の問題を根本的に解消する方法の1つとして、都道府県の全ての事務事業と市町村の双方の事務事業を行う「特別市」を設ける構想がある。この構想では、特別市のエリアでは、二層制ではなく一層制となるため、二重行政の問題は生じない。(なお、特別市制度は、戦後、地方自治法に存在した時期があったが、既に廃止されている。)

5 施設等のオーバースペックと二重行政の問題

最後に、二重行政の問題を招きやすい「オーバースペック」について指摘したい。これは、現在、大阪市の大阪歴史美術館や科学館などのように、市外在住の利用者が7割など、その利用者も多くが市外在住者である社会教育施設の規模や水準の問題である。従来、こうした市外

在住者の施設利用が多いという問題は、大都市の昼夜間人口比率の高さにその原因が求められてきた。しかし、こうした施設のなかには、例えば、その利用者を市内在住者に限定したり、あるいは、市外在住者には住民より非常に高い利用料金を課したりすることで、市外在住者の利用者をゼロにしたり大きく減らすことが可能なものも多い。むしろ、この問題の本質は、大都市が設置する施設が、その設置時点で市外在住者を利用者として見込み、必要以上の規模・水準の「オーバースペック」仕様のものとなっている点にある。(ただし、交通、道路、公園、ごみ処理などの施設や行政サービスなどは、市外在住者の利用の排除等が困難であり、全ての施設にこのオーバースペックの指摘があてはまる訳ではない)大阪都構想が実現すれば、前述したように各特別区の個々の予算規模が現在の大阪市より小さくなるため、区外在住者の利用を含めたオーバースペック仕様の施設等の設置は財政的に難しく、二重行政の問題は生じにくくなる。

6 おわりに

大阪都構想が、二重行政の問題の解消に資する面があることは否定できない。一方で、二重行政の問題の解消という観点からみると、現在の都道府県と市町村の具体的な事務事業の役割分担の在り方をもう一度見直し、両者が重複して実施可能な事務事業の範囲を再整理するという手法も有効であろう。

「大阪の成長戦略」を考える

入江啓彰 氏（近畿大学短期大学部）

「うるさい、きたない、おどろおどろ、フレンドリー……」

これは、私のゼミ生に「大阪のイメージ」について尋ねた結果です。他の調査でも、例えば2011年に法政大学大学院坂本研究室が発表した「47都道府県幸福度ランキング」によると大阪府は最下位、また寺島美郎氏・日本総合研究所による『2014年版全47都道府県幸福度ランキング』でも43位。大阪府民としては、非常に残念な結果になっています。

また時代をさかのぼって、1990年に刊行された高井眞・橋本徹編『大阪経済のダイナミズム』（関西学院大学産研叢書）を見ますと「大阪経済の不振と地盤沈下が指摘され、抜本的な対策の必要が痛感されてからすでに久しい」とあります。四半世紀前から、いわゆる「大阪問題」が指摘されていたのです。大阪府の経済規模（名目府内総生産額）を長期的に見ると、47都道府県中で東京都に次ぐ2位の座を長らくキープし続けていますが、成長率は他地域に比べて相対的にゆるやかになっています。大阪府経済の全国に占めるシェアは、大阪万博が開催された1970年度には10%を超えていました

が、以降は低下傾向が続き、2013年時点では7%にまで低下しています（大阪府民経済計算平成25年度確報による）。一人当たり県民所得では、大阪府は90年代前半まで東京都に次ぐ2位でしたが、90年代後半から順位を落としており、全県データが得られる最新時点の2012年度では10位となっています。経済は停滞し、人口も企業も東京に吸い取られて集積力は低下、財政は府と市の二重行政に代表される非効率から負担はかさむ一方で、住民を取り巻く生活環境は改善せず様々な問題が残されたままなど、大阪の経済・社会問題は山積し、それらが悪循環の様相を呈しています。

この「大阪問題」をめぐる、2015年に大阪市民を対象として行われた住民投票や首長選挙で議論となった大阪都構想については、三つの論点があります。すなわち「都市の成長に関わる広域行政をどうするか」、「身近な住民サービスをどうするか」、そして「広域行政と住民サービスを誰が担うのか」という点です。一点目の広域行政では、鉄道・幹線道路・港湾など社会インフラの整備や企業誘致など、長期的な成長戦略が求められます。冒頭で述べた都

市のブランドイメージの改善もこれに含まれるでしょう。二点目の身近な住民サービスは、住民のニーズへのきめの細かい対応が求められます。現在の大阪市では人口が多いため、行政の眼が必ずしもすみずみまで行き届いていないと指摘があります。この点について大阪都構想では、大阪市を分割し人口規模を小さくした特別区が住民サービスを担うとしています。三点目の行政サービスの担い手の問題は、現制度でいえば広域自治体と基礎自治体それぞれの守備範囲が適切かどうか、また今後どうしていくべきなのかという論点です。「二重行政」や「二元行政」は、滞りない行政運営の支障となります。

ところで、より広範なエリア「関西」の中で大阪を見ても、関西経済の中で、大阪府は約半分のシェアを有しています。また関西の製造業の府県間取引の状況を見ると、大阪府が軸となつて中心的役割を果たす構造になっています。関西経済にとっても、大阪の成長戦略が影響することになります。関西経済が、首都圏と並び立つ第二のエンジンとして日本経済を牽引していくためにも、関西全体で連携した広域行政に対する取り組みが欠かせません。

そこで以下では大阪府の広域行政の現状について、2010年に策定された「大阪の成長戦略」を取り上げ、現時点での進捗状況をチェックしてみましょう。「大阪の成長戦略」では2020年までの達成評価項目として実質成長率、雇用創出、訪阪外国人、貨物取扱量の4項目を掲げています。

実質成長率の目標は年平均2%以上となっていますが、2010年度から13年度までの平均成長率は1.1%にとどまっています。1996年度以降、大阪府の実質成長率が2%に届いた年は一度もありません。ただしアジア太平洋研究所の予測によると、2014―15年度の実質成長率は2%には届かないものの、全国の成長率を上回るようです。ここへ来て大阪経済の対全国シェアは下げ止まりつつあります。

雇用創出は、年平均1万人以上が目標とされています。府内就業者数は1990年代から減少が続いていましたが、2011年度に底を打ってから3年連続で増加が続いています。2010年以降は年平均で約7千人増加しています。ただ改善傾向にあるのは他地域でも同様で、伸び率では全国を下回っています。

訪阪外国人の目標は年間650万人となっていました。2015年には716万人となり、目標を前倒しで達成しました。訪日外国人旅行者は、ここ数年の円安基調やLCC就航便数の増加、アジア各国のビザ要件の緩和などで急増しています。加えて、大阪への訪日外国人の訪問率は2011年の25%から2015年には36%となり、これが訪日外客数の増加率を大き

く上回る訪阪外客数の伸びに貢献しました。訪日外客数の増加は外的要因によるものですが、大阪への訪問率の上昇は「成長戦略」の成果として一定の評価ができません。

貨物取扱量は、関空123万トン、阪神港590万TEU(TEUはコンテナ数を表す単位)が目標となっていますが、2014年度の実績はそれぞれ74万トン、422万TEUにとどまっており、6〜7割程度しか達成できていません。

以上をまとめると、「大阪の成長戦略」はまだ道半ばと言ったところでしよう。これまで達成出来ている部分は外的要因によるところが大きく、大阪独自の取り組みによって、大阪経済が成長した、あるいは大阪問題に改善が見られた、というようなはつきりとした効果はまだ見えていません。たしかに「成長戦略」は、数年ですぐに成果を期待するのは難しい部分があります。しかし、であるからこそ、第3の論点「広域行政と住民サービスを誰が担うのか」、すなわち広域自治体と基礎自治体の関係に関する仕組みを見直し、組織としての政策実行力を高める必要があると思います。また、これらの成長戦略の達成状況を第三者がホームページなどで容易にチェックできるようにしていないことも問題でしょう。前述した貨物取扱量は、港湾という社会インフラに関するもので、広域的に取り組むべき案件であるにもかかわらず、阪神港に関する統計は大阪市・神戸市のホームページの両方を見なければデータを得ることができません。細かいことですが、こんなところにも

守備範囲の切り分けができていない問題の一端が見えてきます。

「大阪問題」の解決のために、また関西経済の活性化のためにも、「大阪の成長戦略」は前進させなければなりません。そのためには、どのような政策を実行するかももちろん重要です。しかし、行き詰まりの状態にある大阪問題の解決のためには、政策議論に加えて、政策実行力を高めるための組織・仕組みの改革が必要であると思います。大阪府と大阪市の関係、守備範囲の切り分けは「話し合い」で対応できる、との意見もありますが、うまくまとまる保障はありません。これまでの仕組みのもとで数十年にわたって府と市が話し合った結果残ったのは、二重行政・二元行政による負の遺産です。

関西のプロ野球球団の阪神タイガースは、二〇一六年シーズンから金本新監督を迎え、「超変革」をスローガンとして掲げました。「超変革」は、停滞する大阪にも必要なのではないでしょうか。

1 編者の橋本徹先生は、かつて本学経済学部で財政学を担当されていた先生で、前大阪市市長の橋下徹氏の誤植ではありません。

2 入江啓彰(2013)「関西における地域間交易」『近畿大学短大論集』第46巻第1号、pp.51-59。

3 大阪府推計。これを受けて大阪府では2020年の目標を一千万人に引き上げるようです。

エコノフォーラム座談会

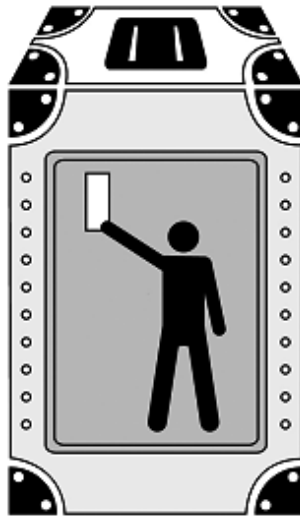
「大阪都構想とこれからの関西」

日時…2015年12月16日(水) 13時30分～15時

場所…経済学部2階会議室

出席者(五十音順)…

- | | | | |
|----|--|----|--------------------|
| 学生 | 大橋 侑季さん
河野 佑季さん
西尾 勇輝さん
山本 直樹さん | 教員 | 高林 喜久生教授
林 宣嗣教授 |
| 職員 | 鈴木 亜弥美さん
土田 系さん | 司会 | 本郷 亮教授 |



この座談会に先立ち、本誌は、経済学部生を対象に「大阪都構想に関するアンケート」をおこなった。その結果(詳しくは23頁参照)によれば、回答者969名のうち、約62%が都構想に肯定的意見をもっている(否定的意見は約15%)。これは、将来を担う若者世代のかなり多くが都構想を支持していることを強く示唆する。

さて、あなたが都構想の賛成者であるにせよ反対者であるにせよ、重要論点を整理しながら改めてこの問題を振り返ってみることは、今後のために役立つはずである。昨年の住民投票によって都構想は否定された。しかし、大阪の抱える問題自体が解決したわけではない。

本郷 では、座談会を始めます。今日は大阪都構想自体に賛成・反対するような政治的な話ではなくて、賛成にせよ反対にせよ、その理由の方が大事ですから、そういう大学らしい、あるいは経済学部らしい議論ができれば幸いです。最初に皆さんの自己紹介を簡単にお願いします。まずは林先生から。

林 林宜嗣です。僕は若い時から中央と地方の財政を研究してきて、特に関西人として、どうすれば関西を活性化できるかということに関心があります。

本郷 大阪のご出身ですか？

林 はい。大阪生まれです。大阪が大好きなんですけど、ただ最近では失望というか、ちょっと大阪はもうええか、とか思ったりすることもあります(笑)。

河野 こんにちは。林ゼミの河野佑季です。ゼミで大阪都構想について研究していたので、先生方のお話も伺いたいと思って参加しました。

山本 林ゼミの山本直樹です。大阪とは特に関係もなく育ってきたので、大阪については分からないところも多いのですが(笑)、よろしくお願いします。

土田 経済学部職員の土田系です。今年で37歳

になりますが、ほとんどの時間を大阪で過ごしてきたので、今日のテーマにはすごく興味があります。

鈴木 はじめまして。経済学部職員の鈴木亜弥美と申します。入職5年目になります。私は西宮生まれ、西宮育ち、現在も在住しているので、大阪都構想に興味はありつつも、どちらかと言うと他府県の問題と考えていたのですが、実はそうではないようです。今日はお話できる事を楽しみにしていました。

大橋 本郷ゼミの大橋侑季です。大阪府の和泉市に住んでいます。私も今回の問題はあくまで

「大阪市の問題」として見ていたので、この座談会を通して改めて自分の問題として考えてみたいのです。よろしく願います。

本郷 本郷亮です。経済学史を勉強しています。大阪市のJR天王寺駅のすぐ隣に寺田町という駅があり、私は生まれてから28歳までその辺りで暮らしました。人生の約3分の2はそこだったので、大阪人気質とか、特に市の南部の雰囲気や生活は知っているつもりです。というか、自分はコテコテの大阪人だと思っています(笑)。

今年5月に住民投票という、非常に画期的というか、大阪では前代未聞のことがあって、最初僕が思ったのは、ちょうど400年前に大阪城が落城したでしょ、大阪の陣でね。だから「雌伏400年、今こそ大阪の存在感を復活させよう！」とか、そういうのを住民に訴えるのかな、とすぐ思いましたね。そんなのを前面に出すと、もうそれは論理じゃないんですけど、感情としては「大阪ナシヨナリズム」が燃え上がったかもしれないですよ、真田幸村のゆるキャラを作ったりね(笑)。でも、それはちょっと品がないので、マスコミも400年前のことは言わないのかな、なんて思って眺めていました。

高林 高林喜久生です。財政学を勉強しています。私は尼崎生まれ、岸和田育ちです。小学校に上がるのと同時に岸和田に引越して、それから就職するまでずっと岸和田に住んでいたの、常に大阪府の南の方にどっぷりという感じで過ごしてきました。大阪都構想には私もずっと関心をもっています。橋下知事時代に「大阪

府自治制度研究会」という大阪にふさわしい大都市制度を考える研究会があり、知事からの委嘱でそれに参加しました。実は私はその副座長だったので、大阪都構想の賛成派と見られたりすることもありますが、必ずしもそうじゃありません(笑)。

西尾 林ゼミの西尾勇輝です。僕はずっと兵庫県に住んでいます。最近、住民投票やダブル選挙などで大阪都構想のことをよく耳にするので、興味があって今日は参加させていただきました。よろしく願います。

本郷 皆さま、自己紹介ありがとうございます。では、次に林先生、大阪都構想を考える際の重要ポイントについて御説明をお願いします。

大都市制度改革の本来の目的

林 まず一番気になっているのは、大阪都構想をイエスカノーかで問うという形ですと議論されてきたことです。住民投票がまさにそうです。しかし都構想は、大都市が今抱えている諸問題を解決するための制度上の1つの選択肢にすぎない。にもかかわらず、都構想自体の是非という、いわば白か黒かの単純な対立になっている。制度改革には「目的」があるはずなのに、制度自体に関心が集中してしまい、何のための制度改革なのかということが忘れられている。簡単に言えば、今の日本は非常に中央集権的の家で、まず国が都道府県をコントロールし、そして都道府県が市町村をコントロールするとい



林 宜嗣(はやし よしつぐ) 経済学部教授。財政学・都市経済学が専門。税制改革、公民連携や地域連携による地域の活性化、財政の効率化のための行政評価システムの開発などに関心がある。

う「3層構造」です。ところが市町村の中には大阪市・名古屋市・横浜市などの大都市があり、これらの大都市は「都道府県なんかなくても、われわれは、国と直接つながって十分にやっていく実力がある」と考えている。これは戦後直後から議論されてきた問題ですが、なかなか決着がつかない。

本郷 大阪府と大阪市は昔から仲が悪い(笑)。**林** 話せば長くなりますが、昔、大阪府が市域を拡げたいと言ったときに、府が反対しました。そんな経緯もある上に、大阪府の側には、税金の多くが大阪府ではなく大阪府に入ってしまうという不満があり、大阪市の側にも、大阪府に色々邪魔されるという不満がある。府と市の関係はあまり良くなくて、その結果、二重行政が

生じたという事情があります。

実力のある大都市を府県等から独立させるという議論がいわゆる「特別自治市」構想で、これは随分前から政令指定都市の市長会が提案しているものです。大阪の場合だと、大阪市は大阪府から独立するという事です。大阪市以外に堺市も政令市ですが、それ以外の市町村は従来通り、日本国大阪府〇〇市という形になります。大阪市は、日本国大阪府という形になります。こうした独立論は昔からあったのですが、その後「大阪都構想」が出てきた。これはむしろ、大阪市をなくして大阪都に移そうというものです。だから東京都と同じような感じになります。例えば今まで大阪府〇〇市だったものが大阪都〇〇区になる。どちらも大都市制度改革ですが、方向性は真逆です。

本郷 「特別自治市」構想と「大阪都」構想の優劣比較は興味深いですね。

林 それには、なぜ大都市制度改革が必要なのかということを考えねばなりません。制度改革は、何らかの「問題」を解決する手段にすぎませんからね。これまで目指されてきたのは、二重行政の排除、行政経費の節約、受益と負担の一致など、おおむね現行の行政の守備範囲を前提とした、サービス供給のあり方という視点からの大都市制度改革です。マスコミも主に、住民サービスがどう変わるかという形で問題を考えています。しかし実は、東京以外の大都市が今直面しているおそらく最大の課題は、東京一極集中が進む中で衰退する地域経済をどうやって活性化していくかです。これが大都市制度改革

革の本来の目的でなければならぬ。

高林 私も基本的に同意見です。「選挙のため」という政治的要素が一番大きいと思いますが、議論が本質でないところにずれてしまった。でもやはり最も重要なのは大阪の活性化です、諸々の「格差」の解消も含めて。

林 大阪都構想も当初は大阪の活性化が目的でした。しかし、なぜ大阪都になれば活性化するかという根拠が全然示されないまま、だんだん議論の中心が前述の財政の議論へと移って行きました。「大阪都になればこれだけの経費が節約できる」というような話になり、反対派グループは「いやいや、そんな額にはならない」というような金額論争になっちゃった。しかし今大事なのは、大阪から企業の本社がどんどん減り、大阪の経済的機能が失われてゆく現状をふまえ、大阪の活性化のための大都市制度改革をやることだと、私は常に思っています。

実はヨーロッパの国々では、首都以外の大都市の活性化が重要課題として広く認識されています。ある地域全体の発展は、主としてその中核都市、すなわち関西地であれば大阪の経済的強さによって決まる。中核都市が地域全体の経済活動の上限を決めるのです。だからコアになる都市が頑張らないと圏域全体は大きくならない。競争力のある地域には競争力のある大都市が必ず存在し、またそのような中核都市を持たない地域が成功した例はない、とさえ言われています。国民経済の再生のためには、地域を、したがってその核となる大都市を強化することが不可欠だと、国は明確に認識すべきです。東



本郷 亮(ほんごう りょう) 経済学部教授。副学部長(学生担当)。専門は欧米の近代経済学史・思想史。近世以後の日本経済思想にも関心あり。大阪市生まれ・大阪市育ち。

京一極集中ではダメだ。

大都市と周辺都市は一連托生

林 大都市と周辺都市の関係には、かつて対立の時代がありました。大都市、例えば大阪市は、昼間流入者に対してさまざまなサービスを提供しているにもかかわらず、住民税は周辺都市に納められます。周辺都市の住民は、昼間は大都市にいて、そこでいろんなサービスを享受する。だから大都市は、サービスを提供するだけで税金をもらえないと不満を言う。一方、周辺都市は、福祉や教育など住民生活に必要なサービスを自分たちが提供しているからこそ、住民が大

都市に働きに出られるのに、法人関係係は大都市に納められると不満を言う。大都市と周辺都市の双方に言い分はあるのです。

今でもこの対立が語られていて、総務省も、大都市制度改革では受益と負担の不一致を解消すべきだと言っています。しかしもう今はそんな時代じゃなくて、大都市と周辺都市は「運命共同体」と見るべきです。例えば、大阪市の昼間流入人口は100万人を超えています。毎日100万人が大阪市にやって来る。宝塚市、西宮市の就業者の4人に1人は大阪に働きに行くので、もし仮に大阪のビジネス機能が衰えたら、西宮も宝塚も衰えるよね。実態が一蓮託生なのだから、もはや対立してる場合じゃない。

鈴木 なるほど、私たち西宮市民にとっても、大阪の問題は他人事じゃないですね。
林 横浜は、昼間流入人口よりも昼間流出人口の方がずいぶん多い。これは東京に働きに行くからです。昼間流入人口の方が多いのは名古屋・福岡・大阪です。神戸は流出入がほぼトントンですね。制度上で言うと、今、大都市は20市ありますが、それぞれが抱えている問題は非常に多様化している。だからそれぞれの大都市が独自に制度を構築できる仕組みにすべきであり、そこで大都市制度改革の議論が出てきたのです。

ただし各地域の結びつき方は「重層的」です。これは注意が必要です。例えば都市雇用圏（通勤圏）で見れば、その地理的な移動範囲は、もちろん行政区域とも、企業活動圏（例えば営業用自動車の移動範囲）や通学圏とも全然違い

ます。だから「一蓮託生」や「運命共同体」という言葉でどのような地理的範囲を含めるかは、場合によりけりであって、いわゆる「望ましい圏域」というのは重層的な概念です。それぞれについて受益と負担の一致を図るのは至難の業ですね。

大阪都構想はあくまでも大阪府内の話なので、大阪都構想では西宮・宝塚・尼崎などの周辺都市との連携や一体化は果たせません。一方、大阪府の南部には岬町など色々あって、それらは大阪市に通勤するより、むしろ堺市に通勤する人の方が多かつたりする。だから府県域をいったん無視して、実際に結びつきの深い範囲を「望ましい圏域」と捉えるべきかもしれないですね。いずれにせよ、大都市と周辺都市が競争するのではなく、1つの運命共同体として共に役割分担しながら、そのうえで他の圏域と競争していくことが重要でしょう。この目的のための手段として「大阪都構想がよい」とか「特別自治市構想がよい」とか「両方の中間がよい」という風に議論すべきなのに、残念ながら初めから大阪都構想ありきで、これが論争のネタになってしまった。

イギリスの「シティ・リージョン政策」

林 大阪には2つの顔があります。西宮市や宝塚市であれば、いわゆる「基礎自治体」としての顔だけいいのですが、大阪はやっぱり関西経済の中心であり、周辺都市も視野に入れた行

政を求められる、つまり「広域自治体」の顔もある。この大阪の2つの顔をどうやってうまく制度化するかがポイントです。

ちなみにイギリスでは「シティ・リージョン政策」として、例えばマンチェスターという大都市があれば、その周辺自治体も一緒になって「グレーター・マンチェスター」というのを創って、LRT (Light rail transit: 市電などの軽量鉄道) や空港を共同経営するような事例があります。ヨーロッパではこれが今のトレンドであり、シティ・リージョン単位で地方創生とか地域活性化の政策を打っていくのが普通です。残念ながら日本ではまだまだ自治体（市町村）単位でやっていて、自治体を越えるものは府県がやる、という発想が強い。大阪都構想もこの発想ですね。

本郷 わが国の今後の方向性としてシティ・リージョン政策は参考になりますね。非常に興味深いお話、ありがとうございます。次はフリートークに入ります。

「二重行政」問題

山本 ゼミで大阪のことを研究した際に、大阪都構想のいわゆる「特別区設置協定書」を読みました。それを見る限り、地域活性化をめざすという面はやはり弱い。林先生がおっしゃったように、二重行政などに論点が移ってしまい、都構想のもたらす結果・成果の客観的分析がまったく不十分です。今、日本のGDPに占め



山本 直樹（やまもと なおき）経済学部3年生、林宣嗣ゼミ。編集委員としてゼミ本の作成に力を注いでいる。

大阪のシェアは低下しており、大阪経済がどんどん沈下している。大阪は単なる地方都市の1つになりつつある。まずはその対策を考えるのが第一であり、二重行政の問題は、重要性の点ではその次の話だと思えます。

高林 人々の関心がだんだん二重行政というところに向かってしまったね。私たちが「大阪府自治制度研究会」でこの問題を検討した時は、「大阪市内は大阪府が、大阪市域外の大阪府域は大阪府が」、それぞれバラバラに都市経営を行うという「二元行政」が本質的な問題と考えました。しかし「二重行政」というレッテルを貼ってそれを批判する方が人々にはわかりやすい。また二元行政を克服して大阪府広域で対応することは、結局のところ、大阪市の税金を

市外の広域のために使うという面もあるので、やっぱりそれを正面に出しにくかったのでしょう。

林 もともと大阪市と大阪府は、あまり関係が良くなって、対抗意識も強いので、大阪府が何か施設を作ったら大阪府も作るわけです。で、大阪府が施設を作ることになる。すると、市立と府立のそれぞれの施設が同じエリア内にできて二重行政になる。同じことを二重にやるより協力してやった方がいいのは分かっているんだけど、仲が悪いから不可能だった（笑）。

でも今は比較的、府と市がどちらも同じ政党なので、わざわざ大阪都にしないで、二重行政をやめることは十分できる。だから二重行政は、制度の問題というより運用の問題という部分かなりある。それなのにいきなり都構想ってことになるから、大騒ぎになって、それがまた大阪を停滞させて……。東京都知事などは「東京は忙しいからこんなこと議論してる暇はない」なんて言うありさまで。大阪にとってこの数年間は失われた数年間です。運用面の工夫を突き詰めた結果、「やっぱり制度を変えないと解決不可能だ」ということになって初めて制度論が出てくるべきなのに、最初から制度の問題にしてしまったのは、政治的駆け引きもあつたでしょうが、住民にとっては非常に不幸なことでした。

高林 大阪府のGDPの半分以上は大阪府が生みだし、大阪府の経済活動の中心は大阪市であるため、大阪府のサービス供給の多くはどうし

ても大阪市で行われることになる。しかも大阪府は地理的に大阪府のちょうど真ん中であつて大阪市民以外の大阪府民にとつても便利なので、ますます二重行政が起きやすいんですね。兵庫県や京都府、愛知県、神奈川県の場合も政令指定都市が府県内に存在するけどどこも政令市は地理的に端っこでしょ？また二重行政には、ある意味、住民サービスがそれだけ充実しているという面もあるので、二重だから即アウトということはない。現行制度のために大阪で二重行政がそれほど深刻化しているかという、必ずしもそんなこともない。現状ではその検証が不十分なまま、問題が誇張されがちです。

大橋 大阪府立大学と大阪市立大学が統合するという話があつて、なぜ教育の場を1つに集約してしまうのかすごく疑問でした。家からは府大も市大もけっこう近く、両大学には知人もいて、どちらもすごくいい大学だと思つていました。どうして「無駄」なのか……。

本郷 役割分担を通じて無駄をなくし、共に発展しようという話だったらいんだけど、「2つあるから無駄だ」と単純に言つてしまうのは酷だな。

高林 維新の政策って効率重視なんです。それがすごく前面に出ていて、それが今の若者、特に経済学部生にとつてはわかりやすいのかな。しかし実際はそんなに一筋縄ではないかな。府大と市大はそれぞれ歴史があるし。とにかくしっかり分析とか検証をする必要がある。無駄なものもあると思いますよ。しかし、大学でも体育館でも図書館でも、2つあつたって、需要

があるのなら必ずしも1つにまとめる必要はない。そこはむしろ大阪の問題の本質ではないと思います。

林 最近、無駄をなくしますよとか、公務員を減らしますよとか、給与をカットしますよとか、議員数を減らしますよとか、二重行政をやめますよと言ったら、「それはいいことやー」と思う人が多いから、これは一種のポピュリズムです。

高林 公務員の現場、特に行政職とか、単に減らせばいいという問題ではないんですけどね……。

地方分権の推進

土田 橋下徹さんが大阪府知事で、東国原英夫さんが宮崎県知事だった頃、地方の魅力を訴える自治体が多く、地方分権が叫ばれていました。そのような中で関西広域連合の話が出てきて、参加する自治体もあれば参加を見合わせる自治体もありました。これは自治体ごとの立場の違い、つまり合意を得ることの難しさがあらわれます。地方分権を推進することの難しさが浮き彫りになった。また大阪府と大阪市の水道事業の統合についても、当時の府知事の橋下氏と市長の平松氏の意見が合わず、最終的に「意思決定の枠組み」を根本的に変えるための「大阪都構想」という対立に至った。都構想には、地方分権や関西活性化の具体策は抜け落ちていますが、特に地方分権を進めるプロセスについて、

最近議論されているんでしょうか？あまり聞きませんけど。

林 民主党政権のときに「地域主権」とか言い出して、これを第一にやるぞという強い意欲があったのに、途中から全然そういう話が消えてしまった(笑)。今、地方分権の議論はほとんどなくなり、分権が進む気配はほとんどありません。でも地方分権は、ヨーロッパを含む先進国のトレンドです。

大橋 今の日本では、大都市も地方も疲弊して国に頼っているところが増えています。それはまた、「失われた20年」などと言われる日本全体の低迷の反映であるとも思います。本格的な少子高齢化の時代に入る前に、東京だけで日本を支える仕組みを変えていくべきではないで



土田 系 (つちだ けい) 経済学部職員。01年関西学院大学商学部卒業後、他大学の勤務を経て07年より関西学院大学職員として勤務。二児の父。

しょうか。

高林 僕は林先生と一緒に道州制の本を書きました。だから道州制の賛成論者です。橋下さんも本来、道州制賛成論者です。しかし大阪都構想は、道州制にとって邪魔になる可能性が高い。おそらく橋下さんもそれに気付いているのに、結局は選挙で勝つために、大阪だけの都構想の方向に行かざるをえなかったのでしょうか。最初は周辺地域も巻き込んでやろうとしたのが、そこがなかなか動かないから大阪の中でやろうとして、それで大阪の中でやろうとしたら堺市が動かないから、結局は大阪市だけでやることになった。そこが不幸だったと思う。都構想は、ある意味、大阪市を再編して大阪府に移すという話だから、住民投票するならば、府全体を対象にすべきだった。でもそれはできなかった……。関西の各地域はますます結びつきを深めており、とりわけ成長戦略の面では関西一体となって連携を強める必要があります。大阪だけでは難しい。

「副首都」構想

林 大阪府は今、いわゆる「副首都構想」を出しています。でもこれって、「東京が独り占めしている中央集権国家のうまみを大阪にも分けてよ」的な発想であり、今ここで議論している地方分権とはだいぶ異なるものです。僕は大阪生まれなので、やっぱり大阪は「西日本の代表」で、東京と大阪という2つの核で日本を引っ張って

いくという、そんな気持ちですつと来ました。ところが最近は大阪が「首都であるうまみ」を大阪にもちよつと分けてよ」と言ってるわけですよ。

もちろん、東京に大地震が来た場合のバックアップ機能が必要なのは明白です。昔、内閣府が直下型地震の研究会を開いたとき、阪神・淡路大震災の経緯を話してくれと頼まれたことがあります。国は、東京を地震が来ても耐えられるような強い都市にしたいと考えているんだけど、東京がいくら地震に強い町になってもやはり限界がある。むしろ究極の防災対策は地方分権なんです。だから民間企業なんかは機能を東京以外に分散させるわけです。しかし、だからといって大阪府が「副首都にして欲しい」と主張するのは、プライドを捨ててしまったという気がしてならない。

土田 関西活性化の具体案として「リニアモーターカーを関西まで延長せよ」と言う人もいますが、それを聞くとなんだか白けてしまいます。そりゃリニアが直ちに延長されれば良いですが、それができないから苦労しているわけ……。大阪にオリンピックを招致しようとしたときも、相変わらず大阪府と大阪市の連携がうまくいかず失敗し、東京は招致に成功した。

ポピュリズムの政治手法

林 国でも地方でも、強力なリーダーが必要ですよ。いわゆるリーダー待望論。だから橋下さん

への期待が結構あった。彼は発信力もあったしね。でも問題は、そのリーダーシップのあり方です。「俺についてこい」型のリーダーシップもあれば、皆の意見をちゃんと聞いて、それをまとめていくような調整型・妥協型のリーダーシップもある。残念ながら今の国民は、ぐいぐい引つ張ってくれるリーダーを求めている。特に関西はそうなのかな。橋下さんに限らず、ポピュリズム的な面が非常に気になります。

しよう。例えばテレビなんかでも、バスの運転手の給与とか、何かの事件とか、あまり本質的じゃないような単なるエピソードの方が一般の人々の印象に強く訴えるものです。細かな統計データより、例えば一枚の可哀想な子どもの写真の方が、けっこう世の中を動かしたりする。政治的手法として、そういう世論操作のテクニックは今後はむしろ「普通のこと」と覚悟した方がいい。ポピュリズム的な政治家は、あいう「対立構図」を作るのが上手な政治家は、小泉首相以後は珍しくなくなりましたから（笑）。「悪」を叩いて一時の憂さを晴らすみたいな。

高林 よく言われるのは「敵」を設定するという政治手法ですね。大阪都構想の場合、「敵」に選ばれたのは大阪市の官僚機構や労働組合でした。

林 人々がそれを求めている、という気がしてなりません。どうも日本が変になってきてる。テレビでも何か不祥事が起こったときに一斉に頭を下げる。頭を下げないとダメ。そのときにカメラのフラッシュがパパパッとたかれるでしょう。そういうのを見せない、今の日本の大衆は納得しない。

本郷 政治やマスコミの世界では、住民にわかりやすい言葉で過度に単純化する傾向が強いです。

高林 気をつけないとね。あのナチスもポピュリズム的政治手法によって民主的な選挙で選ばれた。ナチスはユダヤ人という「敵」を創りだして攻撃し、きわめて悲惨なことになった。

高林 よく言われるのは「敵」を設定するという政治手法ですね。大阪都構想の場合、「敵」に選ばれたのは大阪市の官僚機構や労働組合でした。

林 アメリカでも共和党の候補が、イスラム系移民の全面禁止を唱えて支持率を上げている。やっぱり国民に受けるんですよ。でも、本当にそれでいいのか？

高林 基本的人権など、投票で変えられないものもあります。それらは多数決で変えてはいけません。

林 大阪都構想にせよ、新憲法にせよ、20年先



高林 喜久生（たかばやし きくお）経済学部教授、財政のデータ分析、政府間財政、地方財政が専門。景気循環や関西経済の活性化などにも関心がある。尼崎市生まれ、岸和田育ち。



30年先、1000年先まで影響を及ぼす大事な事柄を、今のようなポピュリズムのもとでの住民投票で決めてしまっているのかな。現役世代って、ものすごく責任が重はずなのに…。

山本 そもそも大阪都構想という名前自体に問題はないでしょうか？現状では東京都以外に「都」はつけられない。住民投票で大阪都構想が承認されても名称は大阪府のままです。あたかも住民投票が承認されたら大阪都ができて、そして東京都のように発展するという甘い認識がある。しかし東京都が発展している理由は、特別区のおかげじゃなくて、何か別のものです。大阪人にとって「都」という言葉は確かに心地良いかもしれませんが、経済面から見れば、大阪は特別区ではかえって足を引っ張られるの

で、やはり市の方がベターだと思います。なぜなら市であれば政令市になって、独自の財源、例えば都市計画税や事業所税が手に入ります。区であればそうはいかない。つまり大阪市の集めた税が大阪府に吸収・流用されてしまう。この点、もしかすると東京さえも、市にした方が活性化するかもしれません。

林 東京も特別区はかなり普通の自治体に近いんだけど、もつと普通の「市」にして欲しいという意見が「区」から出てくることもある。その逆をやるうとしてるのが大阪都構想です。大阪市の260万人が1つにまとまっているからこそ力があるわけなのに、それを例えば豊中ぐらいの規模の幾つかの自治体に分割してしまつたら、中核都市がなくなってしまう。大阪になれば大阪や関西が元気になるかどうかは、まったく疑問です。東京が元気なのは、中央集権国家なので国の役人が首都に集中している、お金がよく落ちるからです。

土田 ちなみに、東京23区の前算は区ごとに決めていますよね？

高林 その通り。公選の区長だしね。それで、消防とか水道とかは都がやっています。

住民投票と民主主義

林 大阪の問題は「政治」問題としてでなく「経済」問題として考えるべきです。なぜなら最近の政治は反対か賛成かという構図で、人々の対立を煽るケースが増えているからです。神戸市

長は、大阪都構想の住民投票について、住民の意思を問うた点は非常に評価できると言ったんですが、僕は実はそれも疑問に思います。

高林 しかし制度の大きな枠組みを変えるときには、最後には、住民投票という手続きは必要でしょう。ただ注意しないといけないのは、住民投票とは結局、イエスかノーの二者択一だということですよ。ある施設を作るか作らないかという単純な問題なら、それでいいけど、大阪都構想みたいな複雑な問題は、イエス・ノーで答えにくい。大学生のディベートでも肯定か否定かで争うけど、実際、イエス・ノーで答えられるような単純な政策問題はむしろ稀ですよ。大阪都構想については「区割り」をめぐるでも異論が出ましたが、構想自体には賛成だけど、あの区割りには反対だという人は、難しい選択を迫られたでしょう。

本郷 住民投票は「民主主義の劇薬」とも言われます（笑）。私は住民投票には、大衆扇動政治などの弊害はあるとはいえ、それでもなお、今回の住民投票は長い目で見れば良い「経験」だと思っています。例えば将来的に、憲法改正という問題に直面する。数十年に一度の一発勝負ですよ。こういう大きなものをいきなり経験のない人間が住民投票やるくらいなら、今回の「失敗」から学習しておく方がいい。僕はそういう意味で早目に住民投票の練習として、むしろ「失敗」を体験するのが大事だと思っていました。大規模な住民投票はむしろ「原発」関係で行われると予想してたんですが、外れました（笑）。憲法は含まれる論点・争点が多いですよ、9条

だけじゃない。これを練習なしにやったら、日本中大混乱しかねない。

林 住民投票は、住民が十分な知識を持たなければ適切な意思決定はできない。大阪都構想について住民が十分な知識を持っていたかという点と疑わしい。こういう失敗も1つのトレーニングかもしれないが、問題点を後で皆で議論し、しっかりと総括しないと、今後の住民投票、あるいは国民投票にとって必ずしもプラスにはならないと思う。住民投票の後には、やっぱりマスコミが中心となって、きちっと総括する必要がある。

鈴木 西宮市民でも、西宮市政の現状をよく知らない人は多いと思います。むしろ国の行政についてのほうが、マスコミの露出度が大きいので、注目されているかもしれません。

議会の機能不全

林 大阪都構想にせよ、特別自治市構想にせよ、長所もあれば短所もある。本来ならばそれを議会で吟味して、住民の幸せが最大になるような案を作るべきです。それが議会の本来の役割なのに、議会が二手に分かれて激しく対立して機能不全に陥っている。府議会や市議会がそれぞれの機能を果たさなかったことが「政治」面の一番の問題じゃないかな。知事さんや市長さんの個性が強すぎてね（笑）、信条で突っ走ろうとする。それをチェックするのも議会の仕事。今のような状態だと「もう議会なんて要らない」

とか「定員を減らせ」という話にもなる。

高林 大阪は特にそうですね。大阪の維新の党が首が市長と知事だったりするから、議会と政党が一緒なんです。自分たちの党首が市長だったり府知事だったりするわけだから、議会の中で議論が起こりにくい。自民党であれば首相は東京にいるんで、地方は地方で議論できるんだけど、今の大阪ではそれがやりにくい。議会はちよつと機能しにくい状況ですね。

ところで、私は大阪都構想にも評価できる点はある、区長の公選制は評価できると考えています。

林 区長の公選制は、住民自治を実現するためには有益かもしれませんが。しかし住民投票と同様の弊害もあります。最近では市長でも知事でも、いったん選挙で選ばれたら「私は住民から選ばれたんだ！」と叫んで、今までのやり方を全部リセットする例が増えています。住民生活は安定しないとダメなので、区長が変わるたびに行政が大きく変わるのには困りものです。

高林 でも、その問題は西宮市なんかでも同じなので、都構想の問題というより、首長と議会という二元代表制の一般の問題と言えます。首長が突出したときは議会がチェック機能を果たさないといけない。

林 そうですね。日本の行政一般の問題点の1つは連続性がないことじゃないかな。むしろ、良い所と悪い所があったら、是々非々で、全体を総括して良い所は継承すればいいんですけど。民主党が政権を取ったときも、それまで自民党がやってきたことをリセットしてね。ところが

途中からやっぱり限界があると気付いて、また元に戻す。もう何をしていたのかよくわからない（笑）。イギリスでは労働党と保守党が政権の取り合いをしています。前政権の良い所はそのまま引き継いで、それに分析を加えて、次のステップに進んでいきますよ。

マスコミの役割

林 不法駐輪の問題に熱心な大阪市長が、自分でたすきをかけて不法駐輪の場所を回って（笑）、それをマスコミがテレビで映す。でもこんなこと、市長がやる必要はないですよ。市長は大阪中之島の市長室にいて、場合によっては西宮や宝塚に向いて広域的な議論をすべきでしょう。

高林 駐輪問題なんか区に任せれば良い（笑）。でも派手なパフォーマンスの方が、マスコミは取り上げてくれやすいし。マスコミの影響力は非常に大きいだけに、それだけ責任も大きいはずですよ。

土田 市長と議会の関係において、議会がチェック機能を果たせるかどうかは、マスコミの役割にもかかっていますよね。つまり市長の仕事がマスコミが適切に評価できるかどうか。大阪都構想についても、マスコミは橋下市長の些末な発言や行動ばかり取り上げて、チェック機能を果たさなかったという印象があります。逆にマスコミが「都構想の中身が分からない」「説明が不十分」という具合に煽り続けていた

気さえしますが、それを調べて人々に伝えるのがマスクミの役割のはず。

橋下氏は、大阪市長に就任以来ずっと、公務後にマスクミの取材を受ける時間を設けていて、しかも手持ち資料・書類なしです。それが編集なしでYOU TUBEに公開されていいますが、こうした情報発信の仕方を見ると、マスクミの今後のあり方も変わってくるはずです。橋下氏は「後で内容を編集できないような、例えば公開の動画で取材を受けるのはいいけど、後で勝手に編集されるような取材を受けるは嫌だ」みたいなことを言っています。一理ありますよ。従来のもマスクミは時代に対応できていない。

林 だから某全国紙が、高林先生は大阪都構想の賛成派、僕は反対派、というような対立構図で載ってしまったりするのかな（笑）。

高林 うん。でも僕、林先生とは区長公選制についての見方などを別にすれば、だいたい同じ意見ですね（笑）。僕は取材を受けたとき、現在の大阪都構想には疑問も多いが、府市の二元行政を打破できる可能性や、大阪市は基礎的自治体としては大きすぎるので区長公選制を導入するなど自治体と住民を近づける仕組み作りにも、評価できる部分があると話しました。実際の記事では、それらばかり大きく取り上げられて少し驚きました（笑）。そういうのを覚悟して取材を受けざるをえないところに、マスクミ対応の難しさがあります。

林 いわゆる「劇場型」の弊害ですが、以前に平松市長と橋下さんがテレビでディベートをし

たときに、橋下さんが平松さんに「イエスカノーかで答えてくれ」と言ったのね。そしたら平松さんは考え込んでしまつて、それを見た視聴者は「ああ、これは橋下さんの勝ちだ」と思っただろうね。でもよく考えてみたら、それはイエス・ノーで答えられる問題ではない。それを一生懸命考えているときに「じゃあ、もういいです」とやられてしまうと、苦しいだろうね（笑）。考え込む人の印象は悪くなるだろうし。こういうディベートの「勝者」が人気を集めるとすれば、今の日本国民は政治的に未熟と言わざるを得ない。

経済学部生へのアンケート結果

本郷 ところで今回、大阪都構想について経済学部生たちにアンケート調査を行いました。その結果を見れば賛成がかなり多い。しかしこの問題をつくり勉強してからも一回アンケートをすれば、結果は変わるかもしれませんから（笑）、今回のアンケート結果は慎重に評価する必要があります。

山本 シルバー・デモクラシー、すなわち少子高齢化社会では若者より高齢者の意見ばかりが政治に反映される問題が、大阪都構想の住民投票でもよく言われます。若者の人口の少なさや若者の投票率の低さは事実です。ただ、若者が大阪都構想の実質についてよく知らないまま、「革新的」などの言葉や印象に踊らされて、漠然としたイメージだけで賛成に投票したんじゃないかな。

ないかな。

大橋 アンケート結果を見ると、「社会を変えたい」という思いがあるように感じます。大阪都構想のことを学ぼうとしたら、たぶん若者はまずマスクミの情報に頼ると思うんですね。しかし都構想に関する細かな説明、特に法律的な難しいところに普通の若者はあまり興味がないので、そうなるもマスクミもそんな記事は省いちゃえという考えになりがちでしょう。アンケートで賛成が多かったのは、複数の論点を比較考量して出した結果ではなくて、マスクミが示した賛成・反対の対立構図のもとで「府と市が同じことをするのは無駄だから、じゃあ一つにしてしまえ、だから賛成」といった漠然とした感覚によるものだと思います。「二重行政＝不効率」というレッテルの威力はすごく大きかった。ゲームのように勝ち負けばかりを気にして、大阪や関西の経済成長という肝心な点を置き去りにしていたかもしれません。

高林 成長とともにもう1つのとても大きな問題として「格差」もありますよ。説明し出すと長くなるけど、とにかく大阪の府内でも市内でも、色んな意味での格差がある。税金の額も全然違うし、生活保護の比率も全国に比べて高い上に地域ごとの格差も大きい。しかしこれらの問題に対して大阪都構想は具体的に何も答えていないし、維新も答えていない。だからその不安もあって、高齢者層や低所得層、また周辺部は、都構想に反対票を投じたんだろうと思います。維新は効率重視・成長重視なので、分配面の対策が弱点になっている。

山本 科学的な研究に基づいて、どのような意思決定方式であれば住民のニーズがより実現されるのかという点を考えていく必要があります。

鈴木 素朴な疑問なのですが、大阪都構想の住民投票では僅差で反対票が上回りましたが、今回のダブル選挙では大阪維新が圧勝しました。これは、都構想について住民が考え直した結果、大阪維新に賛成したということでしょうか？

西尾 住民投票とダブル選挙については、今回のダブル選挙に関しては、なんだか再び大阪都構想の住民投票をやったような感じがしました。テレビの公開討論を見ても、大阪都構想のこの部分はどうかというような議論が多くて、都構想の賛成派と反対派の代表が相変わら



大橋 侑季（おおはし ゆき）経済学部4年生、本郷亮ゼミ。すご腕の副ゼミ長。人口知能(AI)と幸福との関係を研究。保険業界内定。

ず論争しているような感じでした。
河野 本来の目的は大阪・関西の活性化なのに、府と市の対立の解決が目的みたいになったのは残念です。選挙を行うために14億円もかけたのに、もったいない。

大阪維新の会

林 人々は大阪維新を全体的には評価しているんでしょう。随分前ですけど、統一地方選挙のときに各政党が出したマニフェストがあったて、関西経済同友会から、どの政党のものが良いか講演して欲しいと言われて、そのとき大阪の各党のマニフェストを見ました。すると、維新の会が一番具体的でわかりやすかった。

高林 そう、とてもわかりやすい(笑)。

林 他の政党は、大阪府の政策というより、国の政策みたいに抽象的なものを出していました。だけど、なぜ維新の会だけがそういうのが書けるかというと、関学なんかにもいたと思います。が、実働部隊というか、そういう問題をしっかりと研究している若い人たちがいるんです。そういう人たちが自分たちの問題として考えていく、そういう体制なんです。他の党はその点が弱い。

大橋 大阪維新の強さもそうですが、そもそも大阪自体、日本の中でもきつと独特なところがあると思います。大阪人はノリがいいというか、やたら地域性が濃いというか。そういう文化やアイデンティティーがあります。

高林 大阪では維新の会が非常に強いよね。基盤・支持層が強固だね。関東ではあまりないよ。
河野 大阪維新の会の公式ホームページに質問コーナーという形の「Q&A」のページがあるんです。そこに「もし大阪都構想が実現して、それがうまくいかない場合、元の府・市に戻せますか」という質問があって、そこには「戻せません」と書いてあるんですが、実際調べてみると、そういった法律はない。つまりいったん特別区になると、もう元に戻せない。それを知って本当に驚きました。

インターネットの普及

土田 ちなみに、今どきの学生さんはそういう情報を得るときに、テレビや新聞といった、従来のないわゆる「権威ある」媒体に頼っていますか？最近ではネットやYOU TUBEなどが普及していますよね？

本郷 インターネットの影響力はさまざまな面で今後ますます強まるでしょうから、そこは大事な問題ですね。

大橋 この座談会のために、橋下さんの動画を少し見たりしましたが、ネットは少し極端になりがちかなと感じました。そういう意味ではテレビや新聞の方が客観的だと思います。

西尾 僕はとりあえず大阪の現状について府と市が出している資料を見て、何が問題なのかを調べました。YOU TUBEやテレビでは客観的情報を得るのが難しいのではないでしょう



西尾 勇輝 (にしお ゆうき) 経済学部3年生、林宜嗣ゼミ。ゼミ委員。現在、日本の経済成長について研究中。

か。

河野 僕は幾つか論文を読みました。選挙の投票に行くときは、おそらくネットも使うでしょうが、そのサイトの信頼性はもちろん吟味します。

山本 僕はホームページで橋下さんの動画を見て、そのときは「大阪都構想っていいな」と思っただけですけど、今回の座談会の準備で色々とお話を読んで勉強すると、けっこう矛盾だらけというか、橋下さんの政策主張が空っぽというか、具体的なものが乏しいと思うようになりました。

土田 マスコミであれYOU TUBEであれ、発信された情報には何らかの意図があり、ある種のバイアスがかかっていることを認識し

たうえで、情報に接するのは重要です。

これからの大阪

土田 大阪都構想は住民投票で否決され、そして自民党の大阪府議連提案として「大阪会議」に行きついたわけですが、一時は橋下市長も賛成に回ったけど、結果的に議事内容に不満を持って「ボンコツ会議」だとか言い出して……。結局、大阪都構想が否決されたことの総括ができていないから、こうなるんですよ。そうこうしているうちに、今回のダブル戦になだれ込んでしまってます。

高林 そうです。府民としては、改革のサポーター



河野 佑季 (かわの ゆうき) 経済学部3年生、林宜嗣ゼミ。ゼミ委員。経済成長を軸に日本のあり方を研究中。

ジュミたいに見えるでしょう。もはや今となっては、府と市が議論して、どんな形にせよ、妥協してコンセンサスを創り出すしかない。しかし、それもできない。

林 都構想が住民投票で否決されたときに皆で万歳したりしてね(笑)。

土田 あれを見て、良い印象を受けた人は少なかつたでしょうね。ただの大阪の内輪もめ。

林 否決された日が、本当は再出発の日なのにね。「もう一回仕切り直して、一緒に考えましょう」という方向には行かない。

土田 確かに「終わり」みたいな雰囲気になりましたね。

高林 府市の連携を強めて再出発できれば、大阪都を作る必要はないかもしれない。

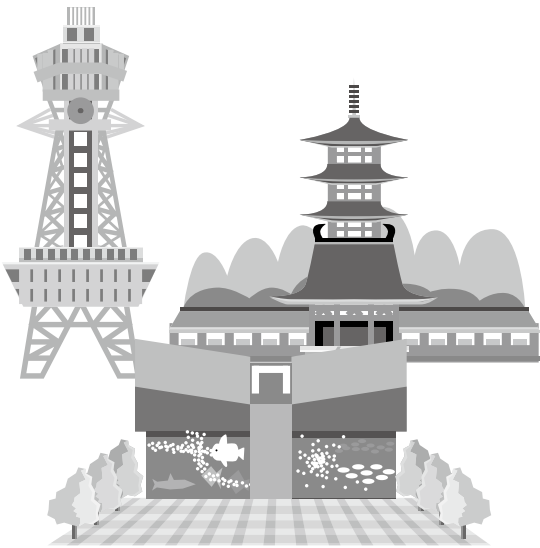
林 ここが正念場なんだということを、市長も、知事も、市議会も、府議会も、住民も、自覚しないといけないよ。で、それに向けて議論を引っ張っていくのは、どれも期待薄だから、まあマスコミかな(笑)。

河野 僕が座談会を通して思ったことは2点あって、第1は、多くの政策はイエス・ノーで答えにくいものだという点です。投票者というのはたいがい素人なので、その人たちにどういった情報を提供していくかが決定的に大事だと痛感しました。第2は、大阪都構想にも評価できる部分があるという点です。それらの点は、今後の議論の発展に活かすべきだと思います。**本郷** 学生たちがしっかりした判断力を養えるように、『エコノフォーラム』も情報提供に頑張らないといけませんねえ。

高林 われわれ経済学を勉強している者にとっては、思いつきとか直感で決めつけるのではなくて資料やデータを分析して、その結果に基づいて判断するということが基本的に大事。

本郷 そろそろ閉会の時間が来てしまいました。まだまだ議論は尽きませんが、皆さま、本日は本当に長い時間、ありがとうございました！

高林 今日は本当に私も色々勉強させて頂きました。大阪都構想が、政治的な事情のためなんだん本質でない方向に流れていったのは不幸でした。その反省をしっかりとしないとね。これからは若い人たちにも大いに期待します！本当に（笑）。



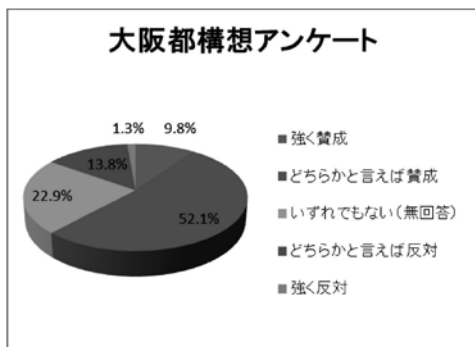
大阪都構想のアンケート結果について

経済学部ゼミ生を対象に「あなたは『大阪都構想』に関して、どのように考えていましたか?」という無記名アンケートを実施したところ、以下のような結果となった。

「全体」で見ると、肯定的意見（強く賛成+どちらかと言えば賛成）が61.9%に達する一方、否定的意見（強く反対+どちらかと言えば反対）は15.1%に留まった。「いずれでもない（無回答含む）」という立場も22.9%あった。

「市内」「市外」に住む学生の差に注目すると、肯定的意見（強く賛成+どちらかと言えば賛成）は、市内62.3%、市外61.8%であり、あまり差はない。しかし「いずれでもない」は、市内11.8%、市外24.0%、また否定的意見（強く反対+どちらかと言えば反対）は、市内25.9%、市外14.1%であり、いずれも10%以上の差が見られた。

ご協力いただいた皆さん、ありがとうございました。



	大阪市内に住む学生		大阪市外に住む学生		全体	
強く賛成	16人	18.8%	79人	8.9%	95人	9.8%
どちらかと言えば賛成	37人	43.5%	468人	52.9%	505人	52.1%
いずれでもない(無回答)	10人	11.8%	212人	24.0%	222人	22.9%
どちらかと言えば反対	20人	23.5%	114人	12.9%	134人	13.8%
強く反対	2人	2.4%	11人	1.2%	13人	1.3%
	85人		884人		969人	

◇アンケート概要

時期：2015年度秋学期（10月頃）

対象：経済学部生（ゼミ所属1～4年生）・回答者数969名。

方法：ゼミ担当教員がアンケート用紙を配付・回収

○集まった主な意見（自由記述）は以下の通りです。

【肯定的意見】

- ・都構想は革新的。反対派は自分たちの既得権を守るために反対したとしか思えない。
- ・否決されたとはいえ、年齢別に見ると、ほとんどの世代が賛成多数だった。この構想に限ったことではないが、年齢別、世代間の不平等はやはり存在すると思う。
- ・今のままでは大阪は良くならないだろう。都構想がどんな結果をもたらすかは分からないが、何か変化をもたらすのなら一度やって欲しかった。
- ・反対派のなかにも二重行政を解消せよという意見はあり、府民の理解（特に若者）が全く浸透しなかったのが問題だと思う。構想名にインパクトがあるだけに様々な誤解を招いた印象。
- ・少子高齢化を考えると現状維持も難しくなるという状況で、大阪会議も機能しておらず、何も変わっていない現状を見ると、都構想は可決すべきだったと思う。

【否定的意見】

- ・歳出を減らす計画に具体性がない。
- ・都にするのは時代に逆行している。

2015年
6月8日
月曜日

豊原 法彦 教授 (計量経済学)

「JIS規格」

「進捗」の「捗」という字を皆さんはどのように書かれるでしょうか。「手偏に歩」と学んだかもしれませんが、右の字をよく見てください。傍の下の部分が「少」ではなく

右側の点がないのに気が付かれたでしょうか。実は「歩」という文字は点のない字がオリジナルで漢和辞典によりますと歩のように上に「止」を、その下に「止」を左右ひっくり返したような文字が書かれており、足跡をあらわしているそうです。そして楷書体になる段階で「歩」になっていったと考えられています。ところが「歩」に手偏が付いた文字「歩」は1978年のJIS (日本工業規格) に旁が「歩」と定められて以来2004年までそのままになっていました。お手持ちのパソコンにあるフォントをみると、「歩」の下が「少」になっているかもしれません。また

パソコン上の文字はJISとして決まっております、文化庁や文部科学省ではないところも興味深いところです。

同様のことが祈祷の「禱」の字にも当てはまり、「寿」は「壽」の略字としてJIS第1水準に登録されていますが、それに示偏が付いた文字である「禱」もいつのまにか略字が主たるものとして登録されています。つまり少し古いパソコンをお使いの方が「祈禱」と書いたメールを送ったとしても受け手のパソコンの環境によっては「祈禱」になってしまうということもあります。

規格ということでは話題を展開します。皆さんはお手元にスマホをお持ちの方も多いと思いますが、電話番号をプッシュするときと電卓で計算するときでは数字の並びが違いうことにお気づきでしょうか？ 前者の画

面では左上隅から右に向かって1, 2, 3となっており、後者では7, 8, 9となっており、前者は国際電気通信連合、後者は国際標準化機構に基づいて決定されています。ちなみに日本で前者を担当するのは総務省 (旧郵政省)、後者は経済産業省 (旧通商産業省) です。もちろん各々便利になるように規格の統一を目指してきたのですが、いったん定まってしまうと変更するのが難しく、今に至っております。同じような例を次に掲げます。

海外旅行をされた方の中には、あちらでパソコンなどを充電しようとするコンセントや電圧が違って困った最悪の場合には機械が壊れてしまったといった経験をお持ちの方もおられるかもしれません。ところがここ20年ほどで広まったインターネットの世界はそのようなことは全

くなく、LANケーブルの接続端子はRJ45という規格に従っており、世界共通です。このように新しい規格はグローバルに決定されるのでこれまでよりも困難は少ないのかもしれませんが、もちろんUSBのように次から次へと規格が生まれる (進化する?) もあります。

最後に。マタイによる福音書にありますようにヘロデ王の命を受けた東方の三博士が母マリヤのそばにいる幼な子に会った際にはフェイストゥーフェイスで情報を伝達できませんでしたが、ICT社会では情報の規格化が必須です。同じものを基準にすることなしには想定された結果が得られないということを認識して、情報化社会を楽しんでください。

2015年
6月12日
金曜日

高林 喜久生 教授（財政学）

経路依存性と「大阪都構想」

みなさんは「経路依存性（path dependence）」という言葉を知っていますか。経路依存性とは、制度や仕組みが過去の経緯や歴史的な偶然、初期状態などによって拘束（ロックイン）されることを言います。

暮らし回りの例としては商用交流電源の周波数が、東日本で50Hzと西日本で60Hzと違っていることが挙げられます。これは明治時代に、関東では、東京電燈（今の東京電力）が50Hz仕様のドイツ製発電機を導入する一方、関西では、大阪電燈（今の関西電力）が60Hz仕様の米国製発電機を導入したことに由来しています。それらを起点に各地の電力供給網が整備されていった結果、東西の周波数の違いが形成され、ロックインされたわけです。

今回のエコノフォーラムの座談会

のテーマは「大阪都構想」です。「大阪都構想」では、政令指定都市である大阪府を廃止する一方、大阪府を東京都のような都区制度に移行することが提案されています。そこで問題になった「府市合わせ（不幸せ）」と言われる大阪府市の仲の悪さや「二重行政」のかなりの部分もこの「経路依存性」で説明できると思います。

大阪府市には、戦後間もなくから大阪府域拡張を巡る対立があり、1956年の政令指定都市制度発足後も1970年頃まで市域拡張をめぐる論争が続くという歴史があり、それが府市の間で「不幸せ」されています。

また、大阪府は地理的に大阪府の真ん中に位置しています。大阪府は府下市町村のために、補完行政を行う必要がありますが、公共

サービスは公共施設を通じて供給されることが多いため、大阪府はそのサービス供給の拠点を交通の便利な大阪市内に集中的に建設します。もちろん大阪府は大阪市民へのサービス供給の拠点を大阪市内に建設します。すなわち、類似のサービスの供給拠点が併存し、「二重行政」が発生するということとなります。しかし、同じ府県と政令指定都市との関係であっても、他では大阪のような「府市合わせ」や深刻な「二重行政」といった事態には至りません。兵庫県と神戸市、京都府と京都市、愛知県と名古屋市、神奈川県と横浜市では、府県域は広く、しかも各市は各府県の端の方に位置しており、バッキングしにくくなっています。

これらのことは、大阪府市の抱える問題は、過去の大阪府域拡張運動の「しこり」という歴史的経緯や「小

さな大阪府の真ん中に大きな大阪府が位置する」という地理的条件に起因するところが大きく、問題の本質は政令指定都市制度という大都市制度にあるのではないということを示していると思います。

実は、「大阪都構想」がモデルとした東京都の都区制度も「経路依存性」によるものと考えられます。すなわち第2次世界大戦中の1943年に、旧東京府と旧東京市が、戦時法令である旧東京都制の施行に伴って合併して東京都が設置され、その仕組みが戦後も維持されたのです。

私たちが相対している様々な仕組みの「現状」の姿は、思いのほか過去に起こった偶然的な事件や初期状態の影響を大きく受けているようです。経路依存の力は、経済がある特定の経路に入ると経路変更することをきわめて難しくしています。

2015年
6月16日
火曜日

男女関係と仮マッチング

猪野 弘明 准教授 (産業組織論)

私がアメリカで暮らしたときに知って驚いたことの1つに、男女の関係における dating という考え方がありました。日本で男女が付き合うときは「好きです」と言った告白から始まり、一度カップルになってしまえば（人による程度の差はあるかもしれないが）浮気は許されないと、いう感覚が一般的です。しかし、アメリカにおける dating 期間は本格的に付き合う前のお試し期間のようなもので、あまり拘束的なものではなく、わりと気軽に解消できるようです。「あなたに興味があるから、デートしてみよう」という関係で、その間にもっと良い人がいればそちらに乗り換えてもよいと認識されているのです。

このようなことを聞くと、日本的な感覚では軽いと思われるかもしれませんが、経済学でマッチン

グ理論といわれる分野の研究成果としてよく知られるゲール・シャプレー・メカニズムを通して見ると、なるほどと思われる節があります（提唱者の一人、ロイド・シャプレーは2012年のノーベル経済学賞受賞者です）。この dating 期間のような「仮マッチング」が安定的なマッチング（組合せ）に行き着くための肝だからです。

ゲール・シャプレー・メカニズムを男女関係で解釈すると、アプローチする側はどんどん自分の好きな人に順にアタックする、言わば肉食系です。アプローチされる側はそれに答える受け身の草食系ですが、代わりに、仮マッチングでキープしておいてもっと良い人が現れたら乗り換えをします。すると、もちろん様々なカップルの組み合わせができいくわけですが、最終的には「誰

も別れて別のカップルを作る動機がない」という安定マッチングの状態に行き着くことが理論的に知られています。

では何故安定するのでしょいか。まずアプローチされる草食系のほう、この仮マッチングによるキープという「逆襲」によって、乗り換えるを繰り返していけば自分の願望を満たすことができ安定します。アプローチする肉食系にとっては、どうでしょう。本当はもっと好きでも人気のある人は避けて「うまく行きそうな相手から」という行動が起こり、結果としてマッチングしても、「もっと良い人とチャンスがあるかもしれない」と後悔する（安定しない）ことがありそうです。しかし、現実的に起こりそうなこの問題も、仮マッチングがあれば解決できま

が仮マッチングを繰り返していることを知ることになるからです。もし後からアプローチしても、自分のほうが良ければ容易に乗り換えてもらえるわけです。ということは、最初から嘘をつかずに一番好きな人から順にアタックするのが合理的です。結果、そもそも良い人から選んでいるので、別れる動機はなく安定的になるといえます。

参考文献…ここで述べたゲール・シャプレー・メカニズムについては『ミチと学びたい場合は、まずは『ミクロ経済学』林貴志（ミネルヴァ書、2007）の22章2マッチングの項を読むことをお勧めする。メカニズムの数学的な構造が、難しい前提知識を要求せずについた4ページで簡潔明瞭に解説されており、非常に分かりやすい。

2015年
6月18日
木曜日

都市の形成

山鹿 久木 教授（都市経済学）

都市経済学では、都市の形成のメカニズムを簡単なモデルを用いて説明する。

「都市」という言葉に厳密な定義はないが、その言葉を聞いて思い浮かべる都市の姿は、人によってさまざまである。生まれ育った地を思う人もあり、就職してから住み始めたところを思う人もある。まったく異なる都市像であっても、都市経済学の理論では、簡単なモデルを用いることで、どの都市にもある程度あてはまる、典型的な都市の特徴を説明しようと試みる。その典型的な都市の特徴の一つに、都市の中心地と呼ばれる地域の建物は、高く密集して建っており、そこから離れるにしたがって、建物が低く、一つの区画の面積が大きくなっていく、というものがあげられる。ではなぜ、そのような姿になるのか。このメカニズム

を、都市に住む側（需要側）と住宅を提供する側（供給側）とにわけて考えてみよう。

需要側が住む場所を決定する時に考える一番の要因はおそらく通勤地（通学地）への利便さであろう。これらの行動はほぼ毎日であるから、それが不便であるということは、時間的にも金銭的にも人生において大きな犠牲を伴う。したがって、できれば通勤地に近い便利なお店やサービス施設がほしい。しかし土地には限りがあるため、希望者全員が中心地付近に住めるわけではない。土地の場合、その場所の土地は1つしか存在しないため、その地に最も高いお金を支払うことができる人がそこに住むことになる。

中心地から離れるに従い、不便になり、また土地の面積も増えていくため、住むために土地に対して支払

う料金も低くなる。その代わりに同じ予算であっても広い面積の土地を得て、不便さへの不満に代えている。このように、「便利だが狭い」、あるいは「不便だが広い」、という立地と住宅の特性の違いが、都市内の住民の満足度のバランスをとっている。

住む場所を提供する開発者（供給者）はどのような建物を都市に提供するだろうか。開発者は土地を買い、その上に資材を投入して建物を建てる。狭さを犠牲にしてまでも便利なお店やサービス施設を建てる。住民は限られたスペースに対してより多くのお金を払おうとする。そのような地域に住居を提供することは企業にとっても大きな利益をうむため、土地や住宅の価格は高くなる。このことはすなわち開発者にとつての土地取得コストも高くなることを意味す

る。一方で、郊外になるとスペースの制限が中心地ほど厳しくないため、住宅の価格も下がり、利益はそれほどでないが、一方で土地取得コストは低くおさえられる。建物を建てるための資材の価格は中心地でも郊外でも同じなので、中心地では土地の価格に比して資材が割安になり、郊外では割高になる。すなわち、開発者は中心地では小さな土地スペースに多くの資材を投入し、高い建物を建築するし、郊外では広い土地に低い建物を建築することが利益を大きくするための最適な行動となる。

よって都市の姿は中心地では高いビルが密集し、郊外では広い住宅、低い建物が多くなった。

2015年
6月19日
金曜日

井口 泰 教授（労働経済学）

「ニューノーマル」の世界を 生きる勇氣

皆さんは、「ニューノーマル（new normal）」という言葉が、世界中を飛び交っているのを知っていますか。この言葉は、最近になって中国の習近平主席が「新常态」ということばを使用したことでも、知られています。もともとは、2008年9

月に起きた世界経済危機のあと、世界経済が新たな展開に入ることを期待した経済ジャーナリストが使用したのが始まりです。

2015年6月の現在、「ニューノーマル」という用語は、当たり前のこととなっている耐えがたい事態を、維持することに加担せずに、新たな対応に踏み出すという意味で使用されています。

世界経済危機のあと、中国は巨額の公共投資でインフラ整備を推進し、中国内陸部の開発を進めるなかで、アメリカは、金融の量的緩和を進めて、世界に低利のドル資金を供給

しました。しかし、多くの新興国で、環境汚染や汚職の蔓延を招き、世界的な資源価格の高騰などでバブル経済が再発しました。先進国のみならず新興国でも、国内の所得や富の格差が拡大しているのです。

経済格差の拡大は、2011年に北アフリカで起きた「アラブの春」という各国の政変の背景にもなりました。これら地域では、西側諸国が輸出した武器がテロ集団に渡り、政情は悪化しました。

その結果、地中海をはさみ、EUで債務危機の結果、高い若年失業が続くなか、マグレブでは、宗派や部族間の抗争が激化し、欧米諸国が「テロと戦う」空爆が強化されました。こうして多数の難民が発生し、経済状態の良好なドイツを目指して移動しています。

EUによれば、2014年には3400人近くが地中海で溺死した

そうです。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）によれば、2015年前半の難民及び避難民は合計5950万人に達し、1年前と比べ1400万人も増加した模様です。東南アジアでも、5月中旬から、

もともとは、バングラデシュからの移動者であったロヒンギャというイスラム教徒が、ミャンマーの過激な仏教徒と対立し、2万人以上が、ボートピープルとして流出しました。

近年、地球温暖化の傾向のなか耕作地が減少し、飢饉が生じやすくなり、鉱物資源の獲得も、部族間の対立の背景となっています。失業した若者が兵士として戦いに加わるなど、貧困が戦争内戦を引き起こしやすいつながりができているのです。

中国では、内需拡大政策が多くの腐敗を生みました。中国語で「ハエ（小役人の日常汚職）たたき」、「トラー（幹部の蓄財）たたき」など言葉

が飛び交っています。少子化で若年労働力の伸びが鈍り、海外からの資本流入が細り、7%の実質経済成長率を維持するのは容易でありません。中国政府は、外国人高度人材の受入れを進める政策を打ち出し、アジア・インフラ投資銀行（AIIB）を自ら設立しました。

本日の聖書の箇所（ルカ16：19-26）で、豊かな若者と貧しいラザロが対照され、自分の生き方に、何の疑問も持たない豊かな若者の姿が描かれています。大学での学びの目的が就職することだけになり、論理的な思考や証拠を重視する議論が行われず、答ありきの思考法が蔓延することを憂慮します。来年から、選挙権が18歳以上の若者に付与されます。皆さんは、これまで「ノーマル」とされてきたことを、しっかりと問い直す勇氣もってください。

2015年
6月22日
月曜日

新海 哲哉 教授（理論経済学）

「個人の効用と社会」

技術革新と経済の発展は、われわれに便利でより豊かな生活の享受を可能にしてきた。例えば、日々利用している身近なモノでわれわれに多くの便益を与えているモノとして一つ例を挙げれば、スマートフォンがある。スマートフォンを使えば、電車やバスなど交通機関を利用中や街を散歩していても、写真、動画も撮れるし、LINEなどのアプリを使えば、無料通話やリアルタイムの会話も楽しめる。また、ネットからダウンロードした音楽も聴けるし、電子書籍だって読める。これらの楽しみは、われわれスマホの利用者の効用や喜びを増加させる。

その一方で、個人の楽しみや喜びを追求するために、通勤中の電車の乗降ドアの近くでスマホのゲームのバズドラに夢中な人を見かける。こういう人の中には、電車が駅に停車

し、降車しようとする乗客の邪魔になつても、スマホから目を離さないマナーの悪い人も多い。さらには電車から降りて階段を使って改札口に移動する間も平然とゲームを続け、或いはメールやラインを入力し続け、一歩間違えば他人に怪我をさせかねない迷惑をかけている人を見かけることさえある。

トヨタがエネルギー消費を抑えかつ排気ガスをも減らして、地球環境と地球温暖化抑制を目指し、技術開発して供給しているハイブリッド車プリウスはそれに乗る人々の効用を高め、社会にもよい影響を与えている。しかし、プリウスの特徴かつ長所である、所有者・運転者の居住性や乗り心地を高めるエンジン音の減少も、視覚、聴覚を頼りに安全な移動を試みる歩行者や音を頼りに聴覚を頼りに移動する視覚障がい者に

は、負の影響を与えているのである。

このように、技術革新とわれわれ購入者・利用者の喜びや利便性、効用を高める製品やサービスも、利用者がその利用する場所やとき（時）、環境に配慮することを忘れてしまうと、意図せずして他の人々や社会に害を与えてしまうことをわれわれは忘れてはならないのである。

これまで、企業は技術革新を重ね、人々の個人の効用と利便性を高める製品やサービスの開発と生産供給をすることにより、雇用機会を増やし、富と価値を生み出しわれわれ消費者の効用を高め、社会経済の発展に寄与してきた。しかし、企業も新たな製品やサービスの開発にあたっては、その製品やサービスの購入者の効用を高めることと生産コストだけに目を向けるのではなく、その利用の仕方によっては購入者以外

の他人や社会に害を与える可能性も考慮すべきである。また、その製品やサービスを購入し、利用するわれわれもその利用の場所やとき（時）、環境を考慮して利用することが経済社会の発展に寄与することになることを認識することが大切である。

2015年
6月23日
火曜日

林 宣嗣 教授（財政学）

大阪都構想論議から 何を学ぶか？

「大阪都構想」の是非を問う住民投票が5月17日に行われ、僅差で都構想は否定された。今日は都構想を都自体についてではなく、賛成派と反対派で展開された論議に焦点を当てたい。

1. 地域や都市のあり方は、yesかnoかで決めることなのか？

住民投票を評価する自治体関係者もいる。しかし、住民投票は「賛成」か「反対」かのみが争点となり、その間の選択肢はない。現実の経済問題には「これが正解だ」というものはほとんどない。とくに価値判断が必要とされる問題はそうだ。大阪の将来像として選択肢が都構想にyesかnoかという2つしかないというのは問題である。右肩上がりの成長が期待できない日本において、市民が豊かになるためには、選択肢を増やして、市民の満足を最大にできる

解決策を提示しなければならぬ。

ある政策課題に直面したとき、yesかnoかではつきりと答えを出せる人は、その課題に関して十分な勉強をしていない人ではないか。勉強すればするほどyesかnoかを断定することが難しくなり、歯切れが悪くなる。イメージや思いつきでyesかnoかを判断するのではなく、思いつきり勉強して、その上で、判断を下すというトレーニングを積んで欲しい。

2. yesかnoかの対立を煽るのは政治ではない

市民にも多くの考え方があろう。とくに価値観が多様化している今日、その多様な考え方の中で、多くの人が納得する解決策を考えるべき。政治というのは、多様な考えを一つの適正なところに導いていくものだ。ところが、今回の都構想はyesかnoかという対立を表面化させ、市民を対

立の構図に持って行ってしまった。これは正しい政治のあり方ではない。

3. 中長期的な展望が不十分であり、十分な理解がないまま住民投票で決着を付けるという、非常に危険な状況に陥っていた。

当初、大阪都構想は、東京一極集中が進む中、元気を失ってきた大阪を活性化させるというねらいがあった。しかし、次第に二重行政の解消や財政の効率化というところに焦点が当たっていった。その結果、大阪都になることによってどの程度の財源が生み出せるか？という金額の論議になってしまった。大阪の将来を決定づけるほどの重大な政策課題を、こんなに局所的かつ近視眼的な視点で決めてしまっているのか？とくに、内容を十分に理解できていない市民の投票によって決まってしまうことは、非常に怖いことではないか。

4. こうした事態に陥ってしまった背景には、「リーダー」に関する誤った考えがある。

元野球監督の野村克也さんが「どんな組織もリーダー以上のものにはならない」と言った。組織が成長するか衰退するかはリーダー次第ということだ。しかし、リーダーシップというのは、決して、上意下達によって、リーダーの意思をしゃにむに実現していくことではない。リーダーシップとは、「俺についてこい」ではなく、チームや組織を活かし機能させることのできる資質である。皆さんの中には、「リーダーシップが発揮できる人になりたい」と思っている人も多いだろう。「マスタリアフォアサービス」にはまさに、こうしたリーダーシップを発揮できる人材に育って欲しいという思いが込められている。

2015年
6月25日
木曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

競争の倫理

競争とは文字通り「競い争う」と。受験・就職・出世・政治・経済、どれもこれも競争であり、それが厳しい現実である。さて、動物界の競争と人間界の競争との違いは何か？最大の違いの一つは道徳の有無だろう。ケモノの争いは弱肉強食の生存競争であり、守るべきルールはなく、生きるためなら何をしてもいい。他方、人間の競争には諸々の道徳や法がある。ただしそれらが不完全であるほどに、あるいはそれらの可能性を諦めるほどに、人々の競争はケモノの争いに接近してゆく。

私たちは皆、壮大な「人生ゲーム」のプレイヤーと言ってよい。それゆえまず、競争ゲームの倫理的最低条件と言える「公平性」(fairness、すなわち機会均等)について考えよう。ハーバード大学の政治哲学者ジョン・ロールズは、著書『正義論』(A Theory of Justice, 1971)などで、次のような有名な議論を展開した。すべてのプレイヤー(男と女、健康者と障害者、豊かな親の子と貧しい親の子、途上国の人々と先進国の人々、等々)にとって公平な制度(ルール)とは、どんなものか？皆で議論して公平な制度を作ることにしてしよう。だが、皆それぞれ自分が都合のよいルールを提案するので、意見はまとまらない。結局、実際の多くの場合にそうであるように、多数決という強制力によって多数派(例えば健康者)が少数派(例えば障害者)を抑え込むだろう。これではフェアな競争にならない。しかしあくまでも想像上の話だが、もしその会議に集う人々が、まだ生まれる前のいわば精神のみ(肉体なし)の人々であり、自分の性別、先天的障害、親の財産、生まれる国などに

ついて「あらかじめ知ることができない」とすれば(これを「無知のヴェール」と呼ぶ)、自分がどんな条件下に生まれても不利にならないように、できるだけフェアな社会制度を作っておこうと思うのではなにか？ロールズによれば、こうした「無知のヴェール」のもとで皆の合意によって形成されるルールこそ、フェアな競争をもたらす社会制度である。ロールズの議論は、実現不可能な空想論であるとはいえ、万人に公平な社会を考えるさいの一つの評価基準を提供してくれる。

最後に、人間の競争のもう一つの重要側面を見るために、「スポーツ精神」に注目したい。すなわちそこには、フェア・プレイ(公平)の要素に加えて、「友愛」(friendship)という独自の要素がある。理想的なスポーツ精神のもとでは、選手は互いに敬い合いながら、しかも互いに全力で争うのである。

自由競争の思想は、「勝てば官軍」式のケモノ的ダーウィニズムではない。人間の競争には、「公平」(機会均等)と「友愛」(勝者が敗者自身発的に思いやること)が必要ではないだろうか？私は、その両者を併せもつスポーツ精神のうちに、最も美しい競争社会の萌芽が、未来のためのヒントが、あるように思う。■

2015年
6月29日
月曜日

平山 健二郎 教授 (金融論)

良き書との付き合い

私も若いときは入学式や卒業式などの儀式は嫌いでしたが、年齢とともに丸くなるという言葉のか保守化するというのかそういう儀式が好きになってきました、入学式などできるだけ出席するようにしています。それである入学式で学長先生が新入生の皆さんに「大学の四年間で、良き師、良き友、良き書と出会いなさい」と言われたことが強く印象に残っています。これはなかなかの名言と思います。

幸い自身の大学生活では良き師、良き友、良き書に恵まれたと思っています。さて、今日は私が大学時代あるいは大学院時代に出会った「良き書」についてお話ししたいと思います。二冊あるのですが、どちらも山本七平という人の著作です。一冊目は『日本人とユダヤ人』という本で、いかにこれら二つの民族

が異なった考えを持っているかということが繰り返し書かれています。その中でとくに驚いたのが会議における票決の仕方の違いです。日本では全員一致の票決を好ましいと考えます。私が出席する教授会という会議でも投票する場合は採用人事などの最重要案件だけで、普段は学部長が務める議長が、「これでよろしいですね」と念を押すと、メンバーが頷いて承認するという全員一致の形をとって採決しています。

ところが著者の山本七平は「ユダヤの社会では全員一致の票決は採用しない。世の中に完璧な提案など存在しない。かならず何らかの弱点を持つているはずで、それに誰も気づかないのはおかしい。誰かがそれに気づくまでは全員一致は採決しない」という。

「和を以て尊しとなす」とする日

本人は全員が同じ意見になることを理想とするが、ユダヤの社会ではそうではない、というのは「目から鱗が落ちる」思いがしました。たしかに、そういう見方もできる、ということに気づかされた本でした。世界には色々な考え方があつたのだと感心した次第です。

二冊目は『空気』の研究』という本です。最近でこそ「KY」空気読めないのような表現がされますので、この「空気」の意味は悟って戴けると思いますが、本書が出た一九七七年ころはまだそういう用法は少なく、私も本書を読むまでは、何のこともサッパリ想像できませんでした。

さて、本書では昭和二十年四月の海軍第二艦隊の幕僚会議を採り上げます。沖繩では地上戦が始まっております。制海権制空権ともに米軍に取り返されています。そこへ戦艦大和を派遣

するか否かを幕僚会議で検討するわけですが、行けば撃沈されることは誰の目にも明らかである。しかも燃料は片道分しかない。しかるにそのときの会議には「これは派遣せざるを得ない空気があつたということ」です。

皆、内心はおかしいと思いつつも、会議には空気というものがあつた、それに抗しきれない動きがあるというのです。日本人はつい他人に合わせしてしまいますが、ここぞというときにはやはり発言する勇氣を持つべきではないか、ということをお勧めしたと感じました。

私が山本七平氏から学んだことをどれだけ人生で活かせたかは自信がありませんが、これら二つの著作から学んだことを念頭に置きながら人生を歩んできた積もりです。皆さんも大学時代に「良き書」に出会われることを祈って止みません。 ■

2015年
6月30日
火曜日

「おちくぼんだ目のふちに白い風が吹いていきます。よたよたと波を切り船をあちこち走らせているのですがこの暑い日々は潮の中にうずくまっていけばかりなのでしょう。日が一変わりなく雲がうまれ雲が流れていきます。ぼくはかがみこんで餌をつけよたよたと船を走らせていきます。そのたびに海の眠り、空の破れ、折れ曲がった手、折れ曲がった眼の巨大な声の孤独について思いたるのです」
長沢哲夫

ナットン、ガブリエル、ファリス、トゥフイック、マテオ、ミロ、彼らは皆、可愛い小学1年生で、滅茶苦茶にやんちゃで、うちの子どものサッカーチームのチームメイト。日本でもベルギーでもサッカーは人気があるし、日本の自宅がある宝塚市にも少年サッカーチームはたくさんある。ただ、このAnderghemのサッ

栗田 匡相 准教授（開発経済学）

「違う」「違う」の思考を救うために

カーチームがちよっと違うのは、いろんな色の子ども達がいるということ。白かったり、黒かったり、浅黒かったり、黄色かったり。でもうちの息子はそんな違いはまるで何もないかのように彼らとじゃれあつて楽しそうにしている。何故、フランス語もできないうちの子どもが彼らと楽しそうにじゃれ合いながら、サッカーができるのだろうか？

何か「違う」ということを認識出来るようになることが心の成長なのだとすれば、40年以上も「違う」ということに意識を向けてきた私のような人間は、世の中の「違う」としか理解できないのかもしれない。それでも、子ども達のあまりの無邪気さとおおらかさとやんちゃぶりに、私の「違う」の思考が停止して、涙がこみ上げるような不可思議なよくわからない感情が時折訪れる。喪失か、郷愁か、あるいは羨望

なのか、それがどういった感情なのか「違う」思考の世界に生きる住人にはよくわからない。

日本ではテロリストの巣窟として報道されていたモレンビーク地域は、ブリュッセルの自宅から直線距離だと10kmも離れておらず、子どものサッカーチームにもテロリストの巣窟地域から通っている子もいる。すごく優しい子だ。彼のお父さんが子どもに向けるまなざしもとても優しい。だからなんなのだろうか？テロリストの巣窟地域に優しい親子が住んでいるということは、テロのなにかを1ミリも肯定できないどころか何も関係が無いことだ。また、テロリストの巣窟地域は、現在では一部観光地化すらしているらしい。欧州の中心地ブリュッセルの普通に公共交通機関でたどり着ける場所なのだから当然といえば当然だ。こういうことを理解・把握できるのが「違

う」の思考だともいえるし、世を生き抜くために正しい「違う」の思考が必要なことは言うまでもない。でも優しい親子がモレンビーク地域に住んでいるということ、そして彼らは知り合いだということ。肌の色も言語も食習慣も違うということ。でも子ども達のじゃれあい何故か私に涙を誘うということ。そこには「違う」の思考ではおそらくたどり着けない何かがある。

単なる郷愁や羨望ではなく子ども達のふれあいが私に涙を誘うのであれば、おそらく社会性や政治性を帯びた私という存在の足下をぐらつかせるからに違いない。50になっても60になってもこの不可思議な感情を受け止めることを大事にしたいと思う。絶望的に想像力を欠いたこの社会に「違い」を揺るがすこの不可思議な力こそが救いだと思うから。

2015年
7月3日
金曜日

野村 宗訓 教授（産業経済学）

健全なグローバル社会 を築くために

① グローバル化に伴う社会の変化

「グローバル化」をどのように定義するかは、意外に難しいと思います。特に、「国際化」との差異を明確に説明するのは容易ではありません。文科省はスーパーグローバル大学を指定して、入試制度も含めた教育の再検討を促しています。

もともと教育に国境はないと考えられています。地理的に島国のわが国では科目や内容に多様性が欠けていたのかもしれませんが、本学では交換留学などの国際交流活動は積極的に展開されてきましたが、将来、世界で活躍できる人材を多数、育成していくことが求められています。

② 訪日外国人増加と相互理解の心

最近のニュースではT P P 推進やインフラ輸出の話題に加え、L C C の普及によるインバウンドの急増も注目されています。大都市圏では、

訪日客を受け入れるホテルの部屋が不足するほどです。日常生活においても、主要駅や百貨店で外国人客が増えていることを目の当たりにしていると思います。

2020年のオリンピック開催に向けて、スタジアムなどの建設計画が進んでいますが、費用負担が大きくな障壁となっています。ハコモノ施設も大事ですが、食生活や宗教などについて相互に理解しようとする姿勢も大切なのではないでしょうか。

③ グローバル化の弊害や逆行現象

グローバル化は必ずしもメリットをもたらすだけではなく、倫理観や価値観の違いから国家間の対立を招く場合もあります。植民地支配や領地拡大の背景には、資源獲得をめぐる争いもありました。一方的な海外展開や暴力的なテロ行為は、悲しさや虚しさを増幅するだけです。

過去の過ちを繰り返さないための方策が熟慮されるべきことは言うまでもありません。現在でも外交レベルの摩擦が市民生活を脅かしていますが、健全なグローバル社会を築くためには、対話に基づく解決策を見出す必要があります。

④ 「包摂」に基づく国際秩序の形成

経済活動が国際分業で成り立っていることは周知の通りです。EUやアセアンにおいては、加盟国が広域経済圏の形成に多大な貢献をしてきました。貿易の拠点として港湾や空港が世界に向けてオープンになっていなければ、閉鎖社会のまま終わってしまうこととなります。

スポーツや音楽・芸術活動に関しても、国際レベルでの活躍が認められているからこそ、視聴者やファン層の支持があると考えられます。国際秩序を維持するためには、他者を

包摂する施策が重要であることは誰もが認めることです。

⑤ フロンティア拡大とルール整備

近年、地球温暖化によって北極海の氷が解けているために、新たな航路と海洋資源をめぐる権利が国際問題となっています。また、無人飛行機「ドローン」や航空機と宇宙船の中間的な乗り物「スペースプレーン」が、商業化される方向で実験段階にあります。これらは軍事上の技術と密接に関係しています。

地球を取り巻くフロンティアが海と空で拡がっている一方で、国際ルールの整備は遅れています。今後、技術開発のみならず制度設計の協力も不可欠です。本学は海外の大学院へ留学し、地球規模で学ぶことを奨励しています。ぜひグローバル人材として、そのような機会に挑戦してほしいと願っています。

2015年
7月10日
金曜日

藤原 憲二 教授（国際経済学）

ミクロ経済学のすすめ

ここ数年「経済と経済学の基礎B」や「上級ミクロ経済学」を担当し、改めてミクロ経済学の重要性を認識した。しかし本学部生には「経基B」は必修科目だから仕方なく勉強するのであり、なぜこんなものが必修なのか分らないという人もいよう。その答えは結局現実の経済問題を感情や俗説ではなくきちんと筋道立てて理解するのにミクロ経済学が不可欠だからである。例えば私が「経基B」で使っているマンキューの教科書や発売直後から好評を得ている神取道宏（2014年）『ミクロ経済学の力』（日本評論社）にはふんだんな例が載っている。

使い古された例だがT P P（環太平洋連携協定）はミクロ経済学の力を見る好例である。様々な政治的な要素は排除し純粋に経済学的な部分だけを取り出すとT P Pの骨子は貿

易を（地域的にはあるが）自由にすることである。それにはメリットもデメリットもある。メリットとして消費者は農産物をはじめ安く物を買え、輸出業者は輸出を伸ばすことで利益を増やせる。他方デメリットとしては安い農産品のせいで国内農家がつぶれる。それでも経済学者が概ねT P Pに賛成するのは、T P Pによる損失をカバーし余りあるだけの利益が出ることがミクロ経済学を使うと証明できるからである。

では経済学者が大事だと強調するミクロ経済学をどうすれば「文系」学生にも無理なく理解できるだろうか。これに対するひとつの答えは単一の財市場に焦点を絞る部分均衡分析（需要供給曲線図）から入ることである。私が学部生だった頃の日本では教科書も教育現場も無差別曲線を使う消費者の一般均衡分析から始

まっていた。ここで一般均衡分析とは複数の財市場を考えるもので、部分均衡分析よりも難しい。現実のひとつの市場だけで完結することはなく、様々な財市場が相互に影響を与えながら動いている。しかしマンキューはこの考えを28年度変え、部分均衡分析から始める。この手法はたちまち日本の教育現場にも浸透し、私の専門である国際経済学の教育にも大きな影響を与えた。実は私は先述のように一般均衡分析から入る教育を受けたので、教員として本学に着任した当初もこの方法で講義していたが学生の理解が非常に悪かった。そこである年から部分均衡分析を先に持つてくると非常にスムーズに理解が進んだ経験がある。

この秋学期に「経基B」を受けてミクロ経済学に戸惑う人もいるかもしれないが、今日私が話したことを頭

の片隅に置いておき必要ときに思い出してもらえれば幸いである。ただ部分均衡分析というのは簡易的なものなので、それに満足せず経済学部の皆さんには一般均衡分析にもチャレンジしてほしい。

1 すでに「経基B」を受けた人向けにいうと「生産者余剰の縮小よりも消費者余剰の拡大の方が大きくなる」からT P Pは進めるべきという結論になる。

2 石川城太・椋寛・菊地徹（2007年）『国際経済学をつかむ』（有斐閣）がこの方法を取り入れた最初の国際経済学の邦書である。

2015年
11月9日
月曜日

舟木 讓 教授 (宗教哲学・キリスト教学)

「人間を考える」 —見えない世界へのまなび—

2011年8月の「障害者基本法改正」による「差別の禁止」における「合理的配慮」の追加に伴い、2012

年6月、文部科学省高等教育局においても「障がいのある学生の修学支援に関する検討会」が開始され、「合理的配慮」の検討が始まった。

本学においてもこうした動きを受けてどのような取り組みをすべきかが検討され、今年度中にその具体的な規定等が決定される予定である。今後その規定を礎として、これから明らかになる様々な具体的な事柄の中でより合理的な対応を実践していくことが必要となってくる。

このような形で大学における「障害のある」学生らに、よりきめ細かな配慮をすることへの新しい一歩が始まるが、本学がこれまで紡いできた歴史の中で、本学での学びを経てすでに「障害のある」方々への様々な取り組みを行った方々が数多く誕生したことも忘れてはならない。特

に2015年はその一人である本間一夫氏の生誕百年にあたる記念の年である。

本間氏は1915年に北海道の増毛で生まれ、1920年の冬に脳膜炎に患したことによって視力を喪失され、「函館盲学院」で学んでいる際に、いずれも関西学院の卒業生である熊谷鉄太郎牧師と岩橋武雄氏(当時、関西学院大学教授)との出会いを経て、関西学院入学へと導かれ、また在学中に当時のベーツ院長より洗礼を受けてクリスチャンとされた方である。

卒業後は様々な苦勞ののち1935年東京に「日本点字図書館」を開設され、第二次世界大戦で焼失した後もその復興と発展に生涯尽力された方である。

その半生を自ら綴ったのが1980年に岩波新書として出版された『指と耳で読む—日本点字図書館と私—』である。そこには氏の幼

い頃からの歩みが記されているが、「見えない」ということが「当たり前」の世界を生きている人が存在している、という端的な事実を改めて気づかしめられ、そのことにあまり鈍感であることに恥じ入らされる思いとなる。

例えば、私たちが普段何気なく使う「色」に関する言葉もその「色」がいったいどのような雰囲気を持つており、どのような感情を誘引するのか、といった丁寧な表現がなければ視力を失った方には(中途失明だとある程度想像できるにしても)伝わらないという、当然の事実に対しても鈍感である。

「見えない世界」を生きるということへの想像力と共感がないところには、様々な「個性」を有している人々との真の共生は不可能であるということが改めて浮き彫りになる思いである。

ここから改めて問われるのは、私

たちが作り上げて来た世界・社会がそこに存在する多数派の人々の基準によって成立してきた、という事実である。そこでは少数者の日常は「特別」なもの、自らの努力によって多数派の考えに近づくことが当たり前と考えられてきた残酷な歴史が存在していると言える。

今ようやく「合理的配慮」というキーワードが公的に認知されることとなり、様々な背景・個性を有した(それは本来当たり前の実事である)人々が真に共存する世界を実現する新たな時が始まったと言いうる。

本学が先駆的にそのことを実現する学びの共同体を形成しようとしてきた歴史に改めて気づき、そのことが有する意味に光を当てて、新たな歴史を紡ぐ一つのきっかけとして、本間氏の生誕100年を覚えることは意義のあることではないだろうか。

2015年
11月10日
火曜日

Timothy Dale Boyle 教授 (キリスト教倫理)

謎めく人間の心 ヤコブの手紙3・2—10

「人間を考える」というテーマを聖書の立場から考えよう。私達人間は被造物の中で、自分の存在の意味を思いめぐらすことのできる唯一の存在者だ。なぜかと言うと、聖書によると、人間だけが「神にかたどって造られている」からだ。要するに、神と似ている、神の性質を反映している存在者だということ。この「神にかたどって造られている」ということに対して全ての人間に平等だ。それぞれの人間には能力などにおいては、平等ではないが、この点においては、皆が平等だ。それゆえに、同じ人権があるのだ。

一方、人間にはこの崇高な面があるにも関わらず、墮落している面もある。今日の聖書の箇所を書いてあるように、「私達は舌で、父である主を賛美し、又、舌で、神にかたどって造られた人間を呪う。同じ口か

ら、賛美と呪いが出てくるのだ。」ここでは、ヤコブは人間の舌を船の舵と比較し、その舵が小さいものであるにも関わらず、大きな船を方向転換させられる。しかし、同時に、舌は破壊的な山火事を引き起こさせる小さな火花のようなものであることをも書いた。

人間は本当に偉大さと哀れさのコンビネーションだ。この逆説を説明できるのは聖書の世界観だけだ。一方、神にかたどって造られているために、偉大な、崇高な存在者で、それ故に神様の性質と能力を部分的に反映している。しかし、他方では、人間が墮落している。我々は罪深いもので、毎日のニュースで見られる卑劣な行為はそれゆえに起こる。この「罪」という概念はよく誤解されるので、聖書で述べている「罪」はどういう意味か説明する必要がある。

。聖書では、「罪」は私達の行いよりも、聖なる神の前に立つ私たちの状態を示すのだ。罪を犯すので、自分が罪人となるのではなく、初めから罪人であるからこそ、罪を犯すことがあるということだ。

これは「人間とは何か」という根本的な議論に繋がって行く。人間は本質的に善であることは「性善説」と言い、悪であることは「性悪説」と言う。私なら、人間は本質的に善であることを信じたい。だが、聖書は違うことを教える。実は、両方を教えている。つまり、「神に象って造られた」という面に対して、「性善説」を教えているが、それは「罪」によって、損なわれているので、「性悪説」をも教えている。

様々な思想の中で、人間性は善であることを教えるものは殆ど。人間が起こす悪を説明するのに、人間の

心を狂わせることは、悪い環境や不十分な教育だと言う。だが、良い環境で育てられ、教育のある人がひどい悪を行なった例が数多くある。又、家庭環境がひどく、良い教育を受けていなかったのに、素晴らしい業績を残した例もあるので、明らかに完全な説明ではない。

では、人間が起こす悪はどう説明できるか。人間が偉大さと哀れさの不思議なコンビネーションである事実を説明できるのはこの聖書的世界観だけだ。だから、「人間を考える」というテーマを考えるのに、この世の現実を合う、人間に対する正しい見方が必要だ。これからの学生生活において、自分のことや社会のあり方などを考えて、自分の人生の方向を決めて行く大事な一時だ。人間に對する正しい見方がその出発点だ。

2015年
11月13日
金曜日

藤田 友尚 教授（フランス語、フランス文学）

フランス革命とテロリズム

私がこの題目でチャペル講話をしたまさにその日、戦後のフランス史上最悪と言われるテロ事件がパリで起こり、130名の死者を出した。1月に諷刺週刊誌「シャルリー・エブド」が襲撃されたばかりで、その悪夢も醒めやらぬ間に、再びパリは惨劇の舞台になった。もはや世界は、後戻りできない局面に突入したようだ。

テロの標的にされたフランスだが、皮肉にも「テロ」という語がフランス語由来の語であることはあまり知られていない。この語は英語の「テロリズム」の略された形だが、その元の語はフランス語の「テロリズム terrorisme」に由来する。正式にフランス語の語彙として辞書に採用されたのは1794年で、ジャコバン派主導による革命政権の「恐怖政治」のこのことを意味している。現在、テロリズムは何らかの政治的意図を持って武力や暴力によって政権側を揺さぶる手法という使われ方が一般

的だが、この語が使われ始めた頃は、権力を掌握する革命政権側が反対分子を暴力的に排除するという文脈で使われていた。

フランス革命は、1789年、民衆によるバスチーユの監獄の襲撃から始まるが、それからほぼ10年間、革命の指導者たちは誕生したばかりの共和国の基盤固めに躍起になっていた。その過程で反革命分子は激しく抵抗し、当時の国会にあたる国民公会でのジロンド派とジャコバン派の党派争いは熾烈を極めた。結局ジャコバン派が勝利し、1793年「反革命容疑者法」を制定し、それによって制度的に「恐怖政治」が実現されることになった。

この法律は、反革命的と何かわせる言動をみせたり、あるいは密告によって革命の精神に反対する人間を逮捕できる法律だった。被告となつて革命裁判所で死刑を言い渡されると、反論することさえ許されず、当

時考案された殺人器具ギロチンで容赦なく殺された。

革命政権がこのように過酷な手段に訴えることも厭わなかったのは、社会全体を王政の支配から解放し、「自由と平等」があまねく行き渡るよう徹底的に変革しようとする理想に燃えていたからだ。だが、王を頂点とする身分制社会を生きていた民衆が、一朝一夕で民主的に国を治める共和国の国民になることは不可能だ。とくに、ルイ16世とマリー・アントワネットを斬首にしたことは、単に王国が減びたという単純な事柄ではない。リン・ハントが指摘するように、国の象徴的存在を滅ぼすことは、それまで国民を統一し、統合の中心となっていた精神的支柱を喪失させてしまったことを意味する。国家としてのまとまりを失ったあとで民衆をどうまとめるか、革命政府はそのための憲法や国歌やスローガンなど矢継ぎ早にさまざまな制度を整え、

多くの法令をだすことで「外枠」を強化してまとめようとした。恐怖による支配もその手段の一つであった。

確かに、フランスは革命当初、世界で初めて「人権宣言」を採択したという点で民主国家のリーダーをもつて自ら任じている。しかし、グローバライゼーションがもたらす経済システムの変化、難民問題を巡るEU加盟国間の軋轢、右翼勢力の拡大など、フランスを取り巻く状況は厳しい。フランスは、これまで守り続けてきた共和国の価値を変質させずに、どのように新たな局面を切り拓いていくのだろうか。

- 1 『新ブチ・ロベール・フランス語辞典 (Le Nouveau Petit Robert de la langue française)』2010年度版。
- 2 リン・ハント (Lynn Hunt) 『フランス革命と家族ロマンス (The Family Romance of the French Revolution)』(西川・平野他訳) 平凡社 1999。

2015年
11月17日
火曜日

田 禾 准教授（人文科学、中国語学）

異文化の交渉

最近中国からの観光客が多くなり、あちこちで中国語の会話の声が聞こえる。先日ある飲食街で3、4人の中国人の会話が耳に入った。「ほかの店に行こう」、「いや、もうすぐ開店でしょう、待ちましようよ」。よく見ると、彼らが立っていた店は入り口に「準備中」の看板が出ていた。日本人なら迷わずほかの店に行くが、中国人にとってはむしろこの看板を出すことは「ready-go!」のように、「間もなく営業がはじまる」という客を呼び込む意味として理解される。つまり、ある言葉或いは言語表現の自身に対して日本人と中国人の間で異なる「解読」が生じる。この現象は「異文化交渉」の研究対象の一つにもなる。日本と中国は互いの言語から取り入れた同じ漢字を使用する語彙の中には、意味が同じものもあれば、まったく異なる意味

を表す場合も少なくない。よく例としてあげられる「娘」（中国語で「はは」という意味）、「手紙」（中国語のトイレペーパー）など完全に別の意味となる語彙は、むしろ暗記すれば特に混乱しない。問題になるのは「準備中」のようなものだ。例えば、日本で食べる餃子といえば、焼き餃子を指す場合が多いが、中国では餃子を言うとき餃子のことを指す。焼き餃子は中国語では鍋貼ゴウテイという。このように、もともと中国の食べ物餃子は日本文化に受容され、日本人の生活習慣によりその概念の自身も水餃子から焼き餃子に変化した。このように異なる文化の影響で、概念自身が変わった言葉への理解には誤解が生じやすい。「お茶」という言葉もそうだ。中国では主に「茶葉」のことを指す。モノならまだ理解しやすいが、空間など抽象的な概念の

違いはなかなか気づかない。例えば、「18才以上」というのは18才も含まれ、集合写真で「私から右へ2番目の人」と言った場合、「私」は含まれるかどうか、など、人それぞれの理解があるかもしれない。先日内田先生から一つ面白い例を紹介された。中国の税関で手続きする時、行列の先頭の床に、請在黄線外等候クワンゼンゴウキョウと書かれている。「黄色い線の外側でお待ちください」という意味だ。自分側が「外側」と理解して、みんな税関のカウンターより距離を保って待っている。ところが、日本の電車站でよく「黄色い線の内側で」という放送を聞くが、もし、中国の税関の例に当てはめれば、自分たちが外側で、電車のほうが内側となってしまふ。幸い人間の安全意識により、自動的に電車より遠いほうを「内側」として理解している。

空間概念は生活習慣と関わることも多いため、誤解されることも多い。初めて日本人の友人宅を訪ねた中国人が、「あがつてください」と言われ、思わず2階のほうまで行ってしまったという。

近年中国語の中に日本語からの外来語もある。例えば「オタク」から宅男タクオ、宅女タクメという新語が出てきた。辞書にも集録され、解釈は「ずっと家にいてほとんど外出せず、ネットやネットゲ等の室内活動にふけている男（女）」（第6版の現代漢語詞典）。この言葉もまた誤解が生じやすい。これからグローバル化と共に、違う国から様々な言葉、生活習慣が自分の国に入り、受容されるながら変容もする、その変化の過程を観察の面白いかも。

2015年
11月20日
金曜日

古澄 英男 教授(計量経済学)

『コンピュータと統計学』

今からおよそ30年前、シリーズ・チャペル「経済と人間」において根岸先生が「コンピュータと人間」というタイトルで講話をされている

(田中・林・森本編(1992)『いま経済学を学ぶ―経済と人間』日本経済評論社)。ここでは、私の専門である統計学とコンピュータとの関係について少し書いてみたい。

統計学はデータを分析するために必要な手法を研究する学問である。データを処理し分析するためにはコンピュータが必要であり、統計学にとってコンピュータはなくてはならない道具の一つである。根岸先生が講話された30年前といえば、それまでの大型計算機に代わりデスクトップ型パソコンが普及し始め、多くの研究者にとってコンピュータがより身近なものとなり始めた時期である。しかし、当時のコンピュータの

演算処理能力はまだ低く、(今から見れば)比較的簡単な非線形モデルでも推定するのに一日以上かかることもあった。

今日まで、コンピュータの演算処理能力は絶えず向上してきている。

一説によれば、1.5〜2年でコンピュータの処理能力は2倍になると言われており、単純に計算しても、現在のコンピュータは30年前のものよりも2の15乗 $\approx 32,768$ 倍速くなっている。この数字は、以前は1日かかった計算が、今では約3秒でできてしまうことを意味し、根岸先生の講話に「あるとき、行列の固有値計算をさせるため寝る前にデータ入力したところ、朝ビーブ音と共に出力しその音で目を覚ました」とあるが、今ではこうした計算も一瞬にしてできてしまうのである。

こうした演算処理能力の飛躍的向

上は、コンピュータを道具としている統計学にも当然影響を及ぼしている。これまで解くことができなかつた方程式や積分がコンピュータを使えば短時間で計算できるようになり、より複雑な統計モデルの解析が可能となった。別の言い方をすれば、計算上の制約がなくなり自由に統計モデルを構築することができるようになり、これまでよく用いられてきた「計算を簡略化するために」という言い訳ができなくなってしまう。

また最近では、統計モデルを解析するために必要な数値計算法の開発も行われるようになり、統計学における新たな分野となっている。ここで研究者として悩ましいのは、コンピュータの進展を上回る数値計算法を提案しなければならないことである。例えば1年経てばコンピュータ

の処理能力は15倍になるとしよう。このとき、提案する数値計算法が従来よりも12倍速くても、なかなか新しい方法として受け入れてもらえないことがある。これは、1年待てば従来の方法でも短時間で計算できるようになるためである。他の統計学者だけでなくコンピュータとも競争しなければならず、これまで以上に知恵を絞らなければならない。

これからもコンピュータはますます速くなるであろう。研究者としては新しい課題に挑戦できようれしいのであるが、その反面、技術進歩のスピードについて行けるかどうか不安でもある。置いてきぼりにされないよう、今しばらくもがいてみようと思う。

2015年
11月24日
火曜日

英和辞典の話

神崎 高明 教授（英語学）

私の高校時代と言えはほぼ50年も前のことであるが、当時お世話になった英語の先生にD先生がいる。

D先生から、勧められたのが、出版されたばかりの研究社の『新英和辞典』（1961年）であった。動詞の

文型などが分かりやすく表示されており、高校生にはびつたりの学習辞典であった。その先生から推薦された辞書がもう一冊ある。それが斎藤秀三郎の『熟語本位英和辞典』（日英社）（初版は1913年（大正4年）、

新增補版は1936年（昭和11年）に岩波書店発行）であった。D先生に勧められたとおり、それを購入した。その辞書は今も私の手元にあるが、開いてみると、1966年に発行されて、定価は1,500円とある。当時の高校生にとっては、高価な辞書であった。

購入後しばらく使ってみたが、内容が高校生のレベルをはるかに超え

ていたので、途中で使うのを止めてしまった。その後、大学に入ってから、何度か斎藤の英和辞典を引いたことがあったが、それ以降40年余りの間、本棚の奥にしまったままになっていった。

2012年（平成24年）の秋頃、八木克正先生（現在、関西学院大学名誉教授）から、斎藤秀三郎氏の『熟語本位英和辞典』（今後、『斎藤中英和』と呼ぶ）が発行されて2015年で100年になるので、それを記念して岩波書店から斎藤中英和の校注版を出版するので、手伝ってほしいか、という連絡をいただいた。斎藤秀三郎と言えは、高校時代から馴染みのある名前である。私はこの仕事を引き受けることにした。そして、八木先生と私とあと2人の研究者の合計4名で校注作業を始めた。何分20年前に書かれた辞書であるので、今で

は古いと思われる記述や表現も多い。斎藤中英和と現代の英語の辞典を比べると、この100年で英語がどれだけ変化しているかということも確認できたことは収穫であった。

斎藤中英和で挙げられている例文は、彼がこれまで読んできた英書からの引用が多いが、シェークスピアと聖書からの引用が極めて多いことは驚くほどである。また、斎藤中英和の編集に当たっては、特にCOD（Concise Oxford Dictionary）を参考にしているということもわかった。たとえば、*be anxious about*（心配する）と*be anxious to*（切望する）の意味の区別は、CODの初版で説明されている。斎藤はその区別を、彼の辞典の中に取り込んでいる。その斎藤の説明を他の学習辞典や学習参考書が引き継いでいくという具合にして、この意味の差異が日本の英語教育界の

中に浸透していったと考えられる。このように斎藤経由で多くの成句や構文が、日本の学習英和辞典や参考書に引き継がれていくのである。

斎藤の弟子に、山崎貞と言う人がいた。60歳代以上の人ならばこの名前に聞き覚えがある。山崎貞は『新々英文解釈』『新自修英文典』などの受験参考書の著者として有名である。斎藤中英和の中に現れる重要構文は、弟子の山崎貞の参考書の中で紹介され、一般に広まってきたのである。たとえば、*Reading is to the mind what food is to the blood.*（読書の精神を養うこと食物の血液を養ふが如し）という斎藤中英和の用例は、山崎貞の『新々英文解釈』では、若干の修正を施されて、学習英文法の中の重要構文として多くの英和辞典や学習参考書の中に受け継がれていくのである。■

2015年
12月1日
火曜日

白井 洸志 専任講師 (ミクロ経済学)

The Law of Decreasing Credibility

——データなる信用の法則——

昨今では誰もが様々なデータにアクセスし、それを解析することが可能である。結果として、我々の周囲には「データによると」を枕にした主張が氾濫している。しかしながら、データそのものからセンセーショナルな結論が得られることは稀であり、多くの場合、それらは暗黙のうちに課された制約的な仮定の下で得られている。さらに言えば、同一のデータを異なる仮定の下で分析すれば全く異なる分析結果が得られることがむしろ普通である。以下では、C.F. Manski (著) Identification for prediction and decision の第10章を基に、この点について具体例を用いて述べる。

いま、貧困層子女に対する早期教育(3歳児4歳児教育)が彼らの高校卒業率に及ぼす影響を測定するため、以下のような社会実験を行ったとする。ある街の貧困層子女を無作為に二集団抽出し、グループ1については何も行わず、グループ2については早期教育を施す。追跡調査により19歳時点での高校卒業率をグループ毎に測定し、

- ・グループ1…49%
- ・グループ2…67%

というデータが得られたとしよう。各グループは無作為抽出されているので、

- ・現状の高校卒業率 49%
- ・仮に貧困層子女全員が早期教育を受講した場合の高校卒業率 67%

と考えてよい。

ここで次のような問題を考える。

Q. 早期教育施設を設置し無料開放したならば、貧困層の高校卒業率ほどの程度になるか?

この問に対して、データをフル活用して得られる解答は「16% (100%)」である。解は一意に定まらないどころか、現状より改善するか否かすらデータは語らない。紙幅の関係で証明を与えることはできないが、いくつかヒントを挙げておく。まず人々は

1. 早期教育を受けても受けなくて
2. 早期教育を受けた場合にのみ高校卒業するタイプ
3. 早期教育を受けた場合にのみ高校卒業しないタイプ
4. 早期教育を受けても受けなくても高校卒業しないタイプ

のいずれかに必ず分類される。また早期教育施設が開放されたとしても、それを利用するか否かは自由意思であるという点にも注意されたい。データから全員が早期教育を受講した場合の高校卒業率と誰も早期教育を受講しない場合の高校卒業率はわかっているため、各タイプがどんな比率で混在しているのか部分的に導くことが出来るだろう。

上で述べた予測値を改善する唯一の方法は、人々の行動形態や多様性に予め仮定を置いて分析することである。例えば、

仮定1. 早期教育が悪影響を及ぼさない。

仮定2. 各タイプは自らがより高校卒業できるように早期教育受講の有無を決定する。

仮定3. 早期教育が高校卒業率に及ぼす効果は統計的に独立である。

とすれば、予測値は33% (83%)となる。さらに、仮定2と仮定3を両方用いると、ズバリ83%が予測値として導出される。

上のような、「データから言えることは極めて弱く、強い結論を得るためには制約的な仮定を要する。また、仮定次第で結論は異なる。」という性質は実証分析一般に成り立つ基本原理である。「データによると」を枕とする主張について、それがどのような仮定に依って立っているのか、またその仮定が妥当なのか否か、それらを見極める力も経済学部で身につけるべき能力の一つである。

2015年
12月3日
木曜日

原田 哲史 教授（文化と社会の経済学、社会思想史）

会ったことのない祖父に 助けられたこと

『網要』を解き明かしていくことができた。

博士論文を完成させてドイツで出版したとき、「序文」の謝辞で「Shigesburo Harada」の名前も記しておいた。会ったことさえない人だが、イメージすることで助けられたからである。帰国後、私の研究はミューラーに焦点を合わせた（『アダム・ミューラー研究』ミネルヴァ書房、二〇〇二年）。ミューラーの思想が保守的・伝統継承的であるがゆえに、かえって現代の世代間倫理の問題にとつて貴重な示唆を与えてくれることを、私のオリジナルとして提起した（『アダム・ミューラーにおける自由論と世代間倫理』、『経済学論究』第67巻第1号、二〇一三年）。

過去の思想には、現代にも通ずる様々な要素が素朴な形で含まれている。一見すれば奇異に感じられるこ

私の生まれる前すでに没していた父方の祖父繁三郎には会ったことがないが、子供の頃父からよく話を聞かされた。京都の友禅染の親方であり、かつ「救世軍」というキリスト教の慈善運動をやっていた、とのことである。幼い頃その話は好きだったが、自分にはとくに関係ないと思っていた。

さて、私は大学（学部）を卒業したのち、研究者をめざして大学院に進んだ。二十代後半、留学先のドイツで博士号の取得を目指した。博士論文は「フィヒテとアダム・ミュラーとヘーゲルにおける職業団体論」というテーマで、18〜19世紀転換期の3人の思想家たちが労働者問題・貧困問題に対処して構想した職業団体論を扱うものであった。私は初め、官僚の主導する新たな職業団体というフィヒテとヘーゲルのそれはイ

メージしやすかったが、中世以来の職業団体や教会の継承を主張する伝統継承的なアダム・ミュラーにはなじめなかった。それまで近代思想とマルクス主義を重視する社会思想史を学んできたため、旧来のギルドの親方が教会とともに市場経済社会での貧困に対処するミュラーの発想は古臭く異質に感じられた。しかし、その解明なしに論文は完成できなかった。

そうしたとき祖父のことが頭によぎった。夢にも出てきた。整った顔立ちで和服姿の友禅染の親方は、搾取者ではなく、丁稚たちに温かく技能やマナーを教え、浮浪者を家に招き入れ、街頭で「社会鍋」を行う慈善活動家であった。ミュラーはこのような人をイメージしていたのではないかと考えたとき、理解する気構えができ、難解な彼の名著『国家学

ともあるが、思想史研究はそれを解明する仕事である。その意味を掘り起こそうと思っても読解困難な叙述にぶち当たり、たじろぐことがある。しかし、それに通ずる誰かをイメージしてみることが理解の手掛かりとなりうる。死んだ人や会ったことのない人であっても、心躍る人物であればそうである。このことは、生きた人間たちの社会生活を把握しようとする社会科学・人文科学の研究にとつて重要なことであろう。

付記——この講話は、2015年7月19日に日本キリスト教団京都葵教会（京都市左京区下鴨）での永眠者追憶の会でのスピーチがもとになっている。戦前の救世軍京都小隊が戦後に教会として再編されたのが同教会であり、その納骨堂には祖父の遺骨が納められている。■

2015年
12月4日
金曜日

「タイムトラベル」をすることは本当に可能なのだろうか。いつの日か、人間が過去へと時間を遡ったり、未来の世界を覗きに行くようなことが可能になるのだろうか。その実現性の可否は別として、「タイムトラベル」は多くの人の心を惹きつけてきた。物理学者が未来への旅の可能性について言及し、多くの物語——小説や児童文学、さらにはアニメやコンピュータゲームにおいても時間旅行が描かれてきたのである。映画製作者にとっても、また、映画を観る者にとっても、「タイムトラベル」という設定は、かなり魅力があるようで、主人公が時空を行き来する映画が数多く作られてきた。

『ターミネーター』や『バック・トゥ・ザ・フューチャー』といった、大がかりな仕掛けのSF作品だけではなく、『ある日どこかで』や『ニューヨークの恋人』など、時間を旅するという設定ならではの、切ない、ロマンティックな作品も多い。本当に、何故、人はこれほど、時間の流れを行き来すること、特に、過去に戻ることに惹かれるのだろうか。「タイムトラベルなど絶対あり得ない」という思い故に、時間旅行を夢見るのだろうか。あるいは、「過去を変えることによって、自分が今置かれている状況を変えた」とい、「もしあの時違う道を選んでいたら……過去をやり直すことができたら」と願うからなのかもしれない。リチャード・カーティス監督の引退作品と言われる映画『アバウト・タイム』は、その願望を叶える力を主人公に与えている。主人公のタイムは、ある日、「代々、我が家の男はタイムトラベルの能力を持ち、自分の過去に自由に帰ることが

森田 由利子 教授（イギリス小説、ライフ・ライティング）

『アバウト・タイム』 —過去は変えらられるのか

できる」と父親から告げられる。そして、彼はその力を使って何度も過去に戻り、悔やまれる自分の言動や選択をやり直し、恋を成就させるのである。言うまでもなく、過去は現在と緊密に絡み合っている。過去の積み重ねの上に、あるいは、過去から繋がる線上に現在が成り立っていると考える。なので、現在を変えたいならば、過去を変えれば良いということになる。では、過去を変えるには、映画の中で実際にタイムがしたように、タイムトラベルで過ぎ去った時間へと戻り、もう一度やり直すしかないのだろうか。もしそうだとしたら、現実の世界では時間を巻き戻すことなどできない以上、われわれは「過去を変えることができない」ということになる。確かに、過去の事実を変えることは不可能だろう。だ

が、少なくとも過去に起こった事柄の意味や意義は変えられる、と私は思うのである。過去が現在に色濃く影響を与えているように、現在もまた、過去に強く作用するのではないだろうか。つまり、現在を懸命に生きることによって、過去の失敗や挫折といった経験さえも変容する場合がある。「あの時の辛い経験のお陰で今がある」と語るのには、概して成功した人物に多いことは認めざるを得ないが、過去を受けとめ、信念を持って現在を生きる——その現在には、過去に対する認識を変え、そしてもちろん、未来をも大きく変えることになる。『アバウト・タイム』は、「主人公が自在に過去へと戻れる」という設定にも関わらず、現在を生きることの大切さを示唆してくれる映画なのである。

2015年
11月27日
金曜日

井口 泰 教授（労働経済学）

分断は罪、つながりは恵み

2015年11月13日、フランス・パリでI S（過激派集団イスラム国家）が起こしたテロ事件は凄惨極まりないものでした。事件の一部始終を聞くと、まるで全てが自分の住み慣れた街で起きた出来事のようにでした。

同時に、1917年の同じ日に、フランス軍がシリアのダマスカスを陥落させ、オスマン帝国が崩壊した歴史が想起させられます。フランスとイギリスが、中近東を分割し、今日に至る欧州とアラブ世界の断絶のきっかけとなったからです。

オランダ大統領は、即座にフランスは「戦争状態」にあると宣言し、EU軍は初めて集団的自衛権を発動しました。EU本部のあるベルギー・ブリュッセルでテロの準備が発覚して警戒態勢に入り、EU I J のインターンシップを予定した関学生の渡航も中止されました。

もともと、シリアのアサド政権と反政府勢力との内戦で、多くのシリア国民が犠牲になるなかで、既に国外に600万人以上が出国して難民となっています。

この間、イスラム法を根拠に「カリフ制」を復活させたI Sが、シリアとイラクで勢力を拡大し、欧米諸国だけでなく、世俗化したイスラム教徒まで標的に、世界でテロを拡大しました。2014年秋、アメリカはシリアで限定的な空爆に踏み切りました。昨年のパリの事件以後、フランスやイギリスも、周辺のアラブ諸国を含む有志連合で、I Sに対する本格的空爆を開始しました。欧米と対立していたロシアも、テロへの戦争に参戦しました。

私たちがチャペルに集まっているこの日も、空爆は行われています。空爆は、二重の意味で皮肉な結果を

生んでいることを知ってください。

空爆により、シリアの民間人、特に女性や子どもたちや、人道支援を行う「国境を超える医師団」などにまで、被害が拡大しました。その結果、第1に、空爆が難民発生を抑制するよりも、むしろ拡大させる可能性が大きいといえます。第2は、世界中で欧米への強い反感を招き、I Sに参加する若者（移民2世や3世も含む）が後を絶たず、問題になっているのです。

このようななかで、トルコは、200万人以上のシリア難民を抱え、NATOを通じた集団的自衛権発動を拒否しました。

難民の増加を抑制するには、武力による紛争解決より、I Sによる石油の密輸を禁止し、人身取引を含む闇経済の摘発を強化し、その経済的な基盤を崩すことが重要だと思います。

難民の発生の背後には、多くの場

合、戦争や内戦などが存在します。しかし、紛争地帯から逃れてきただけでは難民条約上の難民として認知されず、十分に権利が保護されません。トルコやヨルダンの難民キャンプの経済状態が悪化し、子どもたちが通う学校のない事態が長期化することに対し、今こそ緊急支援が必要です。

本日読んでいただいた詩篇の箇所（第116編）は、私が日々繰り返し読んでいた箇所です。世界は、紛争や対立や差別によって分断されています。分断こそ、まさに人類の犯した罪にほかならないと思います。分断を超えてつながりを生み出す働きこそ、神様の恵みに他ならないのです。分断に直面し絶望しても、悲しみを共有することを通じてこそ、新たなつながりを生み出され、本当の勇氣や明るさが生まれまると信じております。

2015年
12月8日
火曜日

藤井 和夫 教授（西洋経済史）

正義感と冒険心

卒業式の季節になると、大学が、若者たちを社会に送り出す最後の門であると改めて思います。新しい世界に踏み出そうとする彼らの笑顔に未来への希望と期待が輝きますが、一方で緊張と不安の色合いも少なからず感じられます。活躍する場を与えられたという安堵感はあるものの、未知の世界に一人で乗り出す彼らに、自分自身の知識、能力、経験への自信が、どうやら驚くほど欠けているのです。

現在の若者の特徴として、モチベーションが低いと言われます。何かをめざして「よし、やってやろう」という意欲が湧いてこない。求めるのは目の前の快適な空間で、そこでリラククスできれば良い。人間関係も、安心し合えるだけの薄い関係が好まれる。そして彼らが最も嫌うのが「ノイズ」であり、平穏な空

気の中で、自分が異質な存在であると思われることをひどく恐れる。若者のますます進む「内向き志向」がそんな風に説明されます。

大学の卒業生について、裏方にあって人を支えるのをいとわれない献身的なメンタリテイをもつとか、他人を思う、他人の心に寄り添うことが自然にできるとか言われたことがあります。「マスタリー・フォア・サービス」をスクール・モットーにする大学としてうれしくもありますが、あまりに優しい、ものわかりがいいという評判に、大学で少し「奉仕」が強調され過ぎていいのかと気がなります。

若者が一所懸命何かを求めることもなく、ぶつかるところを通して人と深く交わる経験もないのでは、彼らに自分の支えとなる自信など湧いてくるはずがありません。大学の果た

す役割について、身近な人やメディアを通して形成されてきた若者の狭い世界のイメージをぶちこわし、今まで出会ったことのないような変な人たちや知らなかった文化や学問の世界にできるだけたくさん出会える場、それまで信じ込んできた固定的な世界観をリセットさせ、判断ののさしが壊れるような経験をする場であるべきだといわれます。大学では、若者が変なものに出会い、ぶつかることが期待されているのです。

若者には、彼らにとつて居心地のいい優しさや正義感を求める以上に、心がわくわくする冒険の機会を与えてあげたい。グローバルな競争社会の中で、求められるのは開かれた積極的な精神であり、未知の世界に関心を持ち、新しいものにチャレンジして、異文化の中でリスクをとることです。「リスク」と「不正」

とは異なり、「大もうけ」と「ボロもうけ」とは違います。その勇氣によって夢を叶えて信じられないくらい豊かになっていいのです。大学では、そんなメッセージを若者に伝えてあげたいものです。

歴史にお手本があります。ヨーロッパがあれほど豊かに発展してきたのも、彼らが中世以来、仲間内の取引を超えて見知らぬ人々と商業を展開してきたからであり、その冒険心と共通のルールを作り上げる相互理解の積み重ねの努力があつた繁栄をもたらしたのです。ただ見習いたいヨーロッパで、難民流入と大規模テロ以降、異質なものを恐れ、排除しようとする変化が見られることがとても気になります。

2015年
12月21日
月曜日

西村 智 教授 (労働経済学)

女性活躍推進法を考える

安倍政権は成長戦略の一環として、管理職に占める女性の割合を3割にするという目標を立てました。

2015年8月には女性活躍推進法が成立し、301人以上の企業は来年4月までに自社の女性活躍についての現状把握、課題分析を行い、それに基づいた行動計画を提出しなければなりません。確かに、教育によって女性の能力が高められている一方で、それを経済活動に活かしていません。だから、女性もっと活躍すれば、日本企業の競争力は上がるでしょう。ただ、30%という数値目標は、男性から見れば逆差別です。倫理的に問題はないのでしょうか。

スウェーデンでは(通称だとはいませんが)逆差別法と呼ばれている法律があるそうで、同じくらいの能力ならマイノリティーを採用しなければならぬという理屈です。英語でア

ファーマティブ・アクションとかポジティブ・ディスクリミネーションと呼ばれ、差別を是正するための差別といえます。これを支持する根拠には、過去の差別に対する補償、社会における平等度を高めることなどがあげられます。反対意見としては、過去に差別された人と補償される人が異なるという指摘があります。ただ、ある集団への格差が受け継がれているならば、逆差別は正当化されるのではないのでしょうか。例えば、男性に有利なルールや人事採用の担当者には男性が多いことは男性にとつては過去の遺産です。しかし、女性にとつては負の遺産です。したがって、これらの遺産格差がなくなる(=機会の平等が保証される)までは逆差別は正当化されるのではないのでしょうか。

ただ、この理屈が正しいとしても

逆差別は心理的にやはり抵抗があるという方もいるでしょう。そういう方に好例があります。実は、同じヨーロッパでも、フランス企業は、結果の平等を嫌います。だから、新しい管理職ポストの候補リストには一定の割合で女性を入れるけれども、結果は競争で決まるようにしています。結果の平等は操作しないけど、機会の平等を強化する。こういったマイルドなやり方は日本に合っているのではないかと思います。

今、多くの日本企業は悩んでいます。法律ができたので、女性管理職を増やさなければなりません。しかし、女性側にはどこか冷めたムードがあるという声も聞かれます。実力を評価されての昇進でないことに疑問を感じる女性も多いでしょう。

本来ならば、やる気のある優秀な女性(あるいは、男性)がいて、その

人がたまたま支援を必要とするから支援する、という流れが望ましいでしょう。しかし、日本企業には古い体質や企業文化が残っているのも事実です(例えば、マタニティー・ハラスメント問題)。意識改革は最も難しいものです。何か引き金がないと動き出しません。この意味で、数値目標は強制力があり有効かもしれませんが。その一方で、女性を一律に扱うのではなく、やる気のある女性には男性同様に育て、正当に評価していく仕組みづくりも必要といえるでしょう。



2016年
1月8日
金曜日

山鹿 久木 教授（都市経済学）

『太った男を殺しますか？』

倫理観・道徳観は、人によって、あるいは状況によってもさまざまです。よつてもたらされる結果もまったく正反対であることもしばしばです。この点を考えるのにふさわしい2つの本（話）を紹介します。

最初に紹介する本は、『太った男を殺しますか？』（太田出版）です。トロリー問題と呼ばれる倫理学の有名な思考実験です。2つの状況が設定されており、それぞれについて許されるかどうかが問われています。この問題について、さまざまな立場の議論をまとめた本です。第1の設定

トロッコ列車が制御不能になっており、その線路の上にかかる陸橋に、私が立っている。線路の先には作業をしている5人がいる。私が飛び込んでトロッコを止めれば自分を犠牲に5人が救える。しかし、あい

にく自分は体重が不足していて、トロッコを止められそうにない。そのとき、たまたま私の隣に、トロッコを止めるに十分な体重の太った男がいた。この太った男を突き落としますか？

第2の設定

同じように制御不能なトロッコに對して、今度はポイントを切り替えることで、引込み線にトロッコを誘導し、5人を救えるという設定です。しかし、引込み線の先には1人が作業中で、やはり1人の犠牲は免れないのです。そこで、私はポイントを切り替えますか？

どちらも5人の犠牲と1人の犠牲をてんびんにかければ、1人の犠牲を選択するはずですが、第1の設定ではその選択が許されず、第2の設定は許される、という価値判断が多いのです。法律の話ではなく、道徳・

倫理の話としての問題です。すなわち、状況によって人々の判断は変わってしまうということです。

2冊目は、ル・グインが書いた『風の十二方位』（ハヤカワ文庫）に収録されている短編「オメラスから歩み去る人々」という話です。これはSFですが、時々引用されることがある有名な話です。

オメラスという村があり、そこに住む人々は皆、幸せな日々を過ごしていました。そこでは、犯罪もなく、政治も安定し、老若男女が本当に幸せに暮らしていました。しかし、その幸せな状況を手に入れるために、村人たちは1つの契約を交わします。それは、1人の子供の幸せを犠牲にする、ということです。10歳になるその子供は村の地下牢に鎖でつながれており、食事もろくに与えず、窓もない掃除もされない部屋

にずっと閉じ込められています。1人の子供のその犠牲の代わりに、村人みんなの幸せを手に入れているのです。人々は10歳を過ぎたころにその事実を告げられ、その契約を受け入れるわけです。その事実を知った上で、地上での何の不自由もない幸せな生活を送っているのです。子供を救うこともできますが、そうすれば、多くの人の幸せがなくなります。

この設定は、多くのことを考えさせてくれますが、もう1つのポイントがあります。話のタイトルにもなっていますが、村から外に出ると厳しい現実が待ち受けているにもかかわらず、毎年、この村から去っていく村人が必ず少数いる、という点です。

最初に効率性を重視し、十分考えた上での倫理、公平であることが経済学では重要です。

2016年
1月12日
火曜日

田中 敦 経済学部長

充実した人生を！

もうすぐ、四年生は卒業です。就活が終わり卒業が近づいてくると、「まだ社会人になりたくない」と言ってくるゼミ生がいます。私は、「それなら、ゼミを落として留年させてあげようか？」とよく意地悪を言っています。

社会人になりたくないという気持ちの背景には、「仕事が大変」「もう甘えられない」「責任が増す」といった不安があると思います。たしかに、その通りです。仕事で忙しくなり、ミスは自分の給料や将来に影響するかもしれません。でも、それは社会人の生活の一面しかみていません。責任が増すことは、別の面からみると自由が広がっているはずですよ。

小中高大と進学するにつれ、自由と責任が両方大きくなってきました。とくに、大学生になったときは、

自分の責任で決めていく自由が一気に広がるということを大学生の皆さんは経験済みだと思います。それが社会人になると、責任さえ果たしていればあとは全くの自由です。仕事などで忙しくなるでしょうが、それでも今まで自分一人では決められなかったことが、学校の「横槍」もなくなり、自分で自由に選択することができます。

これからの人生、まさに選択の連続でしょう。ただ大切なのは、どういう選択が良いのか、その物差しは一つではないということです。学校にいる間は、勉強や課外活動など、学校生活を測る物差しはあまり多くありませんでした。しかし、これからは物差しが一気に増えます。たとえば、良い仕事って何でしょうか。勤め先企業の規模かもしれませんし、給料の高さかもしれませんし、

福利厚生の実度もありませんし、転勤の頻度の少なさかもしれません。また、その企業の社会貢献度もかもしれませんし、お客さんの笑顔の多さかもしれません。プライベートな生活にいたっては、それこそ人によってその理想は千差万別でしょう。つまり、自分の人生を測る物差しとして何を選擇するかすら自由なのです。

では、どのようにすれば良い選擇ができるのでしょうか。それにはまず、選擇肢を広げる必要があります。社会は、学生の皆さんが思っているよりずっと広いものです。しかも、選擇肢はもう学校の先生から提示してもらえません。良い選擇肢を見つげるために、いろんなことに目を向けて視野を広げていくことが大切です。実は、大学生時代にもそうして欲しいのですが、これからは

もっと重要になるでしょう。

つぎに、選擇肢の中からどう選擇するかです。社会人になると、選擇する局面の多くは仕事や消費など、経済活動に係わるものが多くなってきます。まさに、経済学部で学んだものを活かす時です。しかも、経済学は経済活動に限らず物事をどう考えて選擇すればよいかを教えてくれる学問です。経済学の考え方がすべてではありませんが、人生のさまざまな局面での選擇に大切な指針を示してくれるはずです。

生徒・学生時代という人生の準備期間を終え、いよいよ自ら人生を謳歌する時がきました。学校で学んだことを使って、楽しく充実した人生を歩んでいって欲しいと思います。

2015年
12月9日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話 / Timothy Dale Boyle 教授 (キリスト教倫理)

思想の自由を守りまじろ

この最終講話にこの学校のスクー
ルモットーである "Master for
Service" に関連する話しをしたいと
思います。というのは、それはこの
学校の本来の目的であるし、これか
らも是非守ってほしいと思うからで
す。関学の皆さんにお別れにはなり
ませんが、注意を兼ねての励ましと
なる別れの言葉を残したいと思っ
ています。毎年の経済学部の学生オリ
エンテーションには、「批判的思考」
を育つことが強調されています。こ
れは大変大事な事だと思っています。

ロジカルな考え方で物事を考え
て行ける能力を身につけることは社
会に貢献するための重要なポイント
です。

この「批判的思考」という表現は
英語で "critical thinking" と言いま
す。しかし、その「批判的思考」と
いう翻訳はどうもしっくり行かない

のです。というのは、何かを批判す
るといふふう聞こえてしまうから
です。英語の "critical" という単語に
は二つの意味があります。criticize
という動詞を形容詞にするという
「批判的」はありますが、「極めて
重要である」という意味もあり、英
語の "critical thinking" の場合、そ
ういう意味の "critical" になります。例
えば、He is critical of our plan の場
合、「彼は私達の計画に対して批判
的だ」という意味になります。そ
の "of" を "to" に変えたら、つまり He
is critical to our plan という文書に
なったら、「彼は私達の計画にとっ
ては極めて重要な存在だ」という意
味になります。英語の "critical
thinking" は、そういう意味の "critical
thinking" です。とにかく、私が「批判的思考」
よりももっと正確な日本語の表現が
あるのではないかと思っています。

もちろん、皆がその表現の定義が分
かって、使っているのであれば、何
の問題がないのですが、どうでしょ
うか。

歴史的な観点から見れば、関学は
キリスト教の精神に基づいている学
校で、主義に束縛されない自由な発
想を育てる教育を目指して来まし
た。さらに遡って行けば、キリスト
教の世界観が主流になった中世の
ヨーロッパで大学そのものが芽生え
たのです。また、現代科学の誕生も
それに深く関わっています。そこか
ら、世界に広まり、現代社会を可能
としました。この大学の設立はその
思想を取り入れることによってでき
た学校です。

いろいろな意味で、キリスト教の
世界観をベースにしていた欧米の
国々の思想を見習って、日本の文化
に合わせることによって、現代の日

本が出来上がっていると云えます。
しかし、現代のアメリカに力を伸ば
している、まねて欲しくない現象が
あります。それは、political
correctness という表現で言い表さ
れています。これは日本語で何と言
えばいいか調べてみましたが、ただ
カタカナにしていただけで、同じ事
を現す日本語がないようです。直訳
すれば、「政治的正確さ」となりま
すが、それは通じません。では、
political correctness はどういう意味
で使われているのでしょうか。

結局、権力者が「正しい」と決め
つけた思想を皆に押し付けること
です。排他的思想とも言っても過言
ではないと思います。日本の歴史から
例をあげると、戦時中の天皇制に
関する考え方です。もちろん、現代
のアメリカでは、戦時中の日本のよ
うに、決められた思想から外れたこと

を口にすることだけで牢屋に入れられることは殆どありませんが、別な形で迫害を受けることがしばしばあります。アメリカは「信教の自由」や「自由な思想」の土台の上に建てられた国でしたが、急激に変わりつつあるアメリカ社会では、そのような自由が崩れ始めています。つまり、politically correctとされている見解を取るように圧力がかけられることが多くあります。これは自由な思想を育てるはずの教育機関には特に多い事で、「正しくない」とされている思想を閉め出そうとします。実例が山ほどありますが、どのようなことであるかを例証するために、2つだけを簡単に説明したいと思います。

知っている人がいると思います。私の大学の専攻は物理学で、牧師になる前の大学院での専門は気象学でした。こういうわけで、科学と宗教の接点に対して、特別に興味があるのです。その中で、自然主義の進化論の真实性と二酸化炭素による人為的な気候変動が本当にあるのかという議論があげられます。地球温暖化は経済学に大いに関係があるので、それを特に強調したいのですが、まずは、進化論について言及します。

ダーウィン自身が無神論という立場から自分の理論を提出したわけではありませんが、その後自然主義者たちは無作為な進化論が生命の歴史を全て説明すると断言するようになり、その主張を裏付ける証拠が乏しいのにもかかわらず、これが定説となつて行きました。その裏には、キリスト教の有神論的な枠組みから脱皮したいという強い願望が潜んでいて、無神論を唱えて来ました。そういう考えが主流となり、ダーウィン主義進化論の科学的問題点を指摘することさえ押さえ込もうとするのです。例えば、進化論が説明できない事実を生物学の授業で取り上げることだけでその先生が首になった、また科学者が迫害を受けた数多くのケースが報告されています。疑問を持つても、自分のキャリアを危うくすることを恐れて、自分の疑問を公にしない科学者が多くいるようです。この実態に対して、ある中国人の科学者がこう言いました。「中国では、私達が政府を批判することが許されないので、ダーウィンを自由に批判できません。しかし、アメリカでは、その逆です。政府を自由に批判することができますが、ダーウィンを批判できない。」日本では、どうでしょうか。両方を自由に批判

できるように自由主義を守って欲しいのです。

今は国連気候変動会議がパリで行なわれています。こういうふうな話し合うこと自体はいいことで、国際的に協力し合うことはもちろん賛成します。しかし、この課題にもPolitical correctnessが顔を出しています。「気候変動に関する政府間パネル」という機関が設けられ、十数年前から、二酸化炭素の上昇による温暖化を予測していました。しかし、実際は80年代、90年代に続いていた温暖化が過去の18年間に殆ど見られないし、モデルが予測していた上昇がありませんでした。気候変動の要因は大変複雑で、増え続けている大気中の二酸化炭素はその一部の要因に過ぎないことは明らかです。とにかく議論する余地が大いにあるのにもかかわらず、これがもう既に「確立された科学」だと主張して、異論を排除しようとしています。多くのメディアはこれが証明された確実なものとして描いて、定説にしています。誤解されないように、私は二酸化炭素を無制限に出してもいいとは言っていない。環境に優しい新しいエネルギー源を開発することや環境破壊を止めさせる事などは大賛成

です。私が反対するのはその自由、且つ健全な議論を封じ込めようとす排他的な考え方なのです。これも地球温暖化のディベートに多く見られる現象です。二酸化炭素排出を直ちに大幅に減らさないと、海面が何メートルも上昇して、まるで文明が終わるかのようなシナリオが描かれています。このように社会の恐れを煽る活動家に対して疑問を持つ多くの学者がいますが、彼らの声が見えぬ出されているように見えます。この課題は経済に密接な関係を持つものなので、更なる研究と議論が必要だと思えます。

私が言おうとしていることは皆の正当な人権と信教の自由を守ってほしいということです。アメリカでそれを取り戻す望みがあると思います。このPolitical correctnessという排他的思想を無くすることが絶対条件だと思えます。このようなことが愛する日本で起こらないように注意して、健全で自由な議論ができる社会を作るように関心の皆さんが是非貢献してほしいのです。時間がなくなりましたので、これで終わります。関学に於ける6年半は大変お世話になり、ありがとうございました。

1組 新海教授

太閤 浩章	最近の若者はなぜやる気がないのかについて考える
下之 南瑠	身近な経済学のおもしろさについて考える
長谷川 智也	仕事と家族
★安岡 蘭奈	女性の労働について考える
大久保 賢人	日本の様々な問題と行方
小出 義明	教師の質はなぜ低下したのか
高木 陽平	経済的豊かさと幸福度との関係性
岸田 鈴菜	経済学が人に与える影響力について考える
能勢 広真	様々なところに潜む経済的な効果
丑本 加子	女性の人生の中の問題点について考える
佐多 美貴	私たちの生活と経済学の関係について考える
林 友裕	人の心理について考える
遠山 拓弥	体罰の有効性について考える
青木 千紗	女性の社会進出と家庭
山下 正太郎	「教師の質はなぜ低下したのか」について考える
仕名野 理菜	健康な『日本』について考える

阪上 洸太郎	経済学と世の中の関係について考える
田中 雄也	バンドリング商法による支払許容額の操作——「お買い得品」を購入するためには——
栗井 大貴	少子化、労働について考える
鈴木 雄大	ことわざ経済学について考える
井上 美紀	こんなに使える経済学について考える
龍 茉莉衣	働きやすく、生みやすい世の中について考える
真鍋 綾子	暮らしと働きと経済について考える
松崎 晴子	なぜ、日本は女性の社会進出がほかの先進国に比べていいまいなのか。



2組 森田教授

築山 拓哉	MLBとNPB一年俸格差はどこから生まれるのか？
橋本 尚哉	地震とその対策
三好 功祐	ポップカルチャーによるPRは有効であるか
本地 智大	サブカルチャーのイベントの経済効果と取り組み
鈴木 勝久	LCC発展のために必要なことは？
山崎 優花	なぜ高級志向のお菓子が売れるのか—江崎グリコ株式会社の高級ポッキーを例にして
生田 涼子	阪神優勝による経済効果
小川 淳史	「限定」で客の心を動かすにはどうすればよいか
杉山 孝輝	なぜ大阪と東京でエスカレーターの乗る位置が違うのか
中谷 壮吾	ある日本人の挑戦—大根田勝美氏から学べるビジネスの成功
谷内 敏生	窃盗と景気
原元 淳也	妖怪ウォッチのブームとこれからのについて
西村 美波	中国人観光客の爆買いによる日本の経済成長
目出 慎之介	毛と経済
岸下 大斗	東京ディズニーリゾートの復活

柘植 友佳	アメリカの移民問題にみる今後の日本のゲームアプリに見る形態と今後の成長の是非
木原 優樹	NTTドコモは携帯電話業界においてなぜシェア1位でいることができるのか
★堀井 将貴	軍拡競争における人間と動物の共通点
藤岡 達也	CD、DVDの熾烈な生き残りの現状
梅本 隆正	バイクが儲かるのはなぜか
古谷 太一	マイナンバー導入によって生まれる危険性について
古里 修那	韓流ブームが日本にもたらしたもの—アジア通貨危機から脱却した韓国のIT産業復興政策
岡野 玲那	国内・海外における外食業界（牛丼業界とハンバーガー業界）の経営と比較
山本 陽介	筋肉の作用と健康
河野 裕斗	Twitter経営と課題
宮本 敬二郎	日本沈没を防ぐために
小泉 絢也	

3組 韓准教授

大床 真太郎 どこまで喫煙を自由にできるか
南 秀太 『風の谷のナウシカ』を通して自然との関わり方とは
なぜ日本のサッカーは弱いのか
阿部 拓海 脱原発は可能か
石井 雄一郎 幽霊のはじまりと今
菅 貴央 クリスマスについて
辻 武 睡眠について
杉村 駿 なぜ人は食に執着するのか
中島 和 ブラックバイトについて
關橋 佳毅 バドミントンがメジャーなスポーツになるためには
正井 颯 イノシシによる農業の被害
★南部 直樹 競技ダンスを知る
加田 朱里 深夜アニメは規制すべきか
飯阪 直也 いかにして借金を減らすか
田村 知之 人間の血液型と性格の関連性について
吉元 良介 軍需と経済発展の関係性とその変化
上本 拓海

相原 克哉
鈴木 優也
神原 明里
濱田 愛
沼本 蔵
杉山 陽子
嘉本 和貴
橋本 健司
山田 大嵩
北田 玲

現代のコンビニ
なぜインドネシアは経済発展しているのか
アートで地域再生は可能か
オーガニックが日本において「普通」化する
ためには
インターネットと日本の音楽産業
歴史あるパイプオルガン
どのようにすればいい恋ができるのか
ITによる脳への悪影響はあるのか
視聴率に録画率を加えるべきか
織田信長の天下統一



4組 原田教授

高階 誠 ため池の整備は稲美町を発展させる
原田 拓実 せんとくんの経済効果とその原因
間宮 真里奈 呪いの時代について
古波蔵 晋 沖縄の米軍基地
藤中 優芽 教養における文化資本
前本 祐哉 伊丹市の自衛隊と酒
小野 凜太郎 宝塚歌劇について——歴史と影響
野村 亮 奈良県の歴史について
徳見 彩花 日本アニメの魅力——手塚治虫を軸として
喜入 将光 阪神淡路大震災に対する様々な取り組み
★渋谷 航平 なぜ同じ都府県内に複数の方言が存在するのか
上堀 佑太 平安京遷都
南條 夕莉子 埋立地を芸術作品に
宮部 康平 赤塚不二夫の特徴や作風はどういったものか
田中 歩希 西郷隆盛と大久保利通
阪井 太一 大分県の歴史——小藩分立体制の解体

岡村 隼人
篠田 京香
田淵 絵菜
鈴木 里佳
柳原 駿
蜂谷 航平
伊東 良太
藤本 朋樹
酒井 ひかり
毛受 茜音

勝つためのディベート
現代社会をみつめる
内田樹から見た日本
日間賀島の漁の歴史
大阪市出身の福澤諭吉について
内田樹 石川康弘 (2919) 『若者よマルクスを
読もう——20 歳代の模索と情熱』かも
かわ出版 を読んで
西田幾太郎とその生涯
さまざまな観点からのプレゼン能力の向上
「おじさん」的思考
震災から学ぶ災害復興学

5組 加藤准教授

山下 裕也	なぜセブンイレブンは覇者になりえたのか
柿原 奈都子	ZARA が売上高世界一になった理由
柴山 侑果	なぜ無印良品は売れたのか
藤網 康太郎	ピーチ航空が強い要因
松井 元暉	スターバックスコーヒー人気の理由
★岩本 紗月	農業のIT化が日本農業における後継者不足を解消するのか
新井 美緒	ソフトバンクの成長—ソフトバンクグループの成長が日本経済に与えた影響—
宮村 梨花	なぜ中国人観光客は急増し、爆買いするようになったのか
瀬尾 若菜	箱根駅伝と大学スポンサー
土井 龍	なぜ週刊少年ジャンプは他誌と比べ売り上げが高いのか
藤井 聖人	スポーツカーの売上
岡本 凌	キリンとサントリー

野瀬 竜之介	なぜ日本では Google より Yahoo! の方が人気なのか
大橋 七海	ダイソーの成功の理由
帰山 ちなみ	デアゴスティーニの戦略 パートワークが出版業界に及ぼす影響
瀬戸 杜大	ハイブリッド車による環境の変化
田熊 大幹	有料音楽配信サービスと音楽産業
森 麟太郎	企業の SNS を利用した広告戦略
重政 沙樹	なぜ男性用化粧品市場は発展したのか
荒川 陸	NFL スーパーボウルの経済効果
新木 智博	スマートフォンの影響でカメラ業界に影響は出ているのか
竹下 航	なぜセブンイレブンは他社と比べ多くの売り上げをあげることができたのか
山下 力也	楽天レシビとクックパッド



6組 白井専任講師

稲川 和希	TPP と日本の農業
川合 輝尚	TPP 参加により日本の農業は崩壊するのか
前田 晴香	TPP 参加と食の安全
丸山 大河	TPP 交渉
松本 和馬	TPP 参加による日本の農業への影響
木内 海斗	成人年齢引き下げの是非について
中間 莉咲	TPP 参加と日本の食品安全基準
黒石 健太郎	農協に関する考察
北林 大希	混合診療解禁が日本に及ぼす影響
善生 凌一	TPP 参加と農業：規模の経済の観点から
★吉原 ゆり	ホームレスの自立に向けて
野島 瑳恵	飲酒が人体に与える影響
松下 賢治郎	TPP 参加による日本への影響
上島 賢也	日本の農業と耕作放棄地
高田 直幸	日本の食料自給率について
宇野 大志	グラミン銀行とマイクロファイナンス
中村 駿莉	TPP 参加による様々な産業への影響
相良 菜々美	TPP を利用した農業の発展

橋本 夏葵	訪日外国人への「おもてなし」：いわゆる民泊の有効利用
高松 夏希	TPP と社会保険：包括的留保の是非と今後の方針
若村 祐治	TPP 参加と農産物
中後 智貴	TPP 参加と食の安全
森田 陸人	遺伝子組み換え作物に関する考察
黒石 涼介	TPP と国内の雇用

7組 平山教授

篠田 竜星 日本の年金制度の問題について
 細田 明裕 TPPが日本の農業に与える影響とは
 渡辺 俊太 金融政策が日本国民に与える影響
 奥河 泰知 日本の自動車産業を探る
 八木 誠実 発展するテレビ局の放送外事業
 岡本 瑠梨 SNSの普及に伴う経済効果について
 富永 愛 日本人はなぜ無宗教か
 安藤 壮哉 世界恐慌はなぜ起こったのか～アメリカの視点から考える～
 足立 明謙 日本の安保政策の変容と自衛隊
 山田 涼子 少子高齢化の原因とは
 長澤 征久 少子高齢化の経済に対する影響
 下奥 湧 東日本大震災が日本に及ぼした影響とは
 赤松 直哉 日本の農業の問題と、TPPの影響について
 松田 達也 現代社会における日本語について

堀尾 幸央 グリシャ危機と日本の国債についての検証
 内野 佳世子 ニート・フリーターが社会に与える影響
 張 詩譚 中国の経済バブルについて検討
 魚谷 貴秀 日本で再生可能エネルギーは今後普及するのか？
 ★村山 早紀 女性の雇用についての検証
 日下部 兼士 オイルマネーと成功
 川崎 健太郎 電子書籍の実態と今後
 新井 爽香 フリーターとニート
 辻 蛍介 日本のポップカルチャーが経済に与える影響と今後の成長
 橋爪 佑太 ビットコインの社会に及ぼす影響とは
 本間 春樹 なぜ政府は消費税増税を行うのか
 上田 真子 ユーロ崩壊論の打開策



8組 増永教授

島村 航 イノベーション大国「アメリカ」
 川福 浩義 映画から見るアメリカ
 奥山 聖也 鉄道から見るアメリカ
 合田 弘幸 映画から見るアメリカの歴史
 角 拓海 ファーストフードを通して見るアメリカ
 白井 優一 アニメ、マンガから見るアメリカ
 伊福 翔大 フロスポーツから見るアメリカ
 鳥山 有香 映画から見るアメリカ
 福田 友哉 ファーストフードから見るアメリカ格差社会
 高山 寛史 アメリカの大学スポーツについて
 中村 佑希 ファーストフードで見るアメリカ労働問題
 石田 悠宇 TPPから見るアメリカーアメリカ農業と経済
 川崎 航 マーケティングで見るアメリカ
 山村 慎史 大量消費社会『アメリカ』
 表 隆太郎 消費から見るアメリカ
 松吉 誉 農業から見たアメリカ
 東山 太綺 交通から見るアメリカー自動車

★筒井 佐紀 農業から見るアメリカー日本の食卓がアメリカ産に
 佐藤 大祐 スポーツからみるアメリカーアメリカのスポーツ政策
 石川 毅一 交通から見るアメリカー船から見たアメリカの考察
 土井 里紗 映画から見るアメリカーアメリカ映画とアメリカ人
 酒井 隼 ファーストフードから見るアメリカ
 松本 知也 ファーストフードからみるアメリカ
 牧野 愛 「食」から見るアメリカースローフードの本質
 木村 太郎 ファーストフードから見るアメリカー大量生産
 三浦 拓朗 SF映画から見るアメリカ

9組 舟木教授

角 就矢	墓の現状と日本においてふさわしい葬制— 葬制は何かいいのか— 教育格差	本多 陽花	格安航空と観光業
伊藤 弘竣	鉄道の通勤ラッシュはどのように回避できるのか	米阪 大起	教育の重要性について
奥田 佳也	ソーシャルゲームは悪といえるのか	角崎 勇哉	スペインの経済危機について
寺坂 杏成	プロサッカー選手のセカンドキャリア	松本 将	貿易格差と一時産品問題
高尾 瑠	サッカービジネス(Jリーグ)の理念と経営	小谷 佳世	USJは儲かっているのか
海口 彦太	京都市のLRT導入への問題点と提言	寺嶋 杏祐	睡眠不足が体に及ぼす影響
★渡邊 俊介	なぜ蛇は日本人の生活文化に深く関わっているのか	石本 麻奈	ネット広告は消費者にとって良い広告媒体なのか
加藤 要	キャラクター	岡田 莉奈	地産外商による地域活性化
井出 もも子	成人年齢の引き下げ	中津 開	限界集落の現状と今後
中島 英輔	フェアトレード	田中 瑞希	日本の高齢者福祉
渡 真衣子	LGBTへの理解を社会に浸透させるためには	鍵田 将宏	人々は睡眠とどう向き合うべきか
新海 夏実	日本の安保法案—集团的自衛権と民主主義—	藤本 彪互	購買心理は消費者の動向を変えることができるのか
井手 健介	流行について	衣笠 航平	お金と幸福は関係するのか
大西 よし乃	ミドリムシの現状と今後の社会への浸透可能性について		
岡田 優花			



10組 寺本教授

吉田 惟人	村おこしとまちづくり	★山口 夏未	集团的自衛権について
津村 梨沙	世界のエネルギー情勢と日本のこれから	片木 美波	ユニバーサル・スタジオ・ジャパンがV字回復した理由
堀田 実菜	観光経済学と沖縄	島崎 さくら	アニメと経済
黒沢 吾郎	マイナンバー	黒田 佳恵	WLB(ワークライフバランス)
道上 大	AKB48グループは不況と言われる今、なぜ売ることができたのか	高寺 克重	アベノミクスがこれからもたらす影響
園田 聖剛	音楽]ビジネス	長迫 孟	アベノミクスの動き
畠山 星	美人は得をするのか	越知 洸音	東京ディズニーランドの人气が継続している理由
山之口 優	IoTの活用と可能性	吉村 卓真	スポーツが与える経済効果とメリット
清水 香	マイナンバーって何?		
大西 愛梨	ゆるキャラと経済効果		
枝松 雄一	アベノミクスと日本経済		
小部 篤志	日本観光業の成長背景と訪日外国人による経済効果		
西口 達希	TPPで日本の産業はどう変わるのか		
藤岡 観月	TPPをどう考えるか		
石井 優輝	トヨタ自動車と経済		
梅本 航太	日本の社会保障制度が経済効果を生み出すには		

11組 田准教授

西原 義尊	日本社会における玩具市場
濱崎 圭太	日本社会における統計学
谷本 一輝	日本社会における YouTube
大澤 陸	日本社会における自動車産業—トヨタ自動車にみる日本の自動車産業
中山 拓実	日本社会における教育格差問題
中尾 光吉	日本社会におけるゴミ問題
村井 康平	日本社会における少子高齢化
松田 優大	日本社会におけるコンビニエンスストア
宇野 夏菜子	ゴミ屋敷に住む人々と日本社会
小山 陽平	日本における騒音問題
高橋 祥太	領土問題と日本社会
岡 弘敏	少子化問題における日本社会
中田 ひとみ	日本における貧困問題について
輪嶋 純樹	日本社会における税金
松村 駿汰	日本社会における外来文化の定着
藤本 亜弓	日本社会における CM
★浦井 結香	日本社会におけるショッピングモール

奥野 真生	外国人労働者と日本社会
生田 智士	日本における多文化共生
衣笠 瑛梨香	日本社会における民泊
田中 雄介	日本社会における就職活動
備本 将	日本社会における新しい発明



12組 田畑教授

下地 未来	大学という名のレジャーランドで放縱する日本人学生—日本の大学生はなぜ小学生よりも勉強しないのか—
上松 溪太	戦時日本の統制について
岩田 怜	集団的自衛権について
笹井 涼太郎	脱原発に関する考察
北原 佳奈	マイナンバー制度について
田村 真士	東京オリンピックによる経済効果について
佐藤 陸	北朝鮮による日本人拉致問題を解決するにはなぜ日本は安楽死を認めないのか
★福田 孝行	少子化に関する考察
原田 愛	日本の介護制度に関する考察
渡邊 航平	訪日客の激増と日本経済の変化—観光立国の道—
謝 霖	日本人の長時間労働について
衣川 寛優	貿易の自由化について
串部 泰行	選挙権年齢の引き下げについて
西本 滉平	日本の子供における貧困について
松尾 尚樹	中国経済について
東川 幸平	

牟禮 瑞黄	仕事と女性
花村 美咲	女性の社会進出について
小枝 和喜	日本の新幹線整備について
丸本 健介	ブラック企業について
水野 怜	何故鉄道事業における女性専用車両は定着しているのか
宮田 かすみ	日本人はなぜ英語が話せないのか
福島 啓幸	安保法案可決について
森脇 三知加	ディズニーリゾートはなぜ人気なのか
奥野 祥大	意思決定
守屋 諒一	人口減少の考察

13組 白井専任講師

桜井 智貴 アフリカ諸国における貧困と各国の支援
 速水 優輔 未成年者のインターネットリテラシー
 新 大樹 ASEAN 諸国と中所得国の貿易
 市村 真紅郎 新しい文化の「定着」：ラグビーのメジャースポーツ化
 岡本 佳大 音楽業界と経済
 下川 桃子 いわゆる「ブラック企業」について
 荒木 信哉 USJの成長戦略
 朴 相元 貧困の再生産：所得格差と教育格差の観点から
 田中 美希 ビッグデータビジネス
 石田 拓也 セイバーメトリクス
 ★永田 健悟 カシ米尔地方に関する考察：戦略的思考の観点から
 青木 一将 日本における韓国・朝鮮
 東 沙也加 外国人観光客の誘致：京都の場合
 谷山 右恭 スーパーマーケットの衰退
 塩田 智大 プロスポーツチームの経営

芦北 夏輝 天下りに関する考察：癒着の観点から
 高槻 亮太郎 中国バブルの崩壊



14組 敵准教授

荻野 大斗 テレビCMとインターネット広告
 ★山中 龍弥 サトルの大衆化思想に見る日本の現代社会
 西窪 大樹 コンビニ業界の現状と動向
 貞吉 朋治 いじめと中立者
 須賀原 創 名探偵コナンの人気のわけ
 杉原 慶彦 機械・コンピュータ技術の発展に伴う人間の仕事内容の変化
 福原 徹也 ハロウィンと経済
 松村 志穂 中国の水環境問題
 長澤 幸大 若者の選挙離れ
 西迫 佑惟 時代の変化と子育て
 小村 健斗 オリンピックの起源と2020年東京オリンピック
 中西 叶 日本のアニメ・マンガは儲かるのか
 奥村 南実 これからの女性の労働環境の展望
 平野 聖人 ファーストフードと日本の食文化
 鍵岡 大樹 織田家の経済力と他大名との比較
 中山 賢悟 ファストファッション
 木村 翔太 スマートフォンにおける経済効果

川野 晃汰 アプリが及ぼす経済効果
 井上 慎太郎 スポーツと経済
 半井 翔汰 押し寄せる難民
 坂田 帆奈美 国民の幸福とコミュニティデザイン
 河原 雄大 ネットショッピングの実態と社会に及ぼす経済効果
 北島 克紀 ゆるキャラから見る地方経済
 廣瀬 宏平 コンビニと経済
 沢田 和輝 日本語の正しさとは
 田中 伊吹 第二次世界大戦の原因とそれからわかること

15組 猪野准教授

谷口 勝哉	中国企業の国際化
白井 瞭	オリンピック開催都市争い
宇都宮 優生	世界の子どもの貧困
森田 隼斗	スポーツと経済効果
内山 諄一	コンビニエンスストアの経済効果
三原 晴希	スポーツと教育の関係性
松原 亜莉紗	マイナンバー制度による影響
赤田 優花	甲子園の売り子
是則 大樹	日本のTPP参加に伴う通商戦略はあるのか
藤田 真季	SNS 企業の活用とビジネスモデル
新井 琢朗	小規模一般小売店が生き残るには
筒井 遥平	人工知能の将来
山西 志歩	ハンドボールによる経済効果
菅原 萌子	日本の貧困問題
堺 美紅	プライベートブランドの今後と発展
丈達 彩花	ふるさと納税
★鶴鷹 祐照	訪日外国人数と格安航空会社

年前 敦矢	難民流入と経済
森山 大樹	プロ野球の経済効果
高波 諒弥	戦争と経済
上田 実穂	ふるさと納税
三上 諒	日本の公共交通
村上 愛	東京ディズニーリゾートの経済戦略
杉本 ひかり	大学教育の必要性
伊東 陽歩	なぜ日本人は筋肉が外国人に劣るのか
中土井 健	ペットがもたらす経済効果



16組 田准教授

松本 岳也	日本のソーシャルゲームについて
小田 雅	発展途上国と観光業
林 俊樹	プロ野球と経済
松田 恵莉	就職氷河期を勝ち抜くためには
森 太一	次世代の環境エネルギーの考察—再生可能エネルギーは原子力発電に代替可能か
岡本 和	日本の高齢化と移民政策の兆し
石津 めばえ	色と購買欲
大園 雄一	ブラック企業について
北村 愛実	ジブリと経済
松尾 英里香	航空業界に価格革命を起こしたLCCの戦略
高尾 花菜子	ファストファッションについて
鈴木 陸斗	アメリカの貧困問題
平沼 真悟	法律のグレーゾーン
越智 星翔	センター試験廃止における変化
金正 奈々	爆買いと今後の日本
小島 柊人	中国人観光客の目的とその対策
片岡 雄治	外国人労働者受け入れで起こる問題

坂上 晴香	行列から考える人間の行動
真田 瞳	心と経済
★奥田 健吾	インバウンド増加に向けた観光戦略
藤井 啓右	多民族国家との接し方
横島 みのり	グローバル資本主義は世界平和をもたらすか
川崎 姫奈	身の回りのおもしろい経済学
明日 結奈	経済と幸福について

17組 藤田教授

永井 智也 集团的自衛権の行使と日本の未来：安保法案の問題点とは
 藤尾 郁花 浸透してゆくファストファッション：ファストファッションに秘められた真実
 ★谷川 純哉 安保政策と防衛産業：防衛産業は輸出産業になり得るか
 佐田 雅拓 日本の教育の進む先：欧州を見習うべきか、独自路線を歩むべきか
 吉田 隼樹 マクドナルドに未来はあるか
 小野 晶 コミュニケーション能力とは：携帯電話の発達とネットワークコミュニケーション
 吉澤 英志 地下経済で動く違法なお金とは
 田中 宏城 奨学金制度と学生：本当に改善すべき問題点
 二宮 良太 USJ vs 東京ディズニーリゾート：経営戦略
 松本 尚太 岸和田らしい地域開発：歴史的景観は維持すべきか
 山内 崇敬 ジェンダーに関わる政策において日本が今後進むべき方向
 前川 大地 香川県の戦略
 井上 亮 少子化問題の背景にあったものと対策の課題
 長岡 芽依 スターバックスの革新：スターバックスが日本にもたらした価値観
 森本 凌太郎 デフォルトは周辺国にどのような影響を与えるか

首藤 麻友 ディズニーランドが長い間人々に支持される理由は何か：顧客満足度とは
 國谷 幸世 子供の貧困：社会的背景としての所得格差と教育格差の関連性
 杉岡 兼太郎 大阪都構想の結果を踏まえたこれからの大阪
 堤 健登 日本の移民政策のあり方：使用者側本位としての移民政策
 廣瀬 晴菜 日本の子供たちを巡る問題とは：児童虐待と待機児童の増加について
 豊嶋 謙士 フライダル産業は生き残れるか
 久保田 大輝 規制緩和と貧困：貧困を解決するには
 安木 廉 東京オリンピック開催は日本の観光産業にどのような影響を与えるのか
 二角 太陽 日本は再び戦争をするのか：安倍内閣の集团的自衛権と日米関係
 矢野 翔大 原発問題：なぜ政府は再稼働をすすめるのか
 山本 祐樹 大阪都構想と財政：今の大阪および関西に必要なことは被災地復興への道：東京オリンピックがもたらす影響
 西岡 奈央 日本の男女平等を進めるにはどうすればよいか：北欧や日本で女性が活躍している職場をヒントに解決策を見出す



18組 ボイル教授

松原 大陸 東京オリンピックが日本に与える経済効果
 橋本 茉青 日本の野菜事情
 ★川崎 大貴 2016年リオデジャネイロオリンピックからゴルフ競技が112年ぶりに復活することによってゴルフ業界に与える影響
 上原 勇哉 日本の観光業・地域自治体の観光業の取り組みと経済
 石津 咲椋 ゆるキャラと経済
 今津 優貴 錦織選手がもたらす経済効果
 矢野 映未里 ハロウィンによる経済効果
 坂根 佳菜子 ユニバーサルスタジオジャパンの経営戦略
 平野 恵美 東日本大震災について
 藤原 佑輔 新スタジアム建設における経済効果
 米田 穂奈美 スマートフォンと経済効果 —携帯会社の戦略とアプリ—
 孫 慶志 中国における高齢者問題と解決
 末廣 茜 桜島の火山灰とその影響
 濱田 彩香 テロと経済について

坂口 健仁 アフリカ経済
 河端 里咲 日本の電力と経済
 川越 裕介 近年の音楽配信環境
 坪田 光正 日本のアニメ
 浅野 遼 大阪都構想と経済
 矢島 優里 韓国企業の日本進出と韓国経済の実態
 久我 俊介 プロサッカー選手の移籍における経済効果
 森下 博貴 医療と幸福
 末田 健太郎 ワーキングプアの増加と制度における改善点
 松井 健祐 近畿大学の志願者数獲得の裏側について
 福山 夏鈴 「道の駅」による経済効果
 一木 優圭 声で経済
 菅野 裕介 日本食と経済

19組 山鹿教授

矢倉	颯馬	自分の人生を振り返って
山本	航希	自分の人生を振り返って
田津原	雄太	自分の人生をふりかえって
飯田	拓己	自分の人生を振り返って
藤原	將記	自分の人生を振り返って
三好	亮輔	自分の人生をふり返って
大西	淳平	自分の人生を振り返って
岩山	昂生	自分の人生を振り返って
神田	雄太郎	これまでの人生を振り返って
大河内	晃己	自分の人生を振り返って
藤原	和希	自分の人生をふり返って
川本	凜	自分の人生をふり返って
金谷	翔人	自分の人生を振り返って
松下	侑里香	自分の人生を振り返って
★畑本	太朗	これまでの自分
岩田	篤紀	自分の人生を振り返って
楠本	康起	自分の人生をふり返って
土谷	和	自分の人生を振り返って

藤井	彩夏	自分の人生を振り返って
大西	晃祐	自分の人生を振り返って
桐井	皇太郎	自分の人生を振り返って
小林	朋樹	自分の人生をふり返って
酒井	康隆	自分の人生をふりかえって
安東	和輝	自分の人生を振り返って
池田	直斗	自分の人生を振り返って
井上	彩	今までの自分とこれからの自分
野田	希	自分の人生を振り返って
西塔	亮	自分の人生を振り返って
広田	朋也	今までの人生を振り返って



20組 山鹿教授

村上	雄紀	自分の人生をふり返って
山下	真理子	自分を振り返って
山本	将也	自分の人生を振り返って
野山	翔平	自分の人生をふり返って
山本	航	自分の人生をふり返って
石田	勇貴	自分の人生をふり返って
田中	ほのか	自分の人生を振り返って
若月	舞	自分の人生をふり返って
林田	珠佳	自分の人生を振り返って
北村	奈々	自分の人生を振り返って
大前	智裕	自分の人生を振り返って
★竹内	廉貴	自分の人生を振り返って
呉	偉	自分の人生を振り返って
柴野	真由子	自分の人生をふり返って
中本	大智	自分の人生を振り返って
衣川	雄磨	自分の人生を振り返って
田中	雅也	自分の人生をふり返って
瀧口	悟史	自分の人生を振り返って。

大松	求実子	自分の人生をふりかえって
吉本	昂平	自分の人生を振り返って
神谷	佳	自分の人生をふり返って
竹中	彩花	自分の人生を振り返って
榎	優大	自分の人生を振り返って
辻	彩香	自分の人生を振り返って
上村	夏々世	自分の人生を振り返って
谷口	菜穂	自分の人生をふり返って
岩田	結	自分の人生を振り返って

21組 山田准教授

尾上 満里奈 日本と韓国、新しい平和を築くには：慰安婦問題の視点から
 萩田 一久 カジノ：日本の将来の財政の鍵
 福本 哲志 安全保障法制：集団的自衛権とその周知
 中山 彰 日本に存在するアメリカ軍基地問題
 鈴木 響太 経済政策アベノミクスは必要か
 中村 梨々花 いじめの現状：年齢や時代による変化
 井上 啓太郎 深刻な少子化問題
 岡 健 STOP！いじめ：いじめの実体と解決策
 古家 昂多 人口ピラミッドの変化：どうなる日本の未来
 野口 満理奈 今後の空き家対策とは：日本の未来を救うために
 平田 三井 いじめの現状と対策に対する考察
 梅田 大樹 東京五輪を開催すべきか否か：経済波及効果の観点から見て
 井筒 裕香 少子化の徹底解剖：あらゆる角度から
 相田 誠二 社会保障の財源のための消費税増税は正しいのか
 少子化が日本に与える影響：どうなるこれからの日本

佐村木 晴輝 消費税の実態と使途：消費税が私たちに与えたら影響とは
 永田 和穂 日本に死刑は必要なのか：死刑が孕む矛盾
 高橋 航太 終わらない消費税増税：消費税増税の恐ろしさを我々は知っているのだろうか
 稲岡 良紀 ブラック企業の実体
 松瀬 清香 人口減少社会と労働人口：未来の労働環境の変化
 中見 早希 外国人労働者受け入れは本当に必要なのか：人口、治安から受け入れの是非を考える
 梅谷 咲 集団的自衛権：行使すべきか否か
 ★藤原 大輔 日本は消費税を増税すべきか：未来の財源確保のために
 吉田 莉夏 「コラボレーション商店街」でのまちづくり：「商店街×学生」で活性化
 橋口 裕香 「少子化対策」から「家族政策」へ：スウェーデンの取り組みを学んで
 濱野 太貴 マイナンバー制度がやってくる：我々にとってもいい制度か
 松本 大諒 学力低下の原因



22組 秋吉准教授

平田 大樹 日本のスポーツはなぜ世界大会で通用しないのか？
 平野 任菜 アメリカの人種差別はなくなるのか？
 石本 康輔 「ゆとり教育」は日本の教育にどのような影響を与えたのか？
 神之田 航 日本は少子高齢化社会を解決することができるのか？
 鈴木 智之 ベビーシッターに子供を安心して預けることができるのか？
 吉岡 力良 東京オリンピックは成功するのか？
 苦木 瑚々呂 日本での英語教育問題—今の日本の教育環境では英語を話せる人材の育成は難しい—
 萩野 篤 2020年オリンピック開催は成功するのか？
 矢田 拓未 なぜ2000年代以降の小中学生の学力は以前と比較して低下傾向にあるのか？
 小林 ひかり 米国内の黒人差別はなくなるのか？
 中島 櫻子 残業代ゼロ法案は本当に残業を減らすことができるのか？
 竹原 央 ベビーシッターに子どもを安心して預けることができるのか？
 伊藤 寛也 アメリカにおける人種差別は解決できるのか？
 太田 光咲 残業代ゼロ法案で残業は減るのか？
 金丸 眞弘 なぜ日本人は英語が話せないのか？

中 厚貴 今後、少子高齢化社会を解決することはできるのか？
 河村 拓哉 2020年東京オリンピックで日本人選手はホームアドバンテージを活かし、より多くのメダルを獲得できるのか？
 平井 香菜子 なぜ日本のスポーツは世界で通用しないのか？
 久保田 紫帆 今後、少子高齢化社会を解決することはできるのか？
 石村 汐香 東京2020オリンピック・パラリンピックの資金源は？
 竹尾 勲汰 アメリカ合衆国の黒人差別問題は解決するのか？
 下野 陽南子 ベビーシッター制度は必要なのか？
 田上 航 世界大会で日本は勝てるのか？
 吉本 謙 日本の英語教育の限界
 ★腰高 彩花 2000年代以降の子どもの学力低下の原因は何か？
 白井 達也 ベビーシッターに子どもを安心して預けることができるのか？
 西 康征 残業代ゼロ法案で残業は減るか—残業代ゼロ法案は妥当なものなのか—
 大谷 樹 日本人は世界大会において欧米諸国に及ばないのか？

23組 古澄教授

北垣 香奈	なぜディズニーランドは日本で成功したのか？	能勢 裕紀	ガンブラの人気の理由
徐 熊培	観光業の進むべき方向	奥村 晋也	メダカの保護について
城 文佳	Culture Convenience Club の多角化～ TSUTAYA について～	本庄 梢吾	バイク産業における経済効果について
廣田 康輝	儲かる農業	岡村 翼	日本の資金格差について
林 晃輝	なぜ“中国人”は“日本”で爆買いをするのか？	中野 隆一郎	マイケルジョーダンとはなぜ“バスケット ボールの神様”といわれているのか
中田 耀一朗	新幹線の安全性	上田 萌	2014FIFA ワールドカップでドイツ代表が 優勝できた理由
田岡 奈那子	ファストファッションの光と影	重村 健太	ソフトバンクホークスはなぜ他チームに比 べて、圧倒的に勝率が高いのか。
田尾 菜摘	なぜ USJ の入場者数は増え続けるのか？	石田 弥子	日本人の英語力不足
松浦 颯	「ONE PIECE」はなぜこんなにも売れて いるのか？	向嶋 舞	なぜ企業はジャーニーズとコラボするのか
松山 理夏	爆買いからみる日本と中国のこれから	堤 宏二	Starbucks Coffee の人気の秘訣を探る
★宮川 光次郎	現代における自己愛性人格障害の増加の要 因の考察	松井 理己	FIGTERS が強い理由
平田 惟	なぜローソンのコンビニスイーツが売れたのか	松永 雄太	野球の強いチームと弱いチームの違い
松本 春菜	docomo はなぜ儲かっているのか		
丸野 拓志	英語の資格について		
吉田 拓海	なぜニホンウナギの資源量が減ったのか		



24組 神崎教授

玉田 愛実	日本人と余暇	馬場 万柚子	日本人と食
仲村 惇	日本人とビデオゲーム	吉田 菜央人	日本人と食生活
★秋山 雄祐	日本人と旅客機社会	渡邊 未来	日本人とアメリカ人
上山 紘輝	日本と医療	陳尾 亮太	日本人と労働
赤毛 貴哉	日本人とアニメ漫画	原田 直宜	日本人と英語
橋本 尚吾	日本人と病気	賀集 慧大	日本人とスポーツ
笹本 実	日本人とボランティア	橋崎 晃平	日本人と祭り
木村 光汰	日本人と礼儀	梶尾 良佑	日本人とスポーツ
長尾 康平	日本人とハリウッド映画	久留島 佑介	日本人と社会福祉
西尾 丈一郎	日本人と外国人	渡辺 浩平	日本人と労働
鎌田 拓哉	日本人と地震	泉 敦行	日本人とテレビ
田邊 菜桜	日本人と外国語		
渡邊 悟志	森と日本人		
高木 伸弥	日本人と宗教		
東 英輔	日本人と野球		
橋本 倅弥	日本人と電話		

25組 久保教授

清水 亮 日本車と日本社会——トヨタ車成功の秘訣
 戸出 雅貴 就職と日本社会——グローバル化の中で
 梶岡 健吾 農業経済と日本社会
 城間 友樹 日本社会とアイドルアニメ——ラブライ
 プ！に見るアイドルアニメの可能性
 吉田 周平 アニメと日本社会
 藤原 怜也 女性問題と日本社会
 吉村 友比古 ニートと日本社会
 西野 祐希 テニスと日本社会——日本の抱える問題は
 スポーツで改善できないのか
 溝上 唯 エネルギーと日本社会
 牧野 文昌 映画と日本社会
 田口 彬 オリピックと日本社会——東京オリ
 ピックの現状
 久保 和大 においの利用と日本社会
 大平 龍之介 睡眠と日本社会
 赤堀 瑠成 食と日本社会——食は経済の活性化に影響
 を与えているのか

田口 詩乃 旅行と日本社会——なぜ海外からの日本へ
 の観光は少ないのか
 光藤 航哉 原子力と日本社会
 吉野 聖也 総合型地域スポーツクラブと日本社会
 橋本 啓嗣 アニメの可能性と日本社会
 村田 有希 ブランドビジネスと日本社会
 加味根 悠太 子供の名前と日本社会
 水元 彩花 遺伝子組み換え食品と日本社会——今後の
 世界へ対応していくために
 水谷 圭裕 中近東社会と日本社会
 水井 菜穂 商店街と日本社会——なぜ商店街は衰退したのか
 濱崎 春樹 東京五輪と日本社会
 ★北田 一樹 コンビニエンスストアと日本社会——高齢者
 がコンビニを変え、コンビニが高齢者を変える
 格差と日本社会
 高橋 和土



26組 中川教授

竹内 裕哉 ヘイトスピーチの法規制とカウンター運動
 石塚 雅也 外国人の選挙権
 関 日向子 外国人移住者と日本社会
 松本 大蔵 朝鮮学校という空間が果たす役割
 ★関地 史高 在日朝鮮人と日本人との共生
 前田 脩介 ヘイトクライムによって起こる日本にとっ
 てのマイナス要素とは
 林野 真也 在日外国人と多文化共生
 山下 泰生 ヘイトスピーチは表現か犯罪か——憎悪
 表現でいいのか—
 衣斐 健太 ヘイトスピーチの実態に基づく新法案のあ
 り方について
 佐藤 天斗 人種の肌の色とヘイトスピーチ
 山田 佳乃子 在日コリアンの経済活動
 松藤 晋平 日本での人種差別問題の現状とその撤廃政
 策とその課題
 武田 亘永 韓国併合前後（1890～1940年頃）の日
 本に渡ってきた朝鮮人労働者について

中村 甫 韓国併合などの歴史的背景から国籍を考える
 坂東 剛 生活保護と社会保障から考察する在日外国人
 北野 杏莉朱 ヘイトスピーチ法規制問題—歴史修正主
 義という考え方—
 島田 七帆 外国人差別
 角谷 哲平 難民の受け入れと対応
 飯川 辰吾 移民政策について
 竹田 晃成 私たちが警察と共にどうヘイトスピーチを
 対処していくか
 武道 優女 朝鮮学校に通う生徒たちの教育を受ける権
 利について
 酒井 菜緒 1980年代以降の非正規滞在者
 前垣内 達哉 なぜ異文化が差別の対象になってしまうのか
 谷 萌子 日本の外国人労働者受け入れ問題
 大原 弘平 日本の外国人政策 在日外国人と参政権
 前川 愛 在日外国人と国民年金
 佐藤 祐磨 ヘイトスピーチをめぐる議論

27組 長谷川准教授

- ★藤岡 直輝 Trans-Pacific Partnership (環太平洋戦略的経済連携協定) は日本経済復活の起爆剤になり得るか
 大西 史記 アベノミクスから日本経済を俯瞰する～中小企業にも波及するのか～
 五十嵐 悠平 薬物に秘められた可能性と実態。一大麻の売買は有益か。—
 安達 陽香 医療技術の進歩は人間の「幸福」に繋がっているか
 長谷川 大智 Jリーグを世界基準へ
 山本 育実 中国人観光客が日本経済にもたらす影響
 植田 紗穂 奈良県観光における現状と解決方法
 橋爪 勇飛 人口回復への道
 谷口 鷹ノ介 少子高齢化の深刻化による今後の課題
 西田 晴信 都市を忘れる旅
 寺田 最愛 インターナショナルスクールに通う必要があるのか
 谷畑 圭香 なぜ「子ども」は誕生したのか

- 緒方 沙也香 ポイントカードの効果
 村上 鈴佳 アイデンティティの希薄化～これからのファッションはどうなるのだろうか～
 中尾 英貴 原子力発電は再稼働すべきである
 上村 光 ASEANの経済的發展において ADB と AIIB のどちらの方が有効的か
 細見 廉 低所得者層を拡大させる軽減税率は必要か
 佐伯 玲洋 有名なバンドの楽器陣は上手いと言えるのか。
 中川 翔太 晩婚化を食い止め結婚を促すには
 岸本 真由 今後の日本における過労死を防止するためには
 村岸 桃佳 「ラブライブ！」はなぜヒットしたのか
 長尾 一輝 安全保障関連法案と私たちの生活
 尾浪 蒼 日本の大学生はアルバイトをするべきなのか
 神原 旅人 リニアモーターカーは日本に必要なのか
 石井 雅人 日本の人口構造の変容による国民皆保険の危機を考える
 橋爪 紳 音楽療法について



上村 敏之ゼミⅡ

上村ゼミ6期生に贈る言葉

今年1月の最後のゼミで、ゼミ生の皆さんには、2年半のゼミ生活を振り返り、言葉を1人ずついただきました。ゼミについては、教員である私には見えるところと、見えないところがあります。私には見えないところでも、皆さん1人ひとりが、ゼミについて楽しんでいたり、悩んでいたことを、皆さんの言葉から伺うことができました。

ゼミ運営はたやすいものではなかったでしょう。しかし、たやすいものでないからこそ、取り組むことで得られる経験があります。皆さんが2年半で得たものは「居場所」であると話しました。「居場所」は空間ではなくコミュニティですが、実にもろいものです。簡単に捨てることができます。「居場所」を持続するには努力が必要です。

上村ゼミは、単に単位をとるためにあるのではなく、卒業後に社会に貢献するために存在しています。今後の人生で、上村ゼミの「居場所」が生きたときが、必ずやってきます。毎年1月の新年会では、お互いの成長を喜び合います。上村ゼミの「居場所」は、6期生だけのものではありません。ぜひ、皆さんの「居場所」を、先輩と後輩を通した縦の「居場所」に拡張してください。「居場所」を維持し、拡大する努力を惜しまないようにしてください。

ご卒業おめでとうございます。

卒業論文一覧

吉川 直哉	ポイントカードの有効性とその将来
宮城 綾	幸福度の経済学～学生の幸福度を向上させる方法～
小林 慎	生命保険業界の動向と生命保険会社のマーケティングについて
梶山 竜司	環境税が日本経済に与える影響
★鈴木 彩華	訪日中国人による観光消費～九州地方に与える影響～
加藤 琢也	日本の格差是正を考える
都倉 由香子	国内における未婚化政策
旭 直樹	日本における奨学金返還免除制度の導入
坂 亮一	電子商取引におけるデジタル取引課税問題
角田 友	NISA の今後
大西 沙希	人口移動からみる地方創生～消滅可能性都市を減らすには～
鉄田 悠貴	LRT とバスの今後
内田 彩美	地域・診療科における医療格差の改善に向けて～求める医療をどこでも受けられる社会へ～
宮本 さやか	少子化対策の現状と課題～子どもを生み、育てたいと思える社会へ～
上垣 宏貴	新卒一括採用制度の見直し
末永 貴大	経済的格差の世代間連鎖を断ち切り、自分の子どもを高所得にするには
吉川 千晴	完全キャッシュレス社会の実現を目指して
小林 純	日経平均株価の今後予測
伊藤 茉莉子	不本意非正規雇用者増加の抑制～限定正社員制度導入の検討～
牧瀬 康裕	日本は宇宙産業の開発に力を入れるべきか
藤本 真希	CSR 経営と企業の財務パフォーマンス

井口 泰ゼミⅡ

新しい世界に飛び込む勇気を

経済危機をくりかえしてきた世界は、新興国の発展で急速に回復しましたが、先進国では、富裕層が富み貧困層が増加し、中間層が減っています。また、資源バブルが崩壊し、新興国全体の成長が鈍り社会不安が増えています。特に子どもたちに教育の機会が与えられず、若者が安定した仕事につけないことが、世界全体にとって深刻な問題であることは、マラさんが訴える通りです。先進国が国際紛争を武力で解決しようとする、過激な思想に走る若者が増え、グローバルなリスクが一層拡大しかねません。

これからの時代に、困難は山のようにあっても、私たちに、希望と知恵と勇気が与えられれば、必ずや乗り越えることができるでしょう。新しい世界に飛び込む勇気が大事です。成長し自分自身を変えたいという意味を持つのです。そこに新しい出会いが待っているはずですよ。

井口ゼミ(2014)は、ISFJと日韓交流で鍛えられ、経済学を基礎に広く政治や社会のことも学び、地方の抱える問題にも取り組み、既存の理論ばかりに頼らず自分の頭で理論的に考え、データ分析で実証する精神を身につけました。なんといっても、みんなが心でつながっていることは一生の宝です。一人で解決できないときは、皆と一緒に考えましょう。私も、皆さんを、いつまでも応援しています。

卒業論文一覧

★村垣 音和	地方再生 ～持続的な観光客増加に向けたまちづくり～
欠野 仁美	インバウンド観光・アウトバウンド観光を持続的に安定させるには一観光サイクルの実現を目指して
高井 昂毅	社会保障制度の持続可能性について
神原 醇次	今後の企業における人材活用のありかたー女性人材活用の展望を通じてー
石 虹	Transnational Corporation's Strategy-Research on Japan's Sogo Shosha=
竹内 花奈	アジア・日本における地域間格差是正のための観光による訪日外国人誘致政策ー多文化共生社会の構築ー
戸田 佳織	地域コミュニティの必要性ー地域コミュニティが存続していく為に求められる政策とはー
孫 銀珠	中国の農村と都市の教育格差
光森 智紀	少子化・高齢化に直面する若者たち
松村 懂伍	地方衰退の現状と地域の活性化
鍋島 寛樹	日本の「グローバル人材」育成に対する提言
澤崎 帆波美	日本の地域格差の是正について考えるー観光業、首都移転を中心にー

河野 正道ゼミⅡ

河野ゼミの総括

最終的に卒業論文を提出したのは2人であった。多くの人が脱落するのはいつものことであり、残念であるが仕方がない。研究演習入門では「ミクロ経済学」から入った。その後、研究演習Ⅰでは、環境経済学の大きな問題である“越境汚染”のテーマで研究した。細かな複雑な計算は、計算力に優れた林森（リンシン）君が担当した。研究演習Ⅱでは、各自の研究テーマに分かれて文献を読んで勉強した。留学帰りの菅沼繁紀君は Ohtake, et al, “Growing Inequalities and their Impacts in Japan” (GINI Country Report for Japan, April 2013) を読んだ。100 ページを超える長い英語の論文であったが、最初から最後まで、すべて菅沼君が一人で精読し、発表した。英語力もかなり向上したと思う。金本一希君は、金融業界に就職を希望していた（現実に銀行に就職が決まった）ので、金融・証券の研究を行った。彼は多忙な硬式野球部に所属しながら、ゼミには毎回出席して文武両道を実践した。

卒業論文一覧

金本 一希	証券研究
★菅沼 繁紀	日本における経済格差について—近年の日本の格差拡大は深刻さを増しているのだろうか—

岡田 敏裕ゼミⅡ

まじめ

最後までゼミに残り、卒論を仕上げた皆さんは、「大学で勉強すれば、社会で役に立ち意味のあるものを得られる」とぼんやりとはあるが信じてきた学生だったと思います。私は皆さんのような学生ではありませんでした。大学での勉強からは社会で役に立つ実質的な力はほとんど得られず、学位という“肩書き”を得るだけだと思っていました。今も昔もそのように思っている学生は少なくないでしょう。皆さんは、真面目な学生でした（少なくとも私よりは）。この点に関して皆さんは必ず社会で評価されることでしょうか。真面目さは時にはストレスとなって返ってくることもあります。自分を成長させてくれるものでもあるので、この調子で頑張ってください。皆さんは、大学での勉強から得たものの重要性に何年か後に改めて気づき、更に努力を重ねていくことでしょうか。（私は自分の考えが間違っていたことに社会に出てから気づきました。幸運なことに大学では半ば強制的にかなり勉強させられました。もし強制されず真剣に勉強していなかったとしたら、何も得なかったはずなので、当然そのことに気づくこともなかったでしょう。）

卒業論文一覧

★森 毅	少子高齢化と消費の関係
細見 健吾	消費のランダムウォーク仮説の検証
石川 健太郎	リアルオプションによる投資意志決定
梶原 大空	財務上の余裕の価値と投資機会
佐野 勇介	マンデル・フレミングモデルを用いた日本の政策分析
中小路 祥	各国の国内総生産と各国の教育水準の関係性について ～長期的な経済成長理論をめぐって～
木下 優吾	住宅投資 ～どのような時に住宅投資は増減するのか～
石田 祥悟	経済格差の分析 ～経済成長モデルを用いて～

栗田 匡相ゼミⅡ

My Endless Love to K4

心にぱっと花が咲く、そんな瞬間をたくさん見せてもらったあと、君たち一人一人の顔を思い浮かべて、その美しさに心が躍る思いで、この文章を書いています。君たちと出会ったときに見せてくれた臆病さは単に弱々しいということではなく、僕と君たちの心が出会うために必要な条件だったのでしょうか。その意味と運命を思うと、この世界が途方もない広がりを持ち、そしてその世界の全ての場所で今何が新たに生まれ続けているということを感じて受け入れることができます。アンカゾベの貧しさ、タナのストリートチルドレン、ジャカルタやバリやバンコクやバクセーが投げかけてきたことに誠実であろうとしたときに、臆病な君たち自身がその場所に立ち現れました。そんなとき、計算は計算では無く、意味は意味では無く、世界が生まれ続けていることが君たちそのものであるように世界が美しくひらけることを目にすることができます。君たちが世界の臆病さを引き受けてくれたから世界の豊穡さが君たちから誰かに伝わっていきましました。いかに世界が絶望的に腐敗していても、Kの意志を継いで、未だ見ぬ誰かに、この世界の様々な場所で、君たちが美しい世界を届けてください。君たちと出会えて僕は本当に幸せでした。愛を希望をありがとう。

卒業論文一覧

座間 慶彦	カンボジア農村における階層間移動性に及ぼす教育の役割分析
中島 謙太	損失回避が脆弱性に与える影響 — マダガスカル農村の事例—
元木 誉 廣瀬 美穂	土地貸借は資産矛盾効果を緩和させるのか タンザニア都市部における男女間賃金格差の要因分解 — サンプル・セレクション・バイアスを考慮した分析—
辻 晴花	借り入れは予測できないショックを吸収しているか ~ エチオピアにおける子どもの健康状態へのアプローチ~
高濱 翔平	タンザニアにおいて携帯電話の所有がメイズの生産量に与える影響 — PSM手法を用いて—
加茂田 知沙	母親の自立性が子どもの教育に与える影響 — タンザニア・カゲラ地域のマイクロデータによる実証分析—
梶 晃樹	外資系企業の参入によるスビルオーバー効果 中国企業マイクロデータによる実証分析
松尾 美由貴	カンボジアにおける同一コーホート内所得・消費不平等の年齢効果の推定
中野 悟史	エージェンシー・コスト・アプローチによる中国企業の資金調達構造の分析
大上 友里	タンザニアにおけるリスク管理 — リスクシェアリングと異時点消費平準化の観点から—
川戸 翔吾	中国農村部における夫婦間交渉力は子どもの厚生を改善させるか？
宮尾 伍郎	土壌保全技術がメイズの生産性に与える影響とその阻害要因 ~ タンザニア連合共和国の事例を用いて~
能登谷 俊紀	インドネシアにおける既婚女性の非農業部門への就業決定要因
向井 志礼	エチオピア農村家計における教育と貧困の関係性 — 慢性的貧困と一時的貧困の両側面から—
杉本 直樹	ショックに対する家計の消費平準化 — エチオピア農村の事例—
松村 枝里乃	初期条件がもたらす電力普及の格差の要因とは？ — インドの電化率における収束仮説の検証—
★日比野 友美	カンボジアにおける女性出稼ぎ労働者の主観的幸福の決定要因
松下 実加	ナイジェリアにおける動学的貧困について — 男女間のエンパワメントの視点から—
照沼 あかり	インドネシアにおける男女間教育格差が経済成長に与える影響
李 佳駿 川村 真由	中国における日本企業の立地戦略と影響要因 確率的フロンティアモデルによる企業の開放性に関する生産性分析 ~ チリとコロンビアの比較~

久保 真ゼミⅡ

栄えある(?)ゼミ一期生の皆さんへ

関学でのゼミ一期生として皆さんをお迎えして、早二年半が過ぎようとしています。着任早々まさか33名もの応募があるとは思わなかったことから準備不足で、ひとりひとりを丁寧にみることもできずに選抜したことから始まり、今年1月の最後の授業に至るまで、まさに自転車操業といってよいようなゼミ指導でした。果たして、当初24名いたゼミ生中11名しか卒業論文完成に到達させてあげることができず、指導教員としての自らを恥じ入る次第です。その卒業論文もまた、皆さんのポテンシャルを十分に引き出してあげられなかったと悔恨するに十分な出来映えです(毒)。
冗談はさておき(いや、卒論の出来が悪いのは本当です)、皆さんそれぞれのポテンシャルは相当高いと思います。でも、ポテンシャルがちゃんと顕在化するには、それ相応の準備が必要です。二年半準備不足で全然ダメダメだった指導教員をまさに「反面教師」として、大学卒業後——ひよっとしたら留年するゼミ生もいるかもしれないので、その人は大学五年目——は皆さんそれぞれ周りに準備をして事に当たって下さい。少なくとも、体調管理と時間厳守は準備しておけばなんとかなりますから(笑)。
皆さんの活躍を祈念しています。

卒業論文一覧

末常 栞	アメリカにおける音楽と社会のつながり — 公民権運動のなかでポップ・ディランという歌手はどんな存在であったのか？
崔 世昊	人道的介入について — 武力行使に正義があるには
田口 諒	NPO団体について — 戦略的組織マネジメントと今後のNPOに求められること
★阿部 結芽乃	脱原発は可能か — 電力自由化と再生可能エネルギー
田中 健太郎	障がい者雇用について — 企業の障がい者雇用の現状と中小企業の障がい者雇用の促進
金子 和樹	大企業の設備投資を促進するには — 政府と中小企業には何ができるか
吉田 彰宏	TPPと日本のコメ — TPP参加により日本のコメ産業が進むべき道とは？
谷 祥広	日本の介護問題 — 在宅介護偏重の日本の方針は賢明なのか
芝田 直人	日本の飲料メーカーのグローバル化戦略 — コカ・コーラ社とペプシコ社を比較する
横山 拓哉	日本のアパレルブランド — 日本の高級ブランドはどう生き残っていくか
忠野 隆太郎	ゲーム業界 — スマートフォンゲームの発展と弊害

小林 伸生ゼミⅡ

強い「個」の集合体

小林ゼミ9期生を漢字一文字でたとえたとすれば、「個」が最もイメージに近いかと思います。2年半の間には、仲間との別れや新たなメンバーの参加など、色々なことがありました。普段はそれぞれが色々な目標に向かって邁進し、時にはバラバラに見えることもありましたが、しかしそうした中でも、いざゼミとしての目指すものが明確になった時には、目標に向けて個々の持てる力を結集し、高い水準の達成度を実現してくれました。阪大・同志社や商学部ゼミとの対抗イベント、関関戦やインゼミ大会の研究発表、そして何より、最後のディベートでは、チームとしての総合力を遺憾なく発揮しましたね。さらには10期生へのコーチングも、本当に献身的に尽くしてくれました。馴れ合わず、しかしやるべき時には、チームとしての力をしっかりと発揮できる、強い「個」の集合体であったように思います。

これから、それぞれの世界に羽ばたきます。どうかこれまでのように、べたつかず、しかし決して絶えることのない淡き水の如き、「君子の交わり」を続けてください。さらに成長した皆さんに再会できる日を、今から楽しみにしています。

卒業論文一覧

古山 貴大	インバウンド観光～観光産業による地方活性化～
石垣 翔基	日本成長のための産業とは何か？～コンテンツ産業の可能性とクールジャパン戦略について～
向 翔平	学力格差の実態～これから「求められるもの」とは～
濱田 光	東京一極集中の限界と分散への展望～集積の経済性に対する批判的検討～
島 大介	日本の開業率および起業活動率が低い理由について
石丸 けい	電子マネーの普及～社会・人へもたらす影響～
平嶋 ゆい	日本経済がファッショントレンドに与えた影響とは
木村 優太	キャッシュレス社会の重要性～2020年東京オリンピックまでに日本がすべきことは～
久保田 章義	企業集団の研究～日本経済における旧財閥系企業集団の役割～
木村 真之介	育メンの経済学～企業における育メン増加の可能性～
岡井 美樹	放送メディアの変化～需要・供給両側からテレビの未来を考える～
山中 寛子	日本における最適なキャッシュレス化の形
中西 令子	産学連携の今～中小企業を中心に～
吉田 憲一	プロ野球新球団設立構想に関する研究
服部 文音	日本の音楽産業～CDは消えてしまうのか～
西村 郁美	日本の労働環境～長時間労働の問題について～
藤村 奈津子	対外直接投資と産業空洞化
岩部 真	ブランド戦略～世界で戦うブランドをつくる～
有本 凜	ハードウェアの発展に伴うゲーム業界の市場変化
照井 慎平	電力小売り自由化が与える経済への影響分析
福富 孝也	サッカーW杯が開催された際の波及効果
吉田 健佑	観光産業発展による日本の経済成長
森田 詩央	東京一極集中は地方移住で解消するか
武市 栞奈	日本は再生可能エネルギー大国になりうるか～3.11 東日本大震災をこえて～
★依光 里夏	高知県の女性の社会進出について～高知の女性は働き者なのか～
中壺 成明	マーケティング戦略による家電産業の国際競争力強化～製品戦略から日本の家電復活を考える～
荒川 友希	観客動員数から見る広島東洋カーブの在り方

桑原 秀史ゼミⅡ

グローバル経済と経済政策の奥深さを求めて

私たちのゼミは、世界と日本経済および経済政策をテーマに、合同ゼミを始めとする諸目標をもって、活発に勉強し、友達同志の交流を図ることに努めた。情報メディア教育センターを利用しての統計や計量分析のデータ処理の実習は、今後、有用かつ実践的な技術となることでしょう。情報センターでの学習から始まり、欧米世界とアジア経済の動向、中国経済とマーケティング、流通と産業組織の研究、公益事業（エネルギーと通信および交通インフラ）の企業戦略と競争政策、今後の社会保障のあり方、企業経営のケース・スタディなどを取り上げ、充実したゼミ生活であった。

とくに米国と中国経済、ブランド・マーケティングの市場調査をめぐる勉強は、関心の深い、実践的なものであった。合同ゼミナール、課題レポートの提出、工場見学など、多くの有意義な時間をもつことができた。なかでも、京都河原町での発表、洛中でのディベート、烏丸東洞院通りでの夏季合宿などは、思い出深いものでしょう。阿弥陀堂、奥の院など連なる堂塔の建築美が山あい映え、貞観のころからの日本の伝統の美しさのもとで、経済政策のあり方について、語ったことを思い浮かべるであろう。

将来、ゼミナール諸君が、大きく羽ばたくことを祈って、「高啓」の詩をおくりたい。

「春風 江上（こうじょう）の路 覚えず 君が家に到る」

卒業論文一覧

内田 由布子	女性管理職の育成と課題について
小山 雄太郎	日本における雇用システムも問題点
鎌田 爽倭子	日系企業におけるインド進出の需要
石井 優介	これからの国際会計基準と日本の展開
★渡邊 亮太	アップルの企業戦略と比較したサムソンのこれからの戦略
天野 可南恵	訪問販売化粧品にみる今後のインターネット流通展望
小林 直貴	水素社会は実現可能なのか
清水 文菜	少子化時代の大学生生き残り戦略—女子学生確保に焦点をあてたマーケティング—
山本 大遥	文房具業界は今後発展していくことができるか
中村 千晶	生命保険の戦略
倉橋 怜子	色彩心理とカラーマーケティング—つい手にしたくなる飲料のパッケージとは—
福永 安惟	「フリーを考える」なぜ1日無料で過ごせるのか
丸吉 洸太	ユニクロの販売戦略と消費者行動とのマッチング
中井 航	地方銀行の将来性とは
井之川 達哉	ソーシャルメディアと新市民革命
櫻井 佑季	肥満大国アメリカの背景
上島 康太郎	私立大学経営における事務職員の参画
齋藤 嵐	三菱の企業戦略
高奥 香澄	現代女性を取り巻く環境—経済学的側面、心理学的側面—

高林 喜久生ゼミⅡ

証拠を押さえて

みなさん方は高林ゼミの19期生になります。ふだんはおっとりしていても「やるときはきつとやる!」という潜在能力の高さを見せてくれました。

とくに3回生のとき、4大学対抗ゼミ(同志社大、関大、大阪商大、関学)やインゼミで見せたがんばりは目を見張るものでした。相変わらずの「超短期集中型」ですが最後の集中力はすごいものがありました。その中で「勉強することも面白い」ということをわかってもらえたと思います。

卒論のテーマは以下の通りで、ちょっと財政学のゼミとは思えませんね(笑)。ただし、独自のデータ分析を織り込むことを卒論作成の基本条件としました。独自アンケート調査を行った研究が多いことも特徴ですね。社会に出ても、「データで語る」「証拠を押さえて議論する」という姿勢は持ち続けてほしいと思います。

本当にこの2年半の間、いろんなことがありました。甲子園球場に、みんなで繰り出したことも楽しい思い出です。鹿児島遠征もなつかしいですね。みんなとても仲がよくて、私も願いがかなうならば同じゼミ生としてみなさんと同じ時間を過ごしたかったです。5年後、10年後にさらに成長した姿でお目にかかることを楽しみにしています。

卒業論文一覧

- ★石尾 拓也 邦画による地域活性化と学生の貢献—学生アンケート調査を中心に—
- 江南 真由子 USJはなぜ「成功」したのか—独自アンケート調査によるTDLとの比較—
- 前田 健太 ソーシャルアプリゲームメーカーは課金者にどのようなケアができるのか
- 田川 明日香 近畿圏経済の使命とは—東京管内・近畿圏・名古屋管内・九州経済圏の貿易税関のデータ分析より—
- 山野 大 新薬開発と経済環境の相関
- 百合本 泰広 東京オリンピックと成長戦略—過去のオリンピック開催国データによる分析—
- 今江 明梨 新卒市場と「ブラック企業」—景気変動の影響を中心に—
- 荒牧 由香 地方鉄道と観光—営業係数の分析・新幹線によるストロー効果から—
- 上枝 良多 集合住宅の展望
- 土田 拓馬 アメリカにおける黒人差別
- 臼谷 侑利子 ファストファッションの変化—日本に進出してきた海外ブランドと日本ブランドの考察—
- 竹本 大希 お酒がコミュニケーションの媒体としてどのように使われてきたか—学生アンケート調査から飲みニケーション不足の改善策を考える—
- 新井 悠介 コースマネジメント戦略に関する—考察
- 山口 紗弥 高級ブランド品が売れ続ける理由—独自のアンケート調査による検証—
- 清水 梓 化粧品と景気の関係性と需要構造について—独自のアンケート調査による検証—

大洞 公平ゼミⅡ

ゼミの総括

ゼミでは、ゲーム理論、ミクロ経済学を学びました。毎回すべてのゼミ生が個別にレジュメを用意し、その場でランダムに報告者が決まるという形式をとったため、緊張感をもってゼミに臨めたのではないかと思います。ゼミの目標は、(ごく簡単でもいいので)理論を用いて現実の問題を分析する、ということでした。卒業論文では、ゲーム理論、契約理論、行動経済学の理論などを利用して、医療、環境、金融、交通、マーケティングといったそれぞれが関心をもつ現実の問題を分析しました。それらを通して、ゼミの目標はある程度達成できたのではないかと思います。卒論を完成させる過程で、研究内容を超えて様々なことを学んでくれたのではないかと思います。それを今後の活動に生かしてください。

卒業論文一覧

- 前川 晋平 ごみ処理有料化に伴うリバウンド現象のゲーム理論分析
- 坂本 真吾 商品情報の過多による混乱を考慮した価格・シェア分析
- 中村 穰一朗 救急車の有料化による利用変化に関する研究
- 矢尾田 雄一 インターネットを用いた金融取引における情報の非対称性についての考察
- ★工藤 允 ロードプライシング制度における意思決定のゲーム理論分析

田畑 顕ゼミⅡ

田畑ゼミ第1期生へ

皆さんは私が関学に赴任してから初めて受け持つゼミ生でした。それまで留学のため2年ほど日本を離れていましたので授業で顔を合わせたこともなく、説明会、面接もなく、お互いまさしくゼロからのスタートでした。最初はそれなりの人数がおりましたが、年を経るごとに人数が減り、現在の少数精鋭(?)に至りました。何かと口うるさい指導教員の攻撃をのりくらしとかわし、3年時のインゼミ論文、4年時の卒業論文を粘り強く仕上げた皆さんに拍手を送りたいと思います。常に手探り状態で、方針をころころと変えたりすることも多く、大変ご迷惑をおかけしました。おかげさまでいろいろなノウハウを学ぶことができました。今後のゼミ活動に生かしていきたいと思えます。卒業論文提出には至らなかったものの、ゼミの活動に参加してくれた皆さんにもこの場を借りてお礼を述べたいと思います。今後のみなさんご活躍を期待しております。

卒業論文一覧

黒田 慎弥	コンパクトシティ政策に関する考察
戸田 昌秀	コンパクトシティ政策に関する考察
★牧岡 広樹	ホワイトカラーエグゼンプションの導入の是非に関する考察
★小山 将平	ホワイトカラーエグゼンプションの導入の是非に関する考察
井上 枝里子	コンパクトシティ政策に関する考察

田中 敦ゼミⅡ

優しさに溢れた時間

「私たちのゼミにはいつも優しさに溢れる先生がいた」。これがRゼミで過ごしてきて思うことではないだろうか。

二次次、ゼミの授業が始まる前にゼミ合宿を開催。いきなりの合宿であったのでゼミ生の不安も大きかった。けれども、先生の優しさが場をなごませ、ゼミ生の距離を近づけてくれた。

三次次、東京へのゼミ合宿、ビール工場見学、他大学との合同ゼミなど多くのイベントがあり、どのイベントにもカメラを片手に持ち、思い出を写真に残してくれる優しい笑顔の先生がいた。

四次次、就活も無事も終わり、いよいよ最後の課題、卒論が待っていた。発表を繰り返し行ない、何度も先生は笑顔で指摘してくださった。そこで、私たちは笑顔の怖さを知った。だが、同時にこれは先生のゼミ生に対する優しさなのだと感じた。なぜなら、就活を通して、指摘してもらうことがどんなにありがたいことかを知ったからである。

このようにゼミの時間にはいつも優しい先生がおり、そこで社会のマナーやお酒の楽しみ方など多くのことを先生から教わったと思います。だからこそ、たなあつゼミという時間を提供してくれた、先生には感謝の思いしかありません。ありがとうございました。

卒業論文一覧

神谷 朋宙	地方銀行の生き残り戦略—近畿ブロックを事例に
松浦 光	同上 (共同研究)
蔡 侑霖	経済環境の変化によるメインバンク機能への影響
籾田 彩月	貯蓄格差とリスク選好度による家計金融資産構成への影響～日米比較～
山田 大輔	EUの60年に及び経済統合—経済統合の評価からギリシャ危機の要因を探る—
増田 瑛	物価上昇率2%の達成における課題
中尾 智哉	同上 (共同研究)
中山 聡	同上 (共同研究)
山本 崇博	同上 (共同研究)
田中 万理奈	日本の電力会社での天候デリバティブの有効性～電力小売りの自由化を目前にして～
藤田 靖恭	ゆうちょ銀行完全民営化における課題
王 璐	円安政策の評価
熊本 圭佑	地方創生の実現に向けて地域金融機関に求められる役割
高畑 諄子	ゼロ金利政策の評価
設楽 沙也香	同上 (共同研究)
★坂本 一成	株式市場における効率的市場仮説と行動経済学の共用性～日本の株式市場をモデルに～
黒木 洸	欧州銀行同盟に期待される効果～ユーロ主要各国の視点から～
初田 美有	日本におけるインフレ・ターゲット政策～“異次元”金融緩和に期待する3つの効果～

豊原 法彦ゼミⅡ

データの解析とその表現

今年のゼミでは、2年次にEXCELやR,Mapleといったソフトウェアの利用方法を学び、ネット上にあるデータの真偽を見極めながら自らの仮説を検証しプレゼンを行い、そしてそれに対してオーディエンスがコメントするというトレーニングを行いました。その1つの成果が3年次のインゼミ大会での「日本とアメリカの就職活動の違い」という研究報告です。そこでは班ごとに作成したパーツをうまく組み上げ、チームとしての完成品を作っていく作業も経験し、プロセス管理も学びました。

また、卒業論文制作では、各自が選んだテーマについて数回のプレゼン、フロアーからの質疑応答を行うことによって研究が深められました。報告の際にそれまで集めていた資料や研究をプレゼンの形にまとめる難しさ、言い換えれば内容の取捨選択によって、自らの思考プロセスが明確になっていくことも体感できました。

ここ数年で携帯電話がスマホに変わっていたように、今後身回りの情報化が一層進展することは間違いありません。その中で「何を」「どうする」のか、そして「その目的は何なのか」をしっかりとらえて意思決定しなければなりません。その際にはここで学んだ分析スキルを存分に発揮するようにしてください。

卒業論文一覧

坂東 拓哉	国内の人口問題から考える移民政策の是非について
田村 航大	日本人とケニア、エチオピア人の長距離界の比較～栄養やトレーニングの観点から～
松原 圭佑	新たな営業の時代へ
松山 弘紀	日本からなぜメガベンチャーが生まれないのか？
山口 拓真	東日本大震災と日本経済
出原 雅敏	日本の電力問題
岩本 一平	1964年東京オリンピックから2020年東京オリンピックを考える
★間野 史唯	豊かで便利な食糧大国日本が今後も続くためには

利光 強ゼミⅡ

今年度のゼミの総括「10人のゼミ生たち」

昨年度と同様、この学年もゼミ担当者が役職となった3年間のうち、2年間かぶってしまった。行き届いた指導ができなかったと反省している。しかし、3年次のインターゼミナール大会（研究発表とポスター発表）や卒業研究論文の作成など、頑張った。彼らの今後の活躍を期待したい。

卒業論文一覧

久保 和也	訪日外国人旅行者による日本経済への経済効果
河野 つばさ	コーヒーを通して考えるフェアトレード
松瀬 裕也	IT革命がもたらす雇用構造の変化
★廣岡 哲平	オリンピックの経済波及効果—東京オリンピックにおける総建設費は高いか否か—
毛利 文彌	日本のアメリカンフットボールリーグを国内屈指のコンテンツにするために—米国アメリカンフットボールとの比較から見る日本の現状—
善明 直資	購買行動に及ぼす心理的要因の影響について—自己意識との関係を踏まえて—
部谷 佳菜	東南アジアにおける貧困をなくすには
馬場 俊一	企業の販売流通目的での海外展開において企業が求める立地要因について
高田 隆司	日本の年金制度改革の現状と課題—スウェーデンから学ぶ—
稲澤 孝仁	固定価格買い取り制度（FIT）の現状と課題—関西学院大学生の支払い意思額調査を通して—

根岸 紳ゼミⅡ

根岸ゼミらしく面白い人間が集まった

32名の大所帯で始まった根岸ゼミ28期生。まったくの自由放任状態だったけれど、それぞれの場所で頑張っていた。オリンピック候補になる可能性のあるふたり、将来スポーツの分野でプロを目指すひとたち、将棋のプロの可能性のあるひと、体育会学生のがんばり、体育会学生の中に挟まれながら頑張っていた一般学生たち……。個性の強い素晴らしいゼミ生に今年も恵まれた。卒論は書かなかっただけで、根岸ゼミにかかわった人たち（大山剛史君、神木聖君、笠井里織さん、堯志弘樹君、三宅正大君、小谷竜太郎君）も根岸ゼミに貢献してくれた。教室ではいまひとつ盛り上がらなかったけれど、グラウンドではいつも盛り上がっていた。何十年も続いている立教大学経済学部菊地ゼミとのディベート交流、初めて立教が上ヶ原にやってきたこともいい思い出になっている。いよいよ船出だ。とにかく体に気を付け、人生を楽しんでほしい。また、みんなで会おう。

卒業論文一覧

杉原 蓮	だんじり祭りと、その経済効果
礒谷 友太	スマホがあたえる滋賀県経済
安井 菜里奈	九州観光産業の現状と将来
榎田 悠介	将棋の歴史とコンピュータ将棋ソフトについて
村下 将梧	日本ではなぜ優秀なゴールキーパーが育たないのか
岩波 開人	日本サッカーの建て直し
大迫 秀政	人口の成長率とGDPの成長率
山根 花	オリンピックが商業主義を实践するのは是なのか非なのか
小林 達矢	2015年ラグビーW杯：テリトリーと得点の関係またタックル成功率と失点の関係
鎌田 脩汰	日本の都市と地方との経済格差について
宇都宮 健太	セイバーメトリクス
福田 亜弓	認知症と音楽・運動との関連について
谷岡 みのり	統合型リゾート施設大阪誘致について
高島 大輝	ファーストフード業界の競争戦略～マクドナルドとモスバーガー～
稲川 希生	JRAが経済に及ぼす影響
横山 大希	スポーツに対して公的資金による援助は必要なのか
大谷 和之	スポーツビジネスの可能性
伊藤 暖	いじめは減少しているのかーいじめのメカニズム、いじめの実態から検証するー
村田 翔	世界の経済格差と教育格差
★安田 拓未	プロ野球の経済効果～広島東洋カープ～
渡辺 健弥	スポーツによる経済の活性化は可能か、また、純粋なスポーツの見方との乖離
嶋越 藍樹	奈良県の観光産業について
羽坂 健太	パチンコ・パチスロの必勝法を探し出す
江川 琢大	今後お笑い業界はテレビに出られるのか
村田 賢大	ピケティの本当のメッセージとは
東海 優衣	大阪府の幸福度指数に経済が及ぼす影響

西村 智ゼミⅡ

五期生の皆さんへ

二年半、お疲れ様でした。就職活動の時期が後ろ倒しになったので、三年時はノルマを厳しくしましたが、よくついてこられましたね。今、皆さんの論文のタイトルを打ち込みながら、それぞれに頑張っていた姿を感慨深く思い出しています。何度も研究室に足を運び納得がいくまで分析を続けた人、実験がうまくいかなくても諦めずに取り組みつけた人、談話室で仲間と議論を重ねたチーム、ITを駆使してヒアリング調査をした人、などなど。研究を通して身につけた粘り強さ、考える力、チームワークを今後活かしてください。

女性が少ないゼミでした（2名）が、あまり性別を意識させられることのないナチュラルな雰囲気でした。ちなみに、女子学生は二人ともよい意味で存在感がありました。また、ゼミメンバーには上海からユーモアたっぷりの湯君、二年時にはアメリカの留学生（スコッティーさん）が飛び入りで参加、工場見学にはなぜかフランス人の教授が同行と国際色豊かなゼミでもありました。ここでも、ナチュラルな皆さんの姿が印象的でした。これからも、しなやかな皆さんでいてください。

卒業論文一覧

砂川 祐子	企業側から見た短時間勤務制度の利益と課題
清水 健吾	行政のNPO活用
勝井 祐貴	評価と贈与の世界「いい人」のメリット
★土井 将希	一人親世帯は景気後退の影響を受けやすいか
小泉 剛平	恋愛の経済学
牧 拓哉	教育格差が与える学力への影響 ～現代に潜む恐ろしい罠～
山下 達也	教育格差が与える学力への影響 ～現代に潜む恐ろしい罠～
児玉 樹康	在宅介護者の生活満足度と公的支援の在り方
湯浅 文也	企業の両立支援制度について
網野 翔太	恋愛の経済学
池永 侑稀	健康経済学 清涼飲料の購買行動分析
廣瀬 亮平	競争から考える女性の社会進出 ー競争における日本の男女間格差ー
瀬口 知也	経済学的犯罪抑止の方法 ー全ての犯罪者予備軍へ
橋本 芽依	恋愛の経済学
湯 孟超	留学生の就職状況と企業定着に関する考察
佐々木 智也	企業側から見た短時間勤務制度の利益と課題

林 宜嗣ゼミⅡ

卒業おめでとう。そして、心からお礼を言います。

あつという間の2年半だった。まだ幼さを残してゼミに入ってきた若者が、ゼミでの報告、討論会などを経て大きく成長し、卒業の日を迎えることになったのはとても嬉しい。

もちろん、就職活動も含めて本当に忙しく、大変な2年半であったことと思う。けれども、だからこそゼミ生活は楽しく有意義だったのだろうし、共同研究やイベントを通じて培われた友情は、きっと卒業後も消えることはないと思う。人前で話をするのが苦手だった子が堂々と話ができるようになった。張りつめた気持ちでゼミを引っ張っていた子の心に余裕が生まれた。このように、人生において精神的に最も成長する時期にゼミで時間をともに過ごすことができたのは幸せなことであり、ゼミ生に感謝しなくてはならない。

研究以外にも、ゼミにさまざまな思い出がある。ゼミ旅行、夏の鹿児島合宿、学祭でのお化け屋敷、コンパ等々。あげればきりが無いほどにさまざまなイベントを楽しませてくれたのも皆さんのおかげである。林葉会の30周年記念パーティーが大成功したのも28期生のおかげである。28期生と作ってきた多くの思い出はいつまでも僕の中に残ります。ほんとうにありがとう。ゼミ行事が多く卒論発表がほとんどできなかったにもかかわらず、今、卒論の仕上がりを見て感動した。「さすがっ!」

卒業論文一覧

★山下 高弘	犯罪発生率の低下に向けて一パネルデータ分析による地域別罪種別犯罪発生率の決定要因分析一
和久 沙織	女性活用は企業業績を高めるかー製造業の場合ー
坂井 雄貴	日本企業の本社立地要因の分析
後藤 優希	離職率の低下のために一回帰分析による2000年代の各年の離職率の決定要因分析一ASEAN 諸国の教育の現状と分析
織田 美智子	日本の年金納付率を上昇させるために
木下 彩美	新卒採用人数の決定要因分析
間島 久美子	母子世帯の貧困ー正規雇用の就業阻害要因分析ー
大上 紗璃	所得の世代間連鎖
能田 瑤子	TPP 参加への是非ー環境問題・エネルギー消費の視点からー
上田 有希	高齡化による消費需要動向の変化ー2020年および2030年における消費需要動向の推定ー
阪本 麻貴	地域間学力格差の決定要因分析
細川 和暉	少年犯罪が起きる要因分析ー少年が輝ける未来へー
荒金 照大	プロバスケットクラブ設立が地方にもたらす経済効果の推計ー徳島県でbjリーグクラブ設立の場合ー
中村 朱里	沖縄経済のTFP(全要素生産性)向上に向けてー製造業・サービス業からみるTFPの決定要因分析ー
大川 裕生	訪日外国人増加の要因分析ー大阪での中国人観光客ー
濱野 南実	健康寿命の決定要因ー都道府県別データを用いた重回帰分析による実証ー
山本 勝也	地震保険の加入率に関する考察
高月 飛鳥	非正規雇用率の決定要因分析
横道 翔伍	育児をしている女性就業者が活躍するためにー都道府県別比較による検証ー
萩野 沙紀	徳島県での農業参入のための経営戦略について
入交 智之	中小企業の倒産率改善に向けてー都道府県別外部要因の視点からー
平林 宗人	

野村 宗訓ゼミⅡ

参画する意識

普段のゼミ運営ではグループワークを通して、インフラ業界の調査をすることが多かった。パワポの作成は簡単にこなせても、フロアのあちこちから飛んでくる質問に即答しなければならず、アドリブの喋りができるまで時間を要した人も。こまめな毎週の録画配信は事後チェックに利用できたことに加え、参加できなかった人がフォローするのも役に立ちました。

様々なイベントでは、手をあげてくれた担当者が持ち回り、みんなの意見を集約するリーダーに。多人数のタテ合宿では、2・3回生にも協力してもらい、プレゼン大会と学年別運動会を盛り上げたのが印象的でした。また、最後の旅行先を決めるために、真剣にチーム別で現地の観光PRをして、入札制で高得点のところを選んだのも、ユニークな試みだったと思います。

先輩から就活情報をもたらえたのは貴重でした。逆に、苦勞話を友人や先輩に聞いてもらい、助けられたこともあったはず。卒業後は広い世界で働くことになりそうですので、コミュニケーションの機会が増えてきます。若手の間はわき役に徹する場合も多いですが、次第に前面に出て交渉する仕事にシフトします。それぞれの立場で常に前向きな参画姿勢を持ち続けてほしいと願っています。

卒業論文一覧

中野 美咲	フィリピンの今後ー共生社会に向けてー
★深津 椋	羽田空港の発着枠配分問題ー市場メカニズム導入の是非ー
本田 優	オリンピックがもたらす効果ー経済と社会の面からー
魚谷 冴佳	大量消費で経済を成り立たせない時代
谷野 風美	日本のITとその未来
杉山 智哉	インバウンドによる関西地域の活性化
平田 晋太郎	地域経済活性化への雇用施策とは
若宮 康佑	日本の空港活性化ー航空貨物輸送の可能性ー
井上 厚志	日本の目指すべきエネルギーベストミックスとその展望
井筒 康介	リージョナルジェット導入による航空業界・国内移動手段の変化
村岡 千晃	リニア開業、2027年からの観光産業ー航空業界との関係性から考えるー
高野 晟智	火力発電輸出とこれからの日本
橋高 勇太	JR九州の成長ーJR他社との比較と成長の過程ー
富田 真之佑	コンセッションによる公共事業での官民連携
金森 雄司	オールジャパンでの日本再興に向けて The Fashion Revolutionー「安くする」時代の終焉ー
常森 雄也	結婚の経済学
大内 一輝	「企業」と「個人」における採用の重要性
今村 朱理	再生可能エネルギーと地域活性化
大森 あかね	スマートシティの展望ー世界のスマートシティを比較ー
堀之内 円香	東京オリンピックに向けての日本の施策
松原 由佳	日本の映画産業の現状と映画館の需要
岡田 瑞希	社会構造の変化と教育ー国際比較を交えてー
加藤 紗生	変化する航空業界における日系キャリアの可能性ー世界一のエアラインを目指してー
竹内 悠里	ファストファッションの光と影
向井 智輝	電力小売自由化について
池田 早織	カジノで日本は観光立国になれるか

藤井 英次ゼミⅡ

目にする事の無い報い

以前面談の際に学生の親御さんが語ってくれた言葉を思い出す。「私は入社以来様々な仕事をしてきましたが、どのような部署においても常に文章を書かなくてはなりませんでした。文章を書くことが会社での仕事のかなりの部分を占めると言っていて良いと思います。せっかく大学に入り、その先は企業で働くというのに（自分の子が）卒業論文を書かずに卒業するなんて考えられません。卒論のあの大変さを経験してこそ大学卒といえるわけですし、あのしんどさを共に乗り越えてこそ本当のゼミ仲間ですよ。」

粘り強く自身の研究課題に最後まで挑み続けるか、それとも安易な妥協で楽な方へと流れて行くか。ゼミ生は今後もそれぞれの人生の様々な局面において、多くの分かれ道に出くわす事でしょう。

疑問を見出す、考える、検証する、議論する、書く。また考え、書き直す。とても骨の折れる作業だったと思います。しかし、諦めずに卒業研究をやり遂げた人は既に大きな報いを手にしています。それは目には見えないものなのですが、必ずやこの先の長い人生において幾度となくあなた自身を助けてくれるでしょう。

目にする事の無い大きな報い。卒業研究をやり遂げた皆さん、心よりおめでとう。

卒業論文一覧

関谷 駿	為替変動が与える株価への影響：日本企業の株価は円ドル為替レートの変動の影響を受けるのか？
中尾 嘉之	日本における特化の有用性
★橋本 由香	企業による為替レートの予想方法

東田 啓作ゼミⅡ

アクティブなゼミになりました

4回生の皆さん、お疲れ様でした。2回生と3回生の時、他のゼミよりもずっとしんどいゼミ活動を楽しそうにみんなで進めてくれたことには感謝しています。グループ研究の中には、大学院生の論文に比べても全く遜色ないものがいくつもありました。自分が学生の時には考えられないくらいの質です。これから困難に直面した際に、この経験を生かしていただければと思います。

3回生は、グループ研究を始めた当初は、本当にしんどかったと思います。にもかかわらず、どのグループも途中で投げ出すことなく最後まできっちり仕上げたところは、とても素晴らしいと思います。この先就職活動がありますが、可能な限り研究へのモチベーションを失うことなく、これまで積み上げた知識とスキルを卒論に生かしてもらいたいです。

2回生は、最初から全員仲が良く、すでに1月末の千刈で3回目の合宿をやったことになりました。また、ゼミ中も真剣に、でもざっくばらんに楽しくディスカッションしていてとても良いです。一緒にいて気を遣うことなく楽しめています。どうもありがとう。これからもこの調子で進めていけば大丈夫だと思います。来年度楽しみにしています。

卒業論文一覧

三木 有紗	キャラクター志向の時代におけるキャラクターの価値
吉田 綾乃	プレミアム商品券事業による中小店舗への影響 -寝屋川市萱島地域における「元気わくわく商品券」をもとに-
藤澤 勇希	電力システム改革を可能にする社会のスマート化について
中西 奏	東京ディズニーランド・シーの人気と魅力
江上 真司	岸和田市民とだんじり祭り -なぜ岸和田の人々は命を懸けてだんじりを曳くのだろうか-
田中 麻美子	ご当地ゆるキャラの違い -ゆるキャラによる地域貢献-
井上 楓	犬の幸せ -人と動物の共存を考える-
松本 誠人	出版業界の今後の成長
森田 絢子	時間の価値は何円か -関学生と社会人の比較-
★杉本 遼太	日本の愛玩犬に対する動物愛護の問題点及び対応策
阿知波 敬子	子どもは敏感、おとなは鈍感 -子供から大人への知覚の変化-

藤原 憲二ゼミⅡ

今後の活躍に期待

研究演習入門での募集要件が緩かったため、2次申込で20人の定員に達するという予想外の形で始まった。しかし途中で単位を落とした人や内定が決まり単位も足りているのでゼミを履修する必要のない人が抜け、最終的には12人に落ちついた。最後までやりぬいたゼミ生は自信をもって社会で活躍してほしい。

卒業論文一覧

内田 光樹	グローバル人材の育成について
井上 尚也	東北大震災が及ぼす経済効果について
★森岡 拓也	ロボット産業の展望:イノベーションと技術動向
井上 晃大	人的資本論とシグナリング理論から考察する日本の学歴制度と教育問題
奥島 康司	法人税について学生が持つべき知識とその展望について
小林 加奈	アウトレットモールと地方経済
出口 絢菜	航空業界の展望
鈴木 秀真	日本における将来のスポーツマーケットの展望
渡邊 健人	シェールガスが及ぼす日本と世界への影響
佐竹 愛香	東京ディズニーリゾートの経済学:経営戦略と経済効果
高山 鎮巨	広告の効果を最大化するには
森 隆之	住友林業について

藤井 和夫ゼミⅡ

卒業おめでとう

みなさん、卒業おめでとう。2年半なんて、終わってみればあっという間でしたね。いつか蘇る思い出も今は心の奥にしまって、未来に向かって前進あるのみ。みなさんは、これから脳目もふらず自分の道を切り開いて行かれるでしょう。その新しい世界が、希望に満ちて輝かしいものであることを祈っています。

最後にひとつ。みなさんは、「壁の花」という言葉を知っていますか。パーティなどに参加しながら、中央の会話やダンスにまったく加わらないで、壁にもたれて一人でいる人のことです。ゼミでそんな光景を目にした記憶があります。正確には、壁ぎわでごく親しい気心のしれた隣とばかりささやきあっている「ひと群れの壁の花」です。これも「作法」にはかかっていません。みなさん、「壁の花」にはならないで、ゼミ、人生のパーティは中央で踊りながら楽しんでください。卒業おめでとう。

卒業論文一覧

森本 つくし	ファストファッションの今後ー日本経済を活性化させる影響はあるのかー
谷本 卓	マスメディアによる情報発信が経済にもたらす影響
西澤 慶輔	スポーツの指導現場における体罰の必要性
羽地 ひかり	電子書籍は出版業界の再興の手段となるか
平松 梢	日本女性が働きやすい社会づくりについて
福里 道広	日本が二酸化炭素排出削減目標を達成するために
岡島 利恵	アダム・ミュラーから学ぶことー過去は失われるのかー
伊東 義敬	将来の風力発電の役割
塚本 智仁	日本企業が震災被害を最小限に留めておくための対策
高見 将平	日本の音楽産業の今後の展望
★船木 俊佑	日露戦争前後から戦間期における軍事費についてー日露戦争の外債募集とワシントン体制前後の軍事費の財政圧迫についてー
安岡 亨	日本の製造業が低ROE（自己資本利益率）である要因
中田 陽太	BtoB企業がソーシャルメディアを使って売り上げを伸ばすために
芥川 淳生	アイルランドのジャガイモ飢饉ー如何にして飢饉は社会を変えたかー
杏橋 遵	ゴルフを普及しスポーツとして定着し発展させるには

本郷 亮ゼミⅡ

朋友と交わりて信ならざるか

二期生の皆さん、卒業おめでとう！本当に仲の良い、笑いの絶えない学年でした。覚えていますか、2013年11月の緒戦ディベート4連敗。今思えば当時の私の指導のつたなさのゆえですが、一時はこれからどうなることかと肝を冷やしました。しかしその後のV字回復には、まったく舌を巻きました。皆さんの天来の明るさ、仲の良さ、(普段はそうでもないが)要所で見せる強い積極性が、創業間もないわがゼミを安定した発展の軌道に乗せたのです。この「大仕事」を果たしてくれた二期生に大変感謝しています。

朋友と交わりて信ならざるか(友人つきあいの中でちゃんと信義を守ったか?『論語』学而篇)。門出にあたり、この言葉をみんなに贈ります。友は人生の宝。友は量より質。年をとり、これを痛感します。どうか仲間を信じ、かつ仲間から信じられる人物となるように努力してください。これから成長し続けてください。私も頑張りますので。

5月の連休にはよいよ第1回ゼミ同窓会(「マスター・フォア・サービスの会=マスフォの会)を大阪で開催します。元気に再会できるのを楽しみにしています。仕事の苦労話もたくさん聞かせてください。

卒業論文一覧

- | | |
|---------|--|
| 吉田 衣里 | (共著)人工知能社会とその幸福 |
| 重信 亮介 | アメリカの知的財産権から学ぶこと |
| 大橋 侑季 | (共著)人工知能社会とその幸福 |
| 川島 拓朗 | 失われた十年と現代における日本とアメリカの競争力差、またそこから学ぶこれからの日本企業の在り方 |
| ★堀江 正人 | (共著)芥川賞受賞作品に表れた経済・社会・政治思想 1935-2000 一全 128 作品完全読破・テキストマイニングを経て |
| 藤原 拓也 | 拡大する音楽産業 |
| 増田 瞬 | 経済大国である日本がスポーツ大国になれない原因 |
| 坂東 篤磨 | 宝くじの活性化による公共事業支援 |
| 栗山 侑大 | 日露戦争における高橋是清の活躍の要因 |
| 山根 郁摩 | 映画館に来てもらうためには |
| 後藤 雅樹 | 日本の軍需産業の在り方：我が国の武器製造業のこれまでとこれから |
| 丸橋 昂平 | 教科書に載っていない「高田屋嘉兵衛」—商人としての高田屋嘉兵衛成功の要因 |
| 池ヶ谷 憲吾 | 食品スーパー業界における成長とイメージ転換のための競争論 |
| ★鈴木 健人 | (共著)芥川賞受賞作品に表れた経済・社会・政治思想 1935-2000 一全 128 作品完全読破・テキストマイニングを経て |
| 山田 健太 | 高校の進路と大学の就職活動における現在の問題点と打開策 |
| 徐 希錫 | 小さな政府の未来：次世代ディストピア論 |
| 服部 圭一郎 | セブンカフェの成功と次なるコーヒーブーム |
| 鈴木 剛 | 三井発展における三野村利左衛門の功績 |
| ★山本 麻莉子 | (共著)芥川賞受賞作品に表れた経済・社会・政治思想 1935-2000 一全 128 作品完全読破・テキストマイニングを経て |

舟木 譲ゼミⅡ

置かれた場所で

ご卒業・研究演習終了おめでとうございます。私にとって初めての研究演習ということ、経済学の専門ゼミでないということ、そして先輩・後輩のいないゼミという条件の中で私自身もまた皆さんにとっても手探りの二年半であったかと思えます。四年生になる時点で進路の関係で三名が抜けることになりましたが、そのあとも連絡をいただきそれぞれの道を歩んでいることに安心しております。

また特に今年度から就職活動時期が大きく変更され皆さんは本当に大変だったと思います。さらに部活動の重責を担っていたゼミ生もあり、複数の課題を克服しなければならない状況の中で、それぞれが決めたテーマに取り組み、卒業論文の作成までに至らなかった人も含めて4月からいよいよ新しい時を迎えることになりました。学生時代とは異なり、決まったゴールのない、また多種多様な人々と環境の中での生活が続きます。多くの迷いや戸惑い、時には挫折も経験することと思いますが、それぞれが「置かれた場所」を開学での経験を自信として「楽しんで」過ごしてください。卒業後も私たちの交わりは続きますのでまた様々な経験を分かち合いに来ていただけることを期待しています。

卒業論文一覧

- | | |
|--------|---|
| 押谷 直樹 | 三駅交流圏の機能性 |
| 長統 悟 | フランクフルトとホスピスの精神から現代看護へどのようなメッセージを送ることができるのか |
| 重川 暁 | 現代の若者の消費行動について |
| 八木 啓太 | 消費税の諸効果・海外比較 |
| 岡田 直大 | 外国人労働者が有する日本での可能性 |
| 小畑 優人 | ネット問題について |
| 梶原 久暉 | アメリカにおいて、どうすれば人種差別問題を解決することができるのか |
| 大野 正貴 | 行動経済学からみるセブン—イレブンにおける経済活動 |
| 櫛本 瑞貴 | 日本の農業協同組合の特別性 |
| ★廣畑 駿 | 大阪と東京の食に対する認識の違いは何か |
| 上枝 佑多 | 資本主義とボランティア |
| 中西 翔馬 | 日本のバスケットボールの知名度・人気の低さの原因を探る |
| 齊藤 周斗 | 現代における広告の意義 |
| 内山 直人 | 北陸新幹線 金沢・長野間開業が北陸地方に及ぼす開業効果の予測 |
| 伊藤 淳 | 2020年東京オリンピックが日本にもたらす影響 |
| 青木 悠太郎 | 本当に食品添加物は人体に影響を与えるのか |
| 石川 泰雅 | 今年のプロ野球の順位は妥当だったのか |
| 下山 啓次郎 | 応援団について |
| 清水 菜々 | 電子マネー時代は来るのか |

松本 有一ゼミⅡ

これからの活躍を祈ります

「持続可能な社会の在り方」というテーマで、当初 21 名でスタートしたゼミでした。卒業論文を提出した 7 名のほかに次の 14 名が在籍していました。記録として残します。

萬谷利華、大垣裕祐、中根諒哉、川崎嵩優、高杉勇人、酒井芳浩、林滉輔、徳永一貴、六田翔、山口穰、島ノ江勇太、篠原菜摘、川嶋達也、土屋宗一郎。

スタート時は、何のためにゼミに入って来たのかわからない人が少なくなかったのですが、3 年生秋のインゼミ大会に向けての準備では、最終的に研究発表会に出なかったグループも含めて真面目に取り組んでくれたと思っています。それを卒業論文にまでつなげて行って、面白い論点で展開してくれた研究もありました。卒業後は、それぞれの場所で新たな気持ちで取り組んでいってほしいと思います。皆さんの未来が輝かしいことを願っています。

卒業論文一覧

飯田 匡祐	中国の環境問題
★宮路 一史	VW の排ガス不正問題発生の背景と今後の規制の方向性を考える 地球温暖化に対する日本の取り組み
山脇 仁志	日本のバスケットボールの歴史と観客動員数
後藤 紘樹	数を伸ばすために考えられる取り組み
杉田 浩彰	スマートコミュニティがもたらす日本経済と環境の変化について
下池 凜	環境ビジネスの在り方
波多 慶丞	温暖化予測と適応策—南国日本をこう生きる

前田 高志ゼミⅡ

最高の教え子たち、至福のとき

この 2 年半、最高の教え子たちとともに学び、至福のときを過ごせたことを感謝します。皆さんは兵庫自治学会、名市大・関大・同志社との 4 ゼミ報告会、その他学内外の報告会、そして集大成としての、西宮市大学交流センターでの学外者を前にしてのプロジェクト研究報告会を立派に成し遂げ、兵庫観光まちづくり研究会への参加やヒアリング調査など素晴らしい研究成果を残されました。勉強だけでなく合宿や飲み会でも大いに盛り上がり、本当に楽しく、仲の良いゼミでした。

皆さんはいよいよ世に出られます。これから皆さんの本番、メインステージです。皆さんのすべてが幸せな人生を送って下さることを願っています。最後に私の大好きな映画「ニューシネマパラダイス」で、主人公の若者トトを送り出す老映写技師アルフレードの別れの言葉を皆さんに送ります。

戻るなよ
私たちが思い出すな
手紙も書くな
郷愁にくじけずにすべて忘れろ
我慢できずに戻ってきてもうちには入れない
いいな、何をやるにせよそれを愛せ
子供のころパラダイスの映写室を愛したようにだ

卒業論文一覧

臼井 千紗	地域への人口移動の促進
三村 拓也	ベンチャー企業の資金調達～ベンチャーキャピタルによる支援～
内田 龍之介	地方空港による地域活性化～富士山静岡空港を例に～
中岡 佳苗	芸術支援のための文化政策～企業メセナ、アート NPO の必要性～
酒井 汐理	地方債の信用力格差にどう向き合うか～地方債の市場活用～
小谷 咲希	少子高齢化にともなう人口減少問題～少子高齢化が地方財政に与える影響について～
西原 広大	地域ブランドの誕生とこれからのあり方
武藤 節	これからの地震保険のあり方～国による関与はどうあるべきか～
瀧川 美咲	TDR の 10 年計画～不況を知らないテマパークの経営と今後～
宮本 のぞみ	情報通信技術による地方創生—地方テレワークの普及に向けて—
福田 吉功	人口減少社会における兵庫県の政策
黒木 稀衣	大阪のインバウンド戦略
塩井 紗里	観光資源を活かしたまちづくり～明石市を事例に～
内田 美弥	中古住宅流通市場の活性化
梶 みのり	北陸新幹線開業による石川県の地方創生について～観光・企業誘致の観点から～
矢野 貴大	公立病院の必要性と病院 PFI ～高知医療センターの試み～
武隈 大輔	外国人旅行者増加に向けた行政の活動
松下 智美	ふるさと納税受入数の差が生まれる要因～大阪府下の自治体を例に～
木下 大二郎	若年層の地方定住促進の政策—U・I ターン就職の現状—和歌山県を事例に—
★井上 侑華	商店街の活性化への道～大阪淡路本町商店街を事例に～
西井 勝久	関西経済長期低迷～継続的な訪日外国人旅行者の誘致策～
大出 玲郁	現在の高齢者からみる将来の高齢者～収入や貯蓄はどうなるのか～
窪 宏樹	日本の公的年金問題
里中 江哉	インフラ老朽化問題とその財源確保手段について
坂本 光浩	空き家問題の現状と課題—これからの空き家問題の改善策を考える—
樽本 佑弥	景観によるまちづくり

安岡 匡也ゼミⅡ

卒業おめでとうございます。

私は関西学院大学に来て3年となり、この大学での初めてのゼミ卒業生を出すこととなりました。初年度のゼミということでゼミ生が色々とそのカラーを出すために努力してくれたことと思います。

3年次では学内との合同ゼミ、インゼミ大会での研究報告を行いました。その報告に向けて色々準備をして色々勉強になったのではないのでしょうか。4年次では就職活動のためになかなかゼミ学習に十分な時間を割けなかったのではないかと思います。是非全員揃って大学生のまとめとしての卒業論文を提出して欲しかったのですが、無事に何事もなく卒業できたので良いでしょう。

私の大学時代を振り返ると(2001年卒業なので15年以上も前のことだが)、あまり生産的な活動をしていなかったと思います。バイトに、友人との遊びなどに時間を費やし、あまり勉強してきませんでした。その反動なのか今は色々学びたい欲求に駆られます。

大学を卒業してから学ぶことは多いと思います。また、改めて色々勉強したいことが出てくると思います。勉強したいと思った時から勉強すれば良いでしょう。そのためにも健康にはどうかご注意下さい。また気軽に研究室にお越し下さい。

卒業論文一覧

西條 翔大	介護保険法改正～日本の介護のあるべき姿～
石本 稚香子	ペットブームと少子化～ペットは子どもの代替財となりうるか～
越智 雅也	非正規雇用
谷口 紀章	マイナンバー制度の是非について
芳田 裕紀	これからの日本における高齢化問題～高齢者の雇用、労働問題について日本で必要な課題～
門脇 大地	ブラック企業の撲滅がもたらす労働生産性の向上
★鈴木 祐希	フードデザート問題と地域社会のあり方
南 賢志	生活保護のあり方について
眞嶋 伸豪	雇用状況における少子化への影響
牧野 由実	若年世代に対する社会政策～ひとり親世帯が抱える「子どもの貧困」について考える
津田 貴裕	障害者の雇用問題
平野 るり子	少子化ときょうだい事情の関係性
白川 桃子	スターバックスの障害者雇用の現状とこれから

村田 治ゼミⅡ

ダブルチャレンジ

今年卒業のゼミ生は、いつものように個性的な学生が多く「多士済々」の感が強い印象を持っています。大学時代に専攻プログラムや海外経験をした学生も多く、また、体育会や文化総部の学生もたくさんおり、それぞれが充実した学生生活を過ごしたのではと思います。ゼミでの勉学にも打ち込み、文字通り、ダブルチャレンジ、あるいは「文武両道」を体現してくれました。二年半、ゼミ生個々人にはいろんなことがあったと思います。特に、就職活動では苦労したと思いますが、それらが現在の自分を形成していると考えて下さい。

これからは、仕事の関係で会える機会が少なくなると思いますが、ゼミでの友人は一生の宝物と思い大切にしてください。ゼミの仲間を大切に、決して諦めることなく自分の目標に向かって進んでいってください。社会に出てからも、目の前の仕事だけでなく、10年ぐらいのスパンでテーマを選んで勉強を続けて欲しいと思います。卒業後は大学時代以上に、ダブルチャレンジが重要となります。20年後に、この中から、日本を代表する経営者や革新者が出ることを心から期待しています。

卒業論文一覧

ス波 美早	女性と高齢者の雇用増加と地域経済の活性化
妹尾 宗紘	働き方改革と生産性
三島 由華子	外国人観光客が関西経済にもたらす影響
山本 ゆい	女性の活躍による日本経済の成長
福井 恵輔	移民が日本経済に与える影響
楢田 敦子	フェアトレードにおける生産国の経済効果
筏 信一郎	高等教育が生涯賃金に与える影響について
松村 美保	トルコへ日本企業が進出する有効性
大塚 美奈実	マイナンバー制度の可能性について
松本 佳祐	日本人とドイツ人の働き方と生産性
宮川 理紗子	高齢社会と社会保障を考える 一年金の経済効果一
藤井 美穂	障害者雇用は業績を上げるのか
磯江 諒亮	流行色と景気の関係
樋口 拓磨	物流から見る国内景気 一梱包資材の生産量変動から読み解く一
石井 智也	女性労働者の活躍が日本経済に与える影響
森口 佳名子	アニメ聖地巡礼の経済効果
小林 昂太郎	ネット広告の経済効果
森 啓吾	大型商業施設が生む経済効果と周辺地域の将来
徳舛 宗哉	経済状況と肥満
富満 直斗	アジアにおける道路整備による経済効果
★笠井 智成	年収の決定要因 一学歴は年収に影響を与えるか一
山岡 千華	県民生産と健康指標
西川 奈津美	ゆるキャラによる地域活性化と経済効果
黒田 里紗	日本女性の貧困問題の解決策

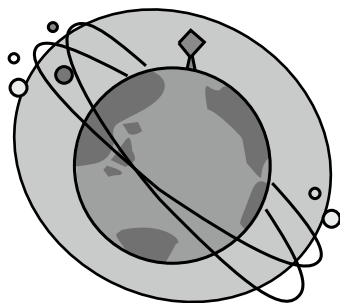
山田 仁ゼミⅡ

第一期生の旅立ち

二年半にわたってコミュニケーションとメディアを研究した。研究演習入門と研究演習Ⅰでは、メディア論的トピックをめぐってグループによるプレゼンとディベートを行い、メディア・コミュニケーション論的な問題意識に目覚めた。研究演習Ⅱでは、卒業研究として言語コミュニケーションと言語メディアに射程を絞った。非言語的事象と比較することによって言語を相対化することから始め、言語コミュニケーションと言語メディアの効用と限界を確認することができた。特に、就職活動における情報伝達とメディア使用を強く意識した卒業研究ができたことは、大きな成果であった。二年半の研究を通して、人間がメディアを変化させる一方でメディアも人間や人間関係を変えてきたこと、そしてメディアが単なる情報の通路ではなく、メディア自体が意味世界を積極的に創造し再編成することを理解することができた。授業を通して万全の準備の必要性を強く説いたが、これに対する手応えは不完全燃焼に終わったように思う。熱すぎず、かといって冷たすぎないゼミの雰囲気は、私にとって心地よかった。ご卒業おめでとう。

卒業論文一覧

横山 知輝	ビジネスにおける非対面式コミュニケーション・ツールの使い分けの必要性
金平 晃生	日本における顔文字の多様化
北島 大樹	電子化社会における手書き履歴書の存在と効用
竹内 雄一	電子教科書導入によって起こる生徒の心理的变化
★神戸 耀	電子化社会における手書き履歴書の存在と効用
寺山 航平	日本における顔文字の多様化：顔文字の発展要因とは
山裾 知春	ビジネスにおける電話の有効性：電話とメールは補完関係にあるのか
藤田 良平	電子社会における手書き文字の存在と効用：なぜ手書き文字はなくなるらないのか
北村 時皇	人々はなぜ出身地ではない方言を使うのか
今村 勇介	日本における顔文字の多様化
鶴田 航大	電子教科書を学校に導入するにあたり生じる生徒の心理的变化と懸念される事項
岡崎 陽介	ビジネスにおける非対面式コミュニケーション・ツールの使い分けの必要性：報告・連絡・相談に適したツールとは
森田 美和	デジタル教科書導入によって起こる生徒への心理的变化



懸賞論文の選考について

経済学部懸賞論文は個人執筆論文部門と共同執筆論文部門に分けて審査し、それぞれの最優秀論文に賞状と副賞が授与される。本年度は個人執筆論文部門に3本、共同執筆論文部門に11本、計14本の応募があった。選考委員会の審査と教授会の議とを経て以下の論文に賞を与えることになった。

経済学部懸賞論文受賞者と論文名

< 個人執筆論文部門 >

日比野友美 (栗田匡相ゼミ)

「カンボジアにおける女性出稼ぎ労働者の主観的幸福の決定要因」

< 共同執筆論文部門 >

阿知波敬子・我部直人・杉本遼太・森田絢子 (東田啓作ゼミ)

「貧困層の教育投資」

< 講評 >

個人執筆論文は、カンボジアの首都プノンベン近郊の縫製工場に出稼ぎに来ている女性労働者を対象に、その主観的幸福の決定要因について分析したものである。経済学において、従来のように所得や効用を人間の幸福をはかる代理指標とするのではなく、経済的変数に加えて文化や政治や個人の意識など、より広い指標を用いて主観的な幸福度を決定する要因の分析が進められている。本研究では、カンボジアの繊維産業の中で重要な位置を占める農村からの女性出稼ぎ労働者に対して直接行われたアンケート調査結果を用いて計量分析を行い、自分をどの程度幸福と感じているかという幸福度のレベルによって結婚観を含めた主観的幸福の決定要因が異なっていること、経済的要因の労働収入が幸福度に影響を与え、また未来志向や我慢強い等の心理的要因が幸福度に正の影響を与えること、プノンベンへの労働移動後の経過年数が多いほど幸福度が増大すること、自分の時間の使い方の多様化や生活のゆとりが幸福度を高めることなどが確認された。中国を除いてはまだ少ない途上国の主観的幸福度の決定要因を現地調査によって明らかにしようとする研究意欲と、用いられた計量分析の手法は、いずれも学部学生の論文として優れたものと高く評価された。

共同執筆論文は、インドネシアで1994年度から義務教育化された中学校の進学率が約86%、高校進学率については約56%にとどまっている原因を、漁村を対象に行ったアンケート調査を用いて分析したものである。教育は、特に低所得者層の知識と技術水準を高め、所得獲得の能力を高める。すなわち途上国の労働者の質的転換を左右することから、重要な課題となっている。本研究では、経済生活・社会生活が多様性を極め多くの経済格差をもつ島嶼国家インドネシアの、カリマンタン島、ジャワ島、スラウェシ島という三つの異なる地域の漁村でのアンケート調査のデータを用いて回帰分析し、親の学歴が高いほど子どもを学校に行かせたいと思い、子ども自身も進学を希望すること、子どもの年齢が高いほど親が教育に対して支払おうと思う金額が高くなること、家庭内の女子の比率が高いほど支払い意思の額が高くなること、家庭の貯蓄が多いほど教育への支払い意思が高まること、一方で家庭の所得(月収)に関しては、調査対象に漁業従事者が多く、家庭内消費が行われたり政府からの補助金があるなどの影響からか、教育への支払い意思額に負の影響を与えていることなどが明らかにされた。問題意識が明確であり分析手法も優れているほか、想定とは異なる意外な分析結果についても十分な検討がなされているなど、優れたグループ研究であると高く評価された。

(懸賞論文選考委員会委員長 藤井和夫)



①わが国の大学を取り巻く社会情勢は構造的に動きつつある。こうした乱世は実力がモノを言う下克上の時代なので、わが経済学部も油断大敵。しかしこの場合の「力」とは一体何でしょう？色々ありますが、私はこれからの最大の力は逞しい個性、特に伝統に基づく（したがって真似されにくい）個性だと信じます。歴史ある本学は、そのような無形資産に恵まれています。失われた良き伝統を再興するのも面白い。本誌『エコノフォーラム』も NOBLE STUBBORNNESS（高貴な強情さ）の精神をもって、一つの伝統となりますように！（本郷）

②今回の特集テーマは「大阪都構想」です。大阪都構想について経済学部生のみなさんがどのような意見を持っているのかを知るために、アンケート調査をしました。アンケートの回答からは、このトピックスに対する関心の高さがうかがえました。今回の特集記事・

座談会には、大阪都構想の問題を考える上でのヒントがたくさん詰まっています。ぜひ読んでいただいて、自分の考えを深めてもらえればと思います。最後に、今回のエコノフォーラム作成に尽力された委員会・事務職員の皆様に御礼申し上げます。（秋吉）

③関西学院大学での初年度が終わろうとしている。仕事柄、現在の自分と過去の自分の比較は容易である—パソコンから過去の研究ノートを開くだけだ。大学院時代、特に修士課程の頃は数週間前のノートを眺めれば過去の自分への優越感に浸れたものだが、今や1年前の自分は良きライバルになれそうである。遠からず過去の自分への劣等感で涙が止まらなくなるに違いない。おそらく平均より少しだけ頭を鍛える機会に恵まれている31歳であるが、まあこんなものである。今年受け持っていた学部1年生諸賢、そして誰よりも12年前の自分はもう少し焦っても良いのだろう。（白井）

④ついに『エコノフォーラム21』の21を超える第22号が刊行されました！教員、職員、そして、エコゼミの学生さんにとって結構な作業量が要求されるこの『エコノフォーラム』ですが、22回も続いたことに驚き、素直に喜んでおります。継続していいですね。とはいえ、来年、原稿の依頼が来たら「やれやれ、またか」とため息をつくことでしよう（笑）。（T.N）

⑤自分の所属学部と専門とが異なる私にとって、本誌は経済学部で行われている様々な活動の中身をつぶさに知ることができる重要な情報源です。いろんな記事を読むたびに、もっと聞きたい、知りたいと思うことが多く、日々自分の身近にありながらきちんと向き合う機会を逃している自分を歯がゆく思います。本誌の頁を気の向くままにはぐりながら、ここにあふれる知のきっかけに接し、新たな知的興奮の駆動へとつなげる。経済学部生にとって、本誌はそんな存在であってほしいと思っています。（長谷川）

⑥関西学院大学文学部を卒業した後、

新卒として入職し早くも5年という月日が経ちました。大学時代は部活漬けの毎日で夢の大学生ライフとはかけ離れた日々でしたが、今では全てが楽しかった思い出です。きれいなキャンパスに足を踏み入れると、わくわくし、自然と笑顔になれる素敵な力が関学にはあります。こんな素晴らしい環境で日々仕事ができることに感謝し、これからも精進していきたいです。エコノフォーラム編集委員の皆様、エコゼミ委員会の学生さん、そして本冊子を作成するにあたりご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。（鈴木）

⑦2015年4月に校友課から経済学部事務室に異動してきた。校友課とは関西学院と卒業生（約20万人）や保証人（約54,000人）の窓口としての役割が求められる部署である。関学の輝きが増せば、これらの方々と共に喜んで下さり、そうでなければ…。関西学院が多くの方に支えられ、期待されていることを実感する日々であった。そして経済学部の事務室である。学生のみなさんが充実した学生生活を送れば、関学の輝きも増す。そういったことをサポートできる部署に来たことに感謝しつつ、多くの方々の期待に応えるような役割を果たしていきたい。（土田）

Publisher

田中 敦（経済学部長）

Chief Editor

本郷 亮

Editors

秋吉 史夫
白井 洸志
西村 智
長谷川 哲子

Managing Editor/Staff

植田 幸利（経済学部事務長）
鈴木 亜弥美
土田 系

発行／関西学院大学経済学部
〒662-8501
西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL. 0798-54-6204
©2016 All rights reserved.

経済学部棟の紹介

◆ チャペル



チャペルアワーに礼拝を開催しています。ハンドベルや聖歌隊をはじめとした学生団体の出演も。詳細スケジュールはチャペル週報でご確認ください。

◆ 学生パソコン室

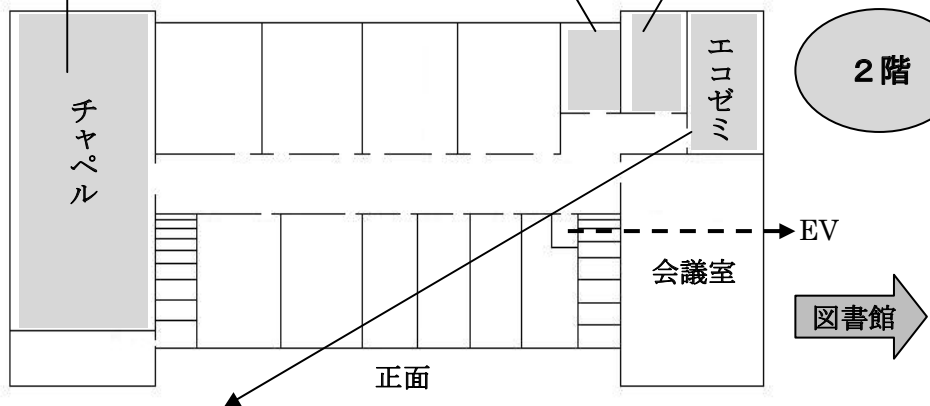


共同作業用（主にゼミ活動）に開放しています。利用申込にあたっては経済学部事務室にお越しください。

◆ ゼミ活動室



共同作業用（主にゼミ活動）に開放しています。利用申込にあたっては経済学部事務室にお越しください。



◆ エコゼミ委員会室



スポーツ大会、インゼミ大会、関関戦の運営や、エコノフォーラムの編集を担当するエコゼミ委員会の部室。これらの大会参加者で相談のある方は是非訪れてください。

地下1階

◆ ポプラ



地下にある経済学部生の憩いの場。自動販売機やゼミに割り当てられているロッカーもあり、とても便利な部屋です。

◆ 事務室



各種手続や分からないことがあれば経済学部事務室を訪れてください。

◆ 掲示板

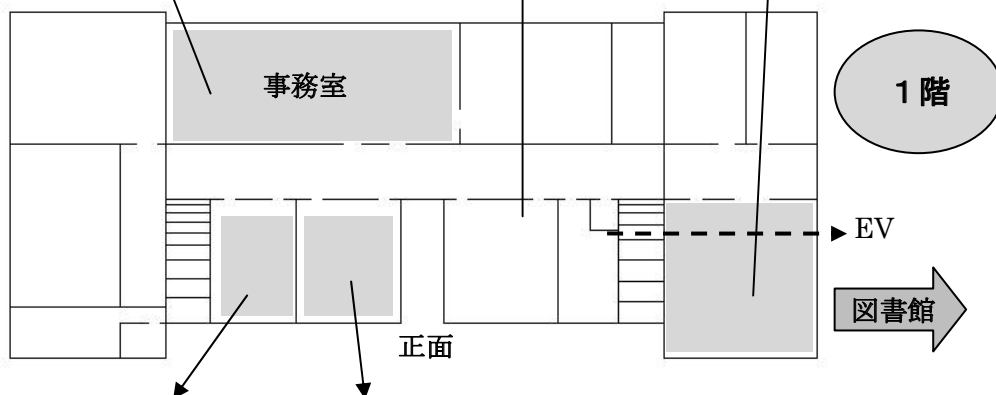


授業や定期試験、留学プログラム、奨学金をはじめとした各種情報を掲示。重要な情報がある場合もあるので欠かさずチェックしてください。

◆ 談話室



経済学部生の憩いの場。室内のテレビでは海外の番組が流れています。



◆ 学生ワークルーム



共同作業用（主にゼミ活動）に開放しています。利用申込にあたっては事務室にお越しください。

◆ 資料準備室



ゼミで使用する資料等の印刷やパソコンの貸し出し、レポートの受理を行っています。利用にあたってはよく注意事項を確認して申し込んでください。

